

問×美

二〇一五〜二〇一七 記録誌





問屋町は金沢市の西に位置し、その名のとおり広々としたスペースに問屋業を営む会社が集合した地域である。昭和40年初頭にその建設が始められ、現在においても当時の高度経済成長期における典型的なデザインの建物が多く存在している全国でも貴重な地域となっている。「問屋まちスタジオ」はその中でも唯一9つの会社が長屋状に連なった建物のひとつであり、広々とした道路に面したその外見の穏やかさからは想像できない奥まった空間の広がり、非常に開放的な空間となっている。2010年5月、金沢美術工芸大学と協同組合金沢問屋センターが「問屋町の街づくりに関する協定」を締結、アートを活用した新しい街づくりの取り組みをスタート。その中心的な発信の拠点として、2011年3月、問屋センターより提供を受けた旧印刷工場(床面積436平方メートル/約132坪)を活用してオープン。

問×美 二〇一五～二〇一七 記録誌

編集・デザイン
金谷 亜祐美
(金沢アートグミ)

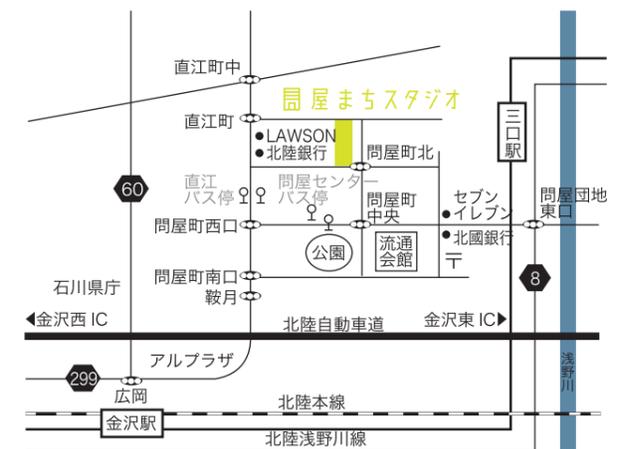
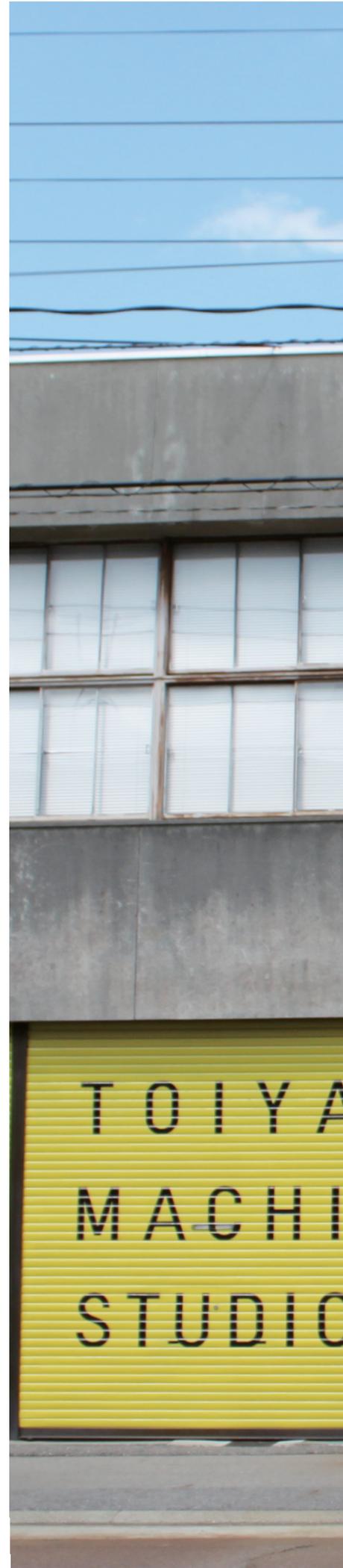
発行
問屋まちアートファクトリープロジェクト実行委員会

助成
いしかわ県民文化振興基金

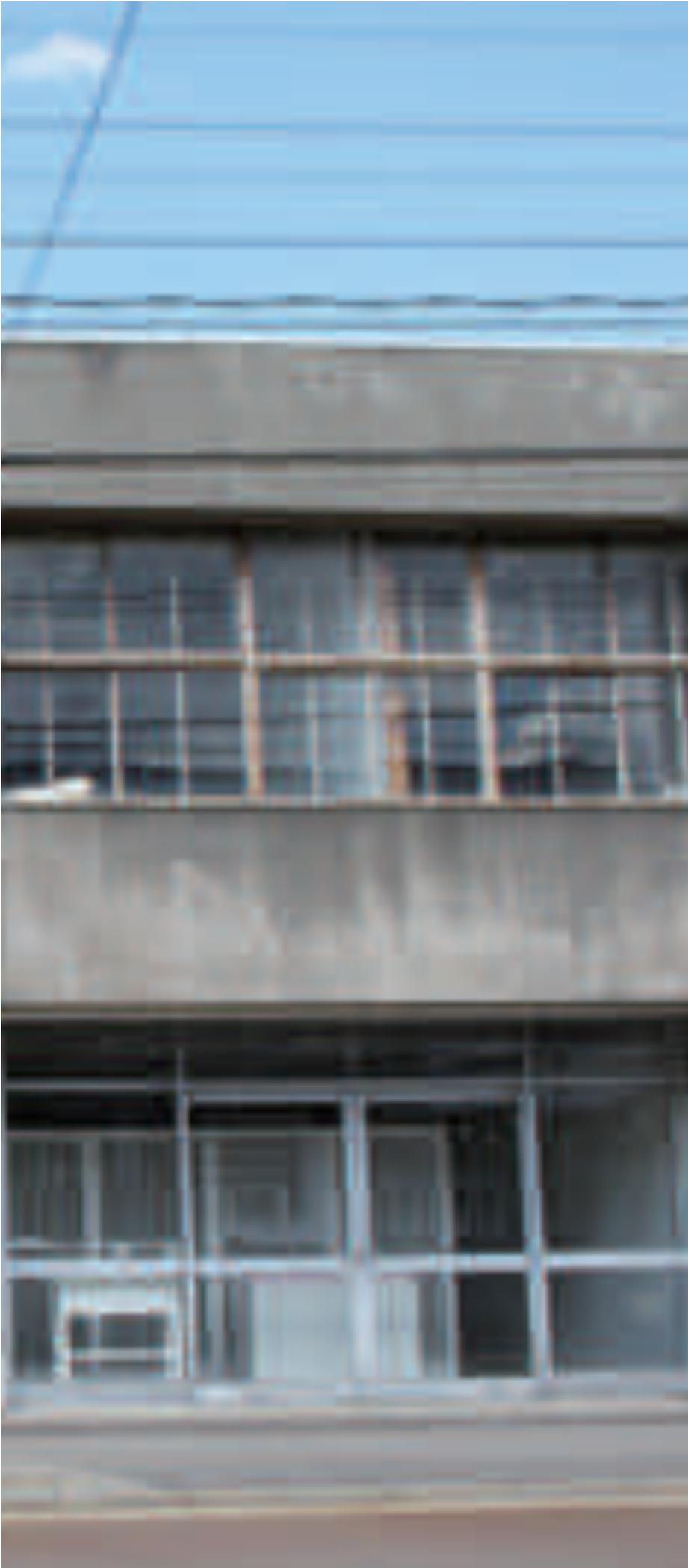
発行日
2018年3月31日

撮影協力・画像提供
池田 ひらく、奥 祐司

アドバイザー
坂本 英之、中瀬 康志、真鍋 淳朗



〒920-0061 石川県金沢市問屋町1丁目90
<http://toiyamachi-studio.com>



問×美

二〇一五～二〇一七
記録誌

ものが茶の湯であり、そこで生まれたであろう「対話」が私たちのテーマでした。この企画展示にあわせて5人の有識者達に、芸術と産業、金沢美大と問屋町、伝統と革新、古典と現代、或いはアーティストと企業人などの課題について対の概念で語っていただき、問屋まちスタジオとそれを中心にした活動への示唆に富む助言をいただくことができました。また、オープニングにあわせて、地域の音楽家を招いた音楽会も開催しました。

第五回目となる「問×美2017」では、前年と同様に「対話」をテーマとし、利休の待庵をモチーフにした茶室を6名の作家とともにつくり上げ、実際に茶会を開き、音楽会を開催しました。対話には以下に述べる三つのサブテーマがありました。参加作家はそれぞれ、問屋町の製品や商品を使って作品をつくるというルールの中での制作となりましたが、それぞれに今後につながる遊び心のある優れた作品が生まれました。

一つには、「問屋と芸術の対話」です。作家と工業製品をつなぎ、経済優先の問屋と感性優先の芸術の融合をめざしました。問屋町で製造し、あるいは扱っている商品と各作家が対峙し生み出された作品が、問屋まちスタジオの「待庵」の空間構成の要素となり、そこから作家による商品、製品との対話が生まれました。

二つ目として「人とひとの対話」があります。対話を「もの」の象徴として起絵茶室を、また同様に「こと」の象徴として茶会を設定し、茶会本来の目的で人とひとをつなぎ、問屋まちスタジオをアートを中心に「ひと」、「もの」、「こと」でつなぐ「アートファクトリー」とする構想の組織づくりやネットワークづくりが垣間見える場となりました。

三つ目、最後は「工芸と建築の対話」です。かつて工芸的であった建築、空間における芸術的職人技が輝いた時代がありました。それらは機能的で装飾を排した意匠や合理的で手業による設えを排した近代以降の建築が失ってきたものでありました。ここでは、もう一度、建築と工芸・アートが対話する実験の場としました。

なお、今回の企画は協同組合金沢問屋センター設立50周年と金沢美術工芸大学との連携協定調印7周年を記念したもので、参加作家によるアートフェアと問×美2015～2017の3年間を振り返るアーカイブ展を同時開催しました。オープニングではダンス公演があり、展示期間中に8回の茶会を催し、クロージングではチェロ演奏会があり、各回とも学生、作家、地域住民、問屋団地の企業人の多数の参加がありました。

利休と秀吉の対話(闘い)は、最後は利休の切腹という悲劇で終わるわけですが、この私たちの企画による社会実験は悲劇で終わるわけにはいきません。7年間の活動を振り返って、今後について考えてみますと、工芸や美術だけではなくデザインの活躍も期待しつつ、「もの」の制作を通じて起こる「こと」の起点として、更なる発展段階を迎えることになるでしょう。

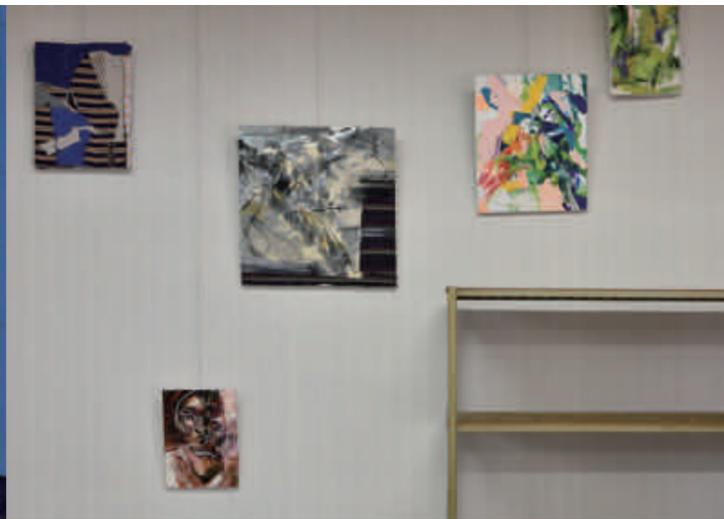
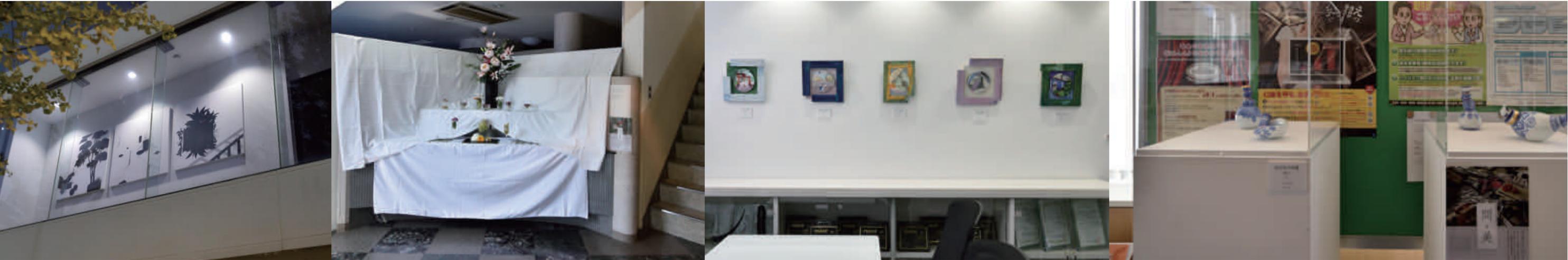
問×美2015	・・・	2
問×美2016	・・・	6
対話① 西川 英治	・・・	10
対話② 上町 達也	・・・	16
対話③ 黒澤 伸	・・・	23
対話④ 川本 敦久	・・・	31
対話⑤ 眞壁 陸二	・・・	37
問×美2017	・・・	46
作家インタビュー／宮崎 匠	・・・	52
作家インタビュー／岩井美香×越野 勉	・・・	54
作家インタビュー／戸出 雅彦	・・・	56
作家インタビュー／伊能 一三	・・・	58
メディア掲載情報	・・・	60
これまでの「問屋まちスタジオ」と、 これからの「アートファクトリー」を問う	・・・	61

問×美

TOIKAKERUBI 2015 -JOINT-

2012年、2014年と開催してきました「問×美」は、問屋町の企業から提供していただいた素材から金沢美術工芸大学の学生・教員が試行錯誤して新しい作品を生み出していくアートプロジェクトです。この度「問×美2015-joint-」を開催するにあたり、問屋町の企業21社から素材と技術を提供していただき、それをもとに複数の作家が問屋まちスタジオの空間を作り上げ、各々個性がぶつかり合うことで新しい表現が生まれると考えていました。さらに問屋町の企業をより深く知って身近に感じていただけるように14社の企業のスペースをお借りし、問屋まちスタジオで制作している作家の作品を展示しました。問屋まちスタジオの共同作品と14社の企業内で展示している作品との対比も含めて楽しんでいただくと同時に、問屋まちスタジオが拠点となり、問屋団地内に非日常的なアートによるネットワークが構築されることをめざしていました。





金沢美術工芸大学開学70周年イベント
問×美2015 -JOINT-

【会期】2015年9月25日(金)-10月9日(金)
13時-18時 入場無料 会期中無休
【会場】問屋まちスタジオ
問屋団地の企業内展示スペース
【主催】問屋まちアートファクトリー
プロジェクト実行委員会
【助成】いしかわ県民文化振興基金

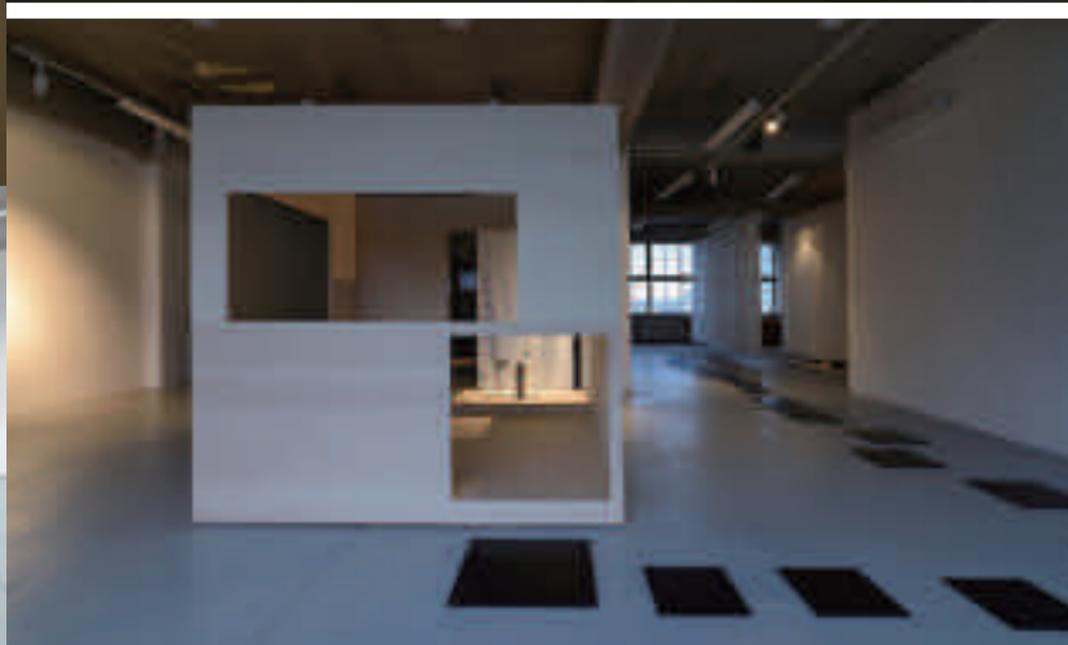
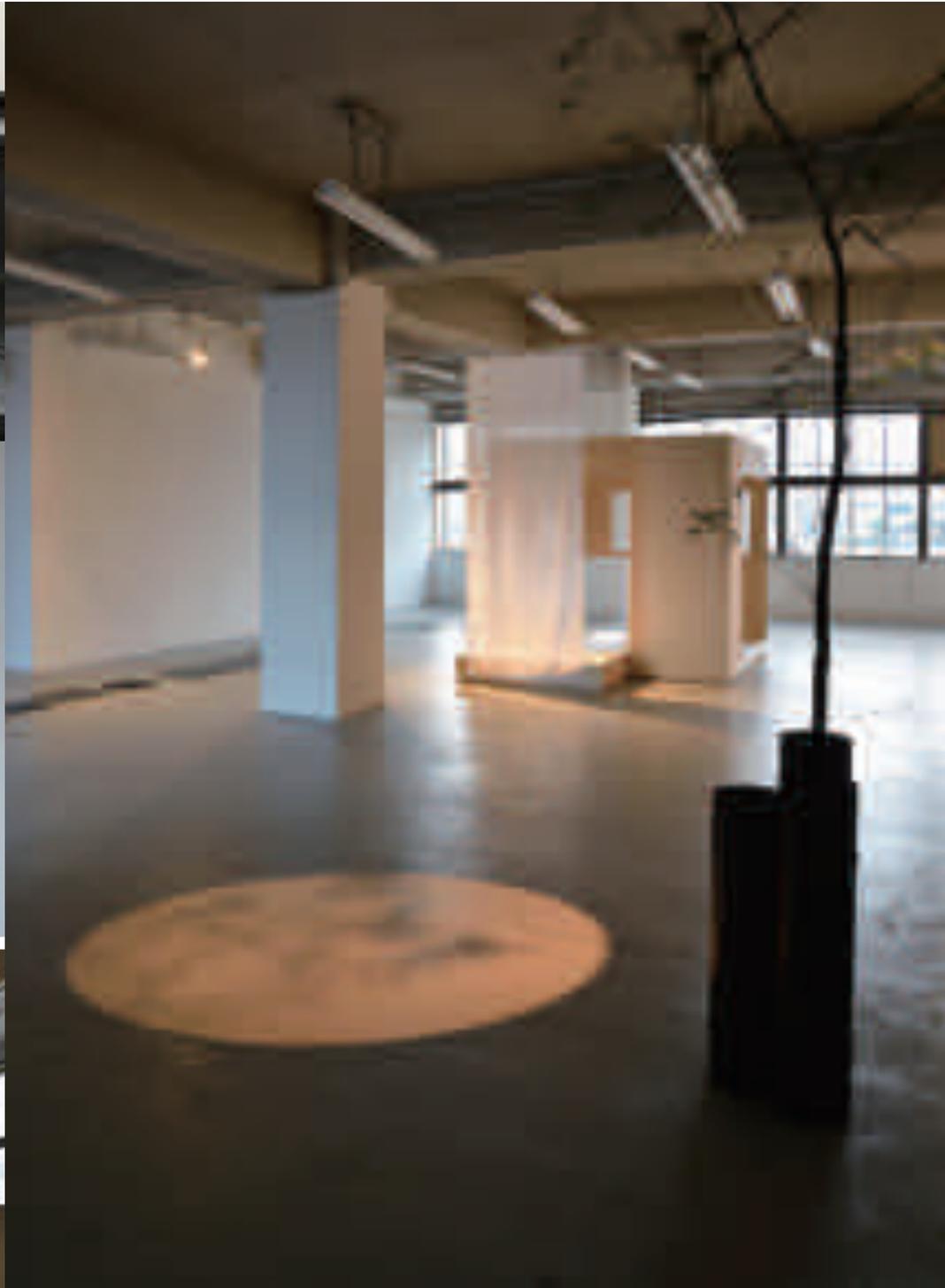
【イベント】
①「陶芸でうつわを作るワークショップ」講師 四井雄大
9月27日(日) 1部 10時半～13時
2部 14時～16時半
定員10名 参加費1,500円
②講演会「卒業後の制作とゲンジツ」講師 高本敦基
9月28日(月)14時～16時

【協力(順不同)】
株式会社つくる 株式会社たなかや 北日商事株式会社 北越エンゼル株式会社 株式会社新井通信システム
株式会社コシハラ 株式会社ドットコム 成瀬電気工事株式会社 株式会社東山商会 株式会社ほくつう 丸六株式会社 川崎株式会社
丸与商事株式会社 石川トヨペット株式会社金沢西店 泰和ゴム興業株式会社 株式会社ヤギコーポレーション
株式会社アイネックス 川上産業株式会社 株式会社マツモト 小川商事株式会社 株式会社五井建築研究所
株式会社シキケミカル 有限会社吉野利工具 株式会社北國銀行問屋町支店 株式会社北陸銀行金沢問屋町支店
金沢信用金庫問屋町支店 金沢問屋町郵便局
【参加作家】
大野三結、沖田愛有美、楓大海、佐藤文、杉本小百合、高橋直宏、千川岳志、中桐聡美、中島大河、野木麻美、早川璃、山中亜衣、米田貫雅、真鍋淳朗



問×美 2016

茶室はもともとコミュニケーションの場でした。さまざまな対話を生み出す装置でもある茶室ですが、それは無限の広がりをもっています。異質なもの混じり合い、共鳴し合うとき、「こと」が起こっていきます。茶室をつくるという、限りなく「もの」に近づく行為、そして、ファクトリーという活動体を問屋まちスタジオに実現させるという、限りなく「こと」に近づく行為—今回の「問×美2016」は、この二つが融合するきっかけを導き出すことを目的として開催しました。問屋まちスタジオの空間に、現存する国宝茶室「待庵」の「起こし絵」をもとにした原寸大の壁面と床面のみを構造体を設置しました。その茶室の「間」および周辺に現れる「場」に、アート、工芸、デザインそして異質な素材や先端メディアの共鳴による新たな「間」と「場」の創出を試みて、現代の茶室 工芸建築 を提案しました。この提案を通じてアート、工芸、デザインと地域の企業、高等教育機関、研究機関との連携によるイノベーションを可能とする新たな組織を創設します。



問×美2016
-おこし絵茶室で新しい問屋まち
スタジオと工芸建築を考える-

【会期】

2017年1月8日(日)-
1月15日(日)
11時-18時 入場無料
会期中無休

【会場】問屋まちスタジオ

【主催】

問屋まちアートファクトリー
プロジェクト実行委員会

【助成】

いしかわ県民文化振興基金

【イベント】

- ① オープニングパーティー
1月8日(日)17時半～
- ② 対話(次頁参照)
1月9,10,11,12,14日
18時～19時半
- ③ 劇団アンゲルスの上演
小泉八雲=作「貉」「雪女」
1月15日(日)16時～17時

対話

① 西川 英治



にしかわ・えいじ

2002年より株式会社五井建築研究所代表取締役。
問屋まちスタジオ運営協議会議長。



ー主な参加者とその経歴ー

モデレーター／真鍋 淳朗（まなべ・じゅんろう）
金沢美術工芸大学油画専攻教授、認定NPO法人金沢アート
グミ理事長。問屋まちスタジオ運営協議会メンバー。

佐無田 光（さむた・ひかる）
金沢大学教授・地域政策研究センター長。

坂本 英之（さかもと・ひでゆき）
金沢美術工芸大学環境デザイン専攻教授。問屋まちスタジオ
運営協議会メンバー。

眞壁 陸二（まかべ・りくじ）
p37参照(第5回登壇者)。

中瀬 康志（なかせ・こうじ）
金沢美術工芸大学彫刻専攻教授。問屋まちスタジオ運営協議会
メンバー。

藤本 博司（ふじもと・ひろし）
協同組合金沢問屋センター内の泰和ゴム興業株式会社代表
取締役社長。問屋まちスタジオ運営協議会メンバー。

（真鍋）
皆さんこんばんは。今日は貴重なお時間をいただきお集まりいただきましてありがとうございます。「問×美」、このプロジェクトは今回で4回目です。2010年に協同組合金沢問屋センターと金沢美術工芸大学が連携協定を結んで、今年で6年目になります。その中でこのプロジェクトが継続しておりまして、今までは基本的には問屋町から提供していただいた材料を使って美大の学生が作品を作る、それを展示させていただくという内容が3回続いてきました。それをさらに次のステージに上げるためにどういう形でこの活動を継続していったらいいのか、ある意味ではそれをきちっと運営できるような組織体にまでしていくべきかなど、色々な議論があります。

今回の「問×美2016」に関しましては、学生は関わっておりません。と言うのは、「茶室」-これを展示空間のベースとして作らせていただき、そこに問屋町の企業、若手アーティスト、工芸作家、デザイナー、いろんな分野の方が関わることで、この問屋町で新たなイノベーションを起こしていく、そんなことを考えて今回の企画をしました。

その展覧会の夕方6時から、いろんな関係者や専門家の方に来ていただき、「問×美」やこのスタジオについてみなさんのご意見を聞き、提案や課題を議論していくという場を設けさせていただきました。

今日は第1回目として五井建築研究所の代表取締役であり、問屋まちスタジオ運営協議会の議長でもあります西川さんに来ていただいています。私と対談という形ですが、今日は参加者の方々も錚々たるメンバーに来ていただいていますので、ぜひ議論及び対話の中に参加していただきたいと思います。どうぞよろしくお祈いします。

（西川）
ご紹介いただきました五井建築研究所の西川でございます。私たちが美大とのコラボを始めてからもう7年目になります。どうしてこういうことが始まったかと言いますと、当時の理事長が「美しい街を作ろう」というまちづくりについてのテーマを掲げて、それをどうやったら実現できるか、ということをおどもの事務所に業務として打診していただいたことがきっかけです。

私も問屋センターの一員で、昭和43年にこちらに移ってきました。そういった委託を受けてから、私たちは街全体を調べて、どういう建物がどこに、どういう風に存在するのか、それらが街全体とどういう繋がりを持っているのか、等々を分析しました。また私たち組合員自身、「あまり魅力がなく、歩きたくない町だ」と感じているというアンケート結果が出ました。じゃあ、美しい潤いある街をどう作っていったらいいか。2017年でこの協同組合金沢問屋センターは50周年になるわけですが、まずはそれに向けてやっていこうということはどうとう7年目に入ったわけです。

「美しい」というのもあまり捉えどころのない言葉ですが、その時私たちはハード面のことをいっていると感じていました。そこで、美大には買い上げられた貴重な彫刻作品、芸術作品がたくさん眠っているということをお坂本先生から聞き、それを1年に1作ずつ問屋町の通りに展示していったらどうか、ということから-まずは本当に単純な発想から始まったわけです。当時600万円くらいかけて、作品を展示する舞台を作りました。そこに毎年作品を展示していき、1年経ったらどこかの企業に買い取ってもらう、そういう制度をやっています。

また展覧会があった時、美大生の作品を企業が買い上げた場合には組合から補助金を出すということもやっていて、今年もやるつもりでいます。そういった意味で美大との関わりは深くなって来たなと思います。

一方で、当初「美しい街を作る」というテーマに対してハード面のことしか頭になかったわけですが、よくよく考えると、街の活性化のために、ここで働いたり生活をしたりにすることに対して喜びを感じるには、ソフト面が大きいということを感じます。どんなに街に立派なアート作品を掲げようと、それが問屋町の人々に貢献できるかということではないと思いますし、作品を単に飾って、それが提示されればアートの街になるのかということそれはちがう。捉え方があまりにも表層すぎたな、とここ1年は反省しております。

問屋まちスタジオはできて4,5年ですね。協定後すぐできたわけではないんです。組合が保有していた連棟になっているこの建物が空いていて、美大との協定の中で一緒にこういうスタジオを作れないかという意見が出ました。組合員はみんな商売をしていますから、もっと収益を上げられることに使わなければならないか、いろんな抵抗がありましたね。しかしこの協定の下、美大とセンターと一緒に「問屋町の活性化を図っていこう」という大義名分が効いて問屋まちスタジオができ、今日まで来ました。

ただし、組合の中で理解がそこまで深まっているかということではないということが現実です。ここを核にして、真鍋先生を中心にいろんな発信をされているのですが、組合員にとってはどうなんだろうということが見えないのが現状だという風に思います。

（真鍋）
問屋町の企業の皆さんが感じている通り、実は私たちが一生懸命展覧会やイベントをやっている中、企業の方の参加人数や反響を見ると、ものすごく積極的に関わっていただいている方もいますが、大多数はなかなか同意に繋がらないということも感じます。昨日もバイオリンの演奏会があったのですが、演奏も素晴らしかったし、あんな空間・時間が持っているということ自体がとてもいいことなのに、もっとちゃんと広報ややり方を工夫したら、よりたくさんの方に楽しんでいただけたのかな、という反省もあります。

問屋まちスタジオは、場所自体センターから無償提供されていて、ランニングコストは美大が持ち、中瀬先生が住んでいて、時間をかけて何もない状態だったところが制作スペースや展示スペース、トイレやシャワーなどのレジデンス機能までがしっかりと整備されてきました。街の中心からは外れていますが、21美を回って市内のアートスポットを回るとなった時、このオルタナティブなスタジオはものすごい認知度が上がって来ています。スタジオ内の一部にアート業界の著名な作家やディレクターが来た際にサインをもらう壁があるんですが、錚々たるメンバーです。金沢に来た時、コンテンポラリーアートの作家が来るべき場所として注目されているのも事実です。補助金を獲得し、問屋町の企業からのご協力の中で、色々なプロジェクトやワークショップもやらせてもらって、近年はますます素晴らしい作家の展覧会が実現しています。こうした、業界内での注目度は上がっているんです。

そういった側面と、問屋町の企業の方々とのギャップですね。実際、アートが非合理的で捉えどころがないところはどうしても強いんです。やはりビジネス、販売促進のきっかけ

を求められるなど、合理性重視の商売に携わる企業の方々と相反するような要素があるので、そこをどう繋げていくのか。繋がっていくことを考えるべきなのか、それとも認知度を上げるために現状をさらに展開していくのか。次のステージにどう上がっていくのか、超えていくのが見えて来るべき時期に来ていると思います。そこで問屋町の50周年事業の中に問屋まちスタジオの活動をリンクさせていただき、一緒に考えていっていただけると嬉しいなど、スタジオとしてはそんな想いです。

（西川）
　真鍋先生がおっしゃったように、アートの世界では非常に注目度が高くなっている、そういう認識がセンターの中でなかなか共有できていない。何か爆発的なことが起れば良い方向に向かうのかもしれませんが。逆に問屋センターの中でもう少し我々なりに努力していかなければならない点はたくさんあると思うんですが、そのやり方が今は五里霧中と言いますか、見えていないんです、ずっと。

（真鍋）
　それでいいますと、実はセンターの方からアートフェアをやってほしいというご提案があったんですね。なぜかという、展覧会をやっている企画の内容によってはなかなか関わりにくい。でもフェアになると学生の作品が展示されていて、お金を出せば買えるんです。これは企業の方々の商売ともリンクします。フェアを2回くらいやったところ実際に買っていただきました。そうやって提案していただいたりして、大学は大学、問屋町は問屋町で、それぞれの立場からこれはどうだろうということをおっしゃっていただいているのだと思っています。

　今回の展覧会に関しても、私は茶室建築自体が専門ではないですが、時代を遡っても、茶室というこの場から対話や議論が生まれているんなものが作られてきました。今回作った壁面と床面の構造を削ぎ落とした形から出発して、ここに様々な人が関わって行って対話が生まれいろんな要素がプラスされて行って、再度この展覧会を今年の秋にやった時どういうことが起こっているか、それを検証していきたいです。できれば非合理的なものと同理的なものをつなげていく役割というか、アーティストや工芸作家たちの世界観が表現されたものを、社会にどのように組み込んでいくか、あるいはデザイン的なプロセスも加えられなければなりません、そういうことをマネジメントしていける、仕掛けていける組織や人材をここに置いておくべきということが議論に上がってきました。しかし予算も要るし人も要る。なかなか踏み込んで来られなかったその現実的な問題を今年の事業の中で具体的に形にしていきたいなと思っています。そういう思いがあつての今回の企画です。実際に展覧会を見て、いかがですか？

（西川）
　この茶室は本当にいろんなものを省いて、実を言うと本当はもう少し、装飾といえますか、仕上げなどをやるのかなと思っています。天井もないと言うのはどうなんだろうと思っていたんですが、これだけ抽象化されたものというのもいいなと思いました。本当に。企画中はそのイメージがなかなか伝わってこなかったんですが(笑)。
　仰るように、ここに問屋町の人が来ないといけないんです

ね。来させる手段が今途絶えている、それが問題なんです。

（真鍋）

　例えば、今回の茶室制作にあたって、そこの飛び石や利休が使っていたものを再現するために、これまでのプロジェクトで企業から提供していただいたものを取り込んでいます。秋に再度展覧会をする際にも、待庵の壁面・床面構造にアーティストや工芸作家が関わっていく予定で、条件としては企業提供の素材を使うことが前提です。そのような仕掛けをしていくことで、企業関係者の来場を促そうと考えています。

（西川）

　それはいいですね。

　この茶室のテーマは、「工芸建築を考えていこう」ということだったと思います。実は工芸建築そのものが僕はちょっと理解できていなくて、工芸というのは職人の技が見える、職人技の匂いがするということが十分感じられるものが工芸ではないかと思うんです。従ってそれはアートとは少し違う。こういう抽象化された建築の中でどういう風に工芸が付加されて、どのように建築と合体して、お互いいい関係になって作られていくのかというのはとても私自身もとても興味があります。装飾的な建築とはまた違うんですね。

（真鍋）

　そうですね。私は工芸作家ではないですが、日本の工芸的なものには「用の美」という言葉があり、形も素材も生かしますよね。一方で、その場、その時の環境の中で対応しながらその場でしか成立していかない、そういう要素があると思っています。完成された「用の美」的な工芸作品もありますが、工芸的なものが生まれるには、今回のように条件として素材を使わせていただくとか、この場でしか成立しないものが実現した時、いわゆる伝統的な工芸ではない工芸の打ち出し方になるのかなと思います。最終的には一過性であったり、素材を活かした欧米に知られていくようなものが生まれていけば良いなと思います。

（西川）

　その場でしかできないというのは一つキーワードになりそうですね。

（真鍋）

　あと、先ほど来場者の方と「パースペクティブを計算された欧米的な建築ではなく、起こし絵を立ち上げてそこから出来上がっていくものの考え方というものはやはり素材のことを知らなければできない、木から土から竹から、自然素材をいかに自分で生かせるかが重要」という話を個人的にしました。それが工芸建築に繋がっていきます。鉄筋コンクリートでできるようなものは合理的にしか作られないですが、両極のどちらかにいくわけではなくて、両方の要素が繋がっていくものが工芸建築になっていくのかな、という気がしています。

（西川）

　教育の分野でも、起こし絵的な建築の作り方というのは、教えていないですからね、空間としての捉え方が重視されてますから。起こし絵的なものの中で、一つ一つの面が工芸建築へと変わっていくというのはピンとくるものがありますね。

　今は、ある意味で色んな専門家がたくさんいて、その専門家の間に壁がある。その壁を一生懸命凝縮しようとする。今必要とされるのは、その壁を取ることは専門家でなければいけないということなんですね。壁はやっぱり邪魔なんです。私どもの設計事務所が手がけた「シェア金沢」という建物があるんですが、ここは「ごちゃ混ぜ」というのがテーマで、それは健常者も障害者も老人も子供も一緒になって住めるような街を作ろうじゃないかと。そこで本当に幸せで豊かな人生が送れるんじゃないかというものです。隔てをなくした「ごちゃ混ぜ」というのが、どの世界でも必要なんだなと感じました。

（真鍋）

　今日は佐無田さんもいらっしゃいます。今の話で、いかがですか。

（佐無田）

　ストーリーがあるんだろうと思います。僕は勉強不足でこの地域の読み解き方みたいなのをよくわかっていませんが、問屋、卸売業は、金沢の地域経済の中では大きな意味を持っていました。北陸の中でも卸売の力は金沢が中心です。中でもこの問屋町は、そうした金沢の問屋を拠点的に移してきた特殊な場所です。「この地域でなきゃできない」ということをおっしゃいましたが、それは扱う素材のことなんでしょうか？歴史を読み解くとどういう意味が出てくるか。例えば、五井建築がこのセンターに関わられているというのは歴史的にどういう流れがあるんでしょうか？

（西川）

　別に難しい話じゃなくて、昭和43年に今の武蔵あたりにあった多くの問屋が共同でこちらに移転したんです。その時にうちの事務所も一緒に移転しました。

（真鍋）

　坂本先生によると、50年前に建てられた建物がこれだけ集積している町も珍しく、将来的に文化遺産的な意味合いも持つかもしれないそうですね。

（坂本）

　文化財としては、建てられて50年経ったら対象になるという文化庁の定義があります。問屋町は昭和43年の頃に当時のモダニズムで一気にガーッと建てたわけだから、全部は残ってなくてもその半分60軒。これが維持されてオリジナルが残っていけば、もしかしたらそういう価値づけは可能だろうなと思います。

（真鍋）

　以上のような経営的・建築的な背景、可能性があり、そこにアーティストが絡み、一緒に関わっていけたらと。作家の立場から、眞壁さんいかがですか？

（眞壁）

　非常に面白いなと思って聞いていました。はっきり言って、今現在のこの問屋町の風景は僕もピンときません。美しいとは全く思いませんが、アートの視点で言えば誰も価値を認めていないものになんらかの価値を見つけていくことによって、ダメだと思っていた地域がちょっとしたアイデアでこん

なに格好良くなるのだということを提案したいという気持ちになりました。本当に10年20年で流行はあつという間に変わってってしまうので、おそらくこれが建てられた時は、モダニズム建築がとても格好良く見えたのだと思います。国道沿いの大きな量販店などの箱物はできた瞬間が一番美しくなってくる。それを放っておくのではなくて、アイデアがあればもっと格好いいものになるんじゃないかと思います。人が歩きたくなるような雰囲気をまず作る。ちょっと塗装するだけでも大きく変わります。パリやニューヨークの古い店でもカフェなどがペンキを塗り替えるだけでも、すごくおしゃれになる。それは美大もそうで、打ち合わせや講義で行くたびに、何で中の廊下とかに、ペンキひとつ塗らないのかなと思います。建物自体がひどいとは思わないですが、それを管理する人の気持ちがすごく薄いから建て替えなきゃという話になる。今現在価値を見出せないものが、僕らアーティストや工芸家のアイデアで生まれ変わったらいいなと思いますね。

（真鍋）

　五井建築研究所からの、眞壁さんへの仕事はどんな内容だったのですか。

（西川）

　まず、オーナーからお風呂の壁に何か描きたいと提案がありました。本来建物を建てる僕らの仕事では、描いてほしくないという気持ちがあるんですが、最終的に僕はもしこれで価値が下がるようなら、多分この建築に価値がないだろうなと、その責任は僕らにあるんだろうなと思い、やることにしました。お風呂は二つあるんですが、ひとつは担当スタッフの紹介で眞壁さんにやっていただくことになり、眞壁さんにはヒノキの板のお風呂に白山の風景を、色なしで作っていただきました。もう一つは東京で銭湯の絵を描いている人を呼びましょうということになり、その職人は東京に2、3人しかいないのですが、その人とコンタクトが取れました。一つは山で、一つは海として、海の中に新幹線が浮かんでいるというような(笑)、そんなとてつもない絵を描いてもらいましたが、出来上がってみると結構いいなと思いましたね。

（眞壁）

　僕はペインター、絵描きですが、美術館やギャラリーに絵を飾るという壁を飛び越えたいと思っていました。もともと絵もそれほど売れないですし、関東から金沢に戻ってきて、さらに人口の少ないところでまず絵が売れるわけない。チャンスがあるとすれば金沢は観光客で成り立っている街なので、飲食店とか旅館、ハウスメーカーのように、建築と一緒にやってアートの可能性を探ろうというのは普通に思います。

（真鍋）

　僕も、バブルが弾ける前、東京にいた時はアートと仕事を繋げるような専門の会社があつて、色々ところで壁画とか、建築会社と関わりながらやっていました。今はそういう仕事は無くなりましたが、なぜそういうことに興味があつたのかというと、例えばアートの中心がニューヨークにあるというのはアメリカの国策で、例えば「建築費の1％はアートに使わなくちゃいけない」とか、そういう国づくりの方針がありました。そういうことを日本でも実現できないかと思っています。

そういう流れで、中瀬先生にもご意見を聞きたいと思いません。中瀬先生は実際スタジオに住んでいて、学生や若手作家のお父さんの役割もしつつ僕らにも叱咤激励していただいています。今回の展示もそうですが、スタジオの運営という点でもキーを握っている作家なんです。金沢に住んで6年目で、このスタジオの空間を一番分かっていて、ここを使ってその可能性も感じておられると思うんですが、今回の展覧会のことを含め、その立場から思っておられることはありますか。

（中瀬）

西川さんが先ほど反省の弁を出してましたが、当初「美しいまちづくり」ということから始まりました。それは問屋町全体の話で、そのためにまず、坂本先生と建築的なアプローチからステージ的なモニュメントを作った。さらに「新しい建物を作る」「木を植える」「美術作品を置く」といったイメージ。そうした計画には膨大な予算が必要ははずなのに予算間での計画がなかった。「美しいまちづくり」という当初のスローガン、コンセプトからすれば、このスタジオはメインではなかったんです。「空いているから何かやってくれ」と。ところが「美しいまちづくり」というのはどこかいっちゃって、「スタジオなんかやれよ」みたいな感じになっちゃって、「そういう難しい芸術じゃなくてイベントをやれよ」と。なにか話が違うな、ということにだんだんってきたというのが私が理解している流れ。

また、金沢美大はその名の通り、歴史的にも工芸科を主体とした特徴を持っています。でもスタジオでは伝統工芸的なことはやっていない。一方、当初の私の提案は、現代アートの的なものは少ないから「現代美術に特化したようなギャラリーにして若いが発信できるような場所としてやっていこう」「金沢は現代作家がとても少ないないから、アーティスト・イン・レジデンスをして呼んでこよう」ということを始めた。ところが今になってみると問題点は「美しいまちづくり」なのに、現代アートのことをやる、問屋町の人はチンプンカンプンで、なんだかよくわからないし、そもそも興味もない。そういった現状からすると、例えばもっと社員や地域の人と一緒にやってやるようなアートプロジェクトをするというのも一つのやりかたではあるとも考えました。ただ、21美も美大も工芸中心で、問屋町も工芸でいこう、という新たな提案と方向性。そういうことであれば異分野の僕は少しサポート役に徹しようというスタンス。

一方で私の提案は、フィフティフィフティな関係を作りたい、ということ。つまり、「予算出すからイベントやれよ」ではなくて、問屋町の人も我々も同じように何かを考えて、テーブルを一つにして考えるということをやりたい。協議会を月一でやっていますが、これも「美しいまちづくり協議会」じゃなくて「問屋まちスタジオ運営協議会」なんですよね。これからどんなことをやるのかというのを僕らから一方的に説明する形。「進捗がなくてすみません」て謝って…。そうじゃなくて、お互いにアイデアを出して提案し合う。例えば、Facebookやツールを使ってもっと若い人との繋がりがや発信をする仕組みを作る、そういうことも含めて相乗的に何かが発生していくシステムを積極的に作ることから始めていくことも大事だと思います。

（真鍋）

今までの話を聞いて、今後問屋町50周年に向けて進めていくのですけれど、その実行委員長というお立場で若手経営者

の藤本さんがリーダーシップを取られると思います。色々と感じられることもあったと思うのですがいかがでしょうか。

（藤本）

この運営に携わるようになってからアートに関わって今日に至ります。一番最初は西川さんについていく形で入ったので、先ほどの「反省」、そこに至る気持ちを持っていることは事実です。ただ、携わることになった時に、僕は企業の立場です。ビジネスとアートの際(きわ)がどこになるのか、どうやったら融合できるのかというのは常に考えていて、ライフワークというか、一つの大きなテーマだと思っています。ただし、現実問題運営をしていく中で、かなり厳しいものがあります。今日もこういう場を用意して、本当はもっと多くの人が興味を持っていてくれていいと思うんですが、触れる人が少ないというのはそれだけ波及が少ないということで、これがまさに直面している課題そのものかなと思っています。

今回の企画では先生方が3人関わって、相当力が入っていると受け止めたいわけです。この企画の話を問屋町の社長連中にした時に、ちょっと今までは少し違う興味で受け止めていただけていました。それは何かというと、「茶室」。待庵の成り立ちなど説明を受けている中で、敷居が高いという意見も出しましたが、「茶室」というのは「対話」の場だと。企業の人間に限らず、日本人は花を愛で、茶に親しむという気持ちを多かれ少なかれ持っていると思います。こういう風に(スタジオ内を)歩いて行って、茶室に入ってコミュニケーションを取るというのは一つのキーワードになるのではと。

それはどういう意味かというと、会社、法人というものが美術・アートを捉える時に、大企業だったら美術館を持っている。中小企業でもそこそこいいと、社長室に高名な作家の作品が飾ってあったりします。でも、所有することがアートなのかというと限定的なものになってしまいます。先ほどのようなアートとビジネスに関していうと、場を作って、そこに人が寄ってくる。先ほど眞壁さんが仰ったような街の魅力ということもそこに付加されると思うんですが、そういう「場を作る」ということをしなきゃいけないんだな、ということを最近強く思います。そういう意味で茶室というのは、その中での対話もいいと思うんですが、今まさにやらせていただいているように、茶室を客観視しながら、その隣でコミュニケーションをしているのも一ついいことなかな、と。秋に向けての計画もありますが、せっかくのこの場をもっと知ってもらって、盛り上がりを見せるようなことに生かしていければいいなと。これを一つのターニングポイントとしていけたらと思いました。

（真鍋）

私も、各社への告知を郵送だけではなく、企業の中に入って行って、きちっと顔見知りになって、来てもらえませんかと顔合わせができるところまで行きたいなど、専属のスタッフなり組織が必要かなと思っています。それも組織づくりという課題につながりますね。

（坂本）

今回は、起こし絵というヒントから茶室を組み立てています。僕自身、今年10年目の「イヴの茶会」や「テント茶室」などに関わらせていただいて、日本人のDNAの琴線に触れるものを僕自身も持っているということを直感しています。一般の人とプロの人たちがつながる場には、非常に抽象的な言葉で

「コミュニケーション」ができますが、茶の湯というのは大変具体的な行為です。お茶を飲み、お菓子を食べる。そういう空間で行われるいろんなコミュニケーション、化学反応を起こせる場所として、まさにこの茶室というのは魅力・魔力を持っていると思います。

また、例えば西洋だと15～16世紀に世界最古の美術館と言われるウフィツィ美術館がイタリアにできましたが、あのような美術館がなかった日本では、美術品はお上が作って一般の人に提供するような流れしかありませんでした。僕の思いとしては、茶室こそ、まさに庶民、一般の人たちが美に触れる一つの美術館だったと思うんです。「茶会は総合芸術」という言い方もあります。人の所作も含めて全てが芸術作品だと、そういうものが触媒となってアーティストも作家も一般の人たちも茶人も華道家も様々な人が入り乱れて入り込んでいける、そんな場所になったらいいというのが、僕の気持ちです。そういうものに絡んでいけるための触媒になれば思っている茶室です。

（真鍋）

そろそろ予定時間が来ますが、話が途中になってしまってますみません。佐無田さん、今までのお話を聞いて、いかがでしょうか。

（佐無田）

我々も「金沢まち・ひと会議」というグループで、ずっとこの数年間、工芸建築とはなんぞやという話をやっています。その中で工芸建築と建築工芸は違うというのが議論になっていて、建築物の一部に工芸を使っていくという形態はすでにありますから、それとは違う、建築そのものを工芸的に解釈して考え直すと言っています。ただなかなか形にはならないので、実際作って、そこに色々デザインを組み込んで、とにかくやってみるというのは今回すごく参考になりました。

ただ今日の話の中で、問屋町のまちづくりという課題と、作品を作っていくこととは、まだ別々ではないかという気がしています。作品があることで町の人たちも関心を持ってくれるということはあるんですが、それはどう「まちづくり」になるのかと。問屋町の歴史と素材を読み込んでこの街を活性化したいという話と、一方ではスタジオの中で行う茶室の再解釈のようなアートとがどういうふうに絡んでいくのか。そういう意味では工芸建築的なものをサイトスペシフィックなものとして捉えるべきなのかというのは、微妙だと思っています。この作品が例えば他の場所で対話の場に活用されていくことがあって構わないわけですよ。21 美の中に展示されていても。作品作りの新しさというところと問屋町のまちづくりとの関連性を課題として感じながら話を聞いていました。

（真鍋）

一番最後のお話については、坂本先生の設計では、この茶室を解体する時には折りたたんで、まさに今仰ったように今後他の場所に持って行きこのような展覧会をするということを考えています。

一方で、まちづくりとこの茶室がどう関わるかということについて。私は出身が京都なのですが、そこでは、家康がいた頃に本阿弥光悦が家康から京都の鷹ヶ峰の土地を拝領されて、そこを拠点に全国から工芸作家や職人を集め、刀を作った

り鑑定をしたりという場を作り、そこから琳派の文化が生まれ、歴史を作っていきました。その場は、時の権力者や光悦の存在など色々な状況が揃ったことで生まれてきたのです。そういうあり方も僕は考えていて、ここに現代の光悦村ができないかと。スタートは建築工芸だけだったとしても、ここに関わる企業の方々や材料を取り込んでいきながら作れるものをあえて使っていこうかなと。ある意味でここでしかできないもの、そういうものがサイトスペシフィックなものになっていくのかなと思います。この無機的な空間は逆にやりやすくて、すでにうまく行っているところに僕らアーティストは関わりようがないんです。100何十社のここにしかない技術を持っている企業や山ほどある素材をアーティストが関わってうまく使える可能性があり、それが光悦村に発展していくと感じるのです。2020年ごろまでにそういうものを作り、美術が重要なもの、必要なものになっていかなければいけないと、そういう夢が個人的にあります。

（西川）

何が大事かという、外から人が入ってくる刺激で街の人が何かを考えたり集まったり活性化したりする、いわゆる稀人(まれびと)効果ですね。外から入ってくる人によって小さな問屋町という世界に刺激が加わり、人々の意識が変わっていくということが、美しいまちに繋がるんじゃないかと期待しています。今のお話はまさにその稀人効果を生むのではないかと思います。

問屋という企業形態は、今苦境に立たされている。当初は160社あったのが今は100社くらいですか。だんだん減って来ている中で問屋の経営者はどうやって生きていったらいいか、ということを考えています。特に美大と連携した時は経済状況がすごく悪かった。今は新幹線の効果もあって良くなってきているように見えるのですが、「美しいまちづくり」、当時はそんなの何の意味があるんや、みたいな意見もありました。先生のような方がいらっしゃるからこの運営があるんだということには改めて感謝申し上げたいと思います。当初はハード面からの「美しいまちづくり」が始まり、今考え方が進化して、スタジオを拠点にいろんなことを発信していき、それを本当のまちづくりに繋げていきたいと思っています。協議会という場では議長を仰せつかっていますので、この運営と一緒に膨らませていきたいです。ありがとうございました。

（真鍋）

本日お越しいただいた皆様、貴重なご意見・ご提案をいただき本当にありがとうございました。今回のご意見を秋の展覧会の参考にさせていただきますので、ご覧いただき、可能でしたら参加していただきたいと思いますので、どうぞよろしく願います。

（2017年1月9日）

対話

② 上町達也



うえまち・たつや

2006年3月金沢美術工芸大学卒業。株式会社ニコンに入社。同デザイン部に所属。2013年、株式会社ニコンを退社し株式会社雪花を設立、代表取締役就く。



ー主な参加者とその経歴ー

モデレーター／真鍋 淳朗（まなべ・じゅんろう）

黒澤 伸（くろさわ・しん）

p23 参照。第3回登壇者。

泉 康次（いずみ・こうじ）

協同組合金沢問屋センター事務局長。

※文章中、「*1」などの表記は画像を表します。

（真鍋）

みなさん、こんばんは。「問×美2016」の対話シリーズ。今日は若手のホープ、上町達也さんに登場していただきます。

上町さんは金沢美大を2006年に卒業、株式会社ニコン、同デザイン部に所属。2013年に退社後、株式会社雪花を設立されて今、代表取締役に就いておられます。金沢美大を卒業されてニコンに行き、なぜ金沢に戻ってこられて、今のような活動をされているのか、そういうところがものすごく興味があります。

この問屋町は色々な企業の集合体です。その中にこの問屋まちスタジオというスペースを作らせていただいて今年で5年目に入ります。この問屋町スタジオが次のステップに行くために、金沢ならではのデザイン、工芸をイノベーションしていく場所にここを是非していきたい。

そのために、上町さんが今の活動をどのような意識でやっておられて、今現在どういう状況にあるのか、そんなことを可能な範囲でいろいろお話しただいて、できればこの問屋まちスタジオの運営、今後のことに関してのご提案、ご意見もお聞きできればありがたいです。よろしくお願いします。

（上町）

改めまして、株式会社雪花（以下secca）の上町と申します。今日、まずはどんな形の事業をやらせていただいているということをご説明させていただきます。

seccaという会社は、ものづくりに人生をかけた“つくれる”クリエイターが集まって、ともに技とセンスを磨いて新たな価値を世の中に提案していく。そういう会社です。先ほどご紹介いただきましたように、私は2006年に卒業した後、カメラメーカーニコンに入り、新規企画を最初から担当させていただきました。6年ぐらいかけて1代目を出す、企画からデザインまでを経験し、今はその知識と技術がベースになっています。

パートナーに柳井という者がいまして、彼も同じく金沢美大の私の1個上で、卒業後ピクチャーに就職しました。柳井はいくら真剣にもものをつくってもすぐに淘汰されていってしまうものづくりのやり方に疑問があり、長く使っていただけるようなものを作りたいという想いで、陶芸の道に進みました。まずは多治見市陶磁器意匠研究所で基礎を勉強し、卯辰山工芸工房に入ったんですね。柳井が卯辰山工芸工房で2年目の時、私にも色々な思いがあって、金沢に1ターンして今の会社を設立しようというタイミングでした。実は最初食体験全体をデザインするような飲食店をやりようと思って、そのための器を作ってくれという相談をする中で、「やろうとしていることは一緒だね」ということでパートナーになってもらいました。彼がいなかったら今はないというありがたい存在です。私たちの特徴としてはデジタル等の最先端の技術と、手仕事でしかできないという技術を掛け合わせ、デザインという解釈で束ねることで、どんな新しい価値が生まれ出せるかということを実験的に研究しています。

それから、せっかくメーカーという立場をとったので、メーカーのあり方をちょっと考え直したい。メーカーは普通、企業という法人格があって、その下に役員等の重要ポストがあって、各セクションのリーダーがいて、末端に手を動かす人たちがいるという形が一般だと思いますが、そういった縦割り構造だとどうしても中間管理職の方が増えて、評価制度で自分たちを美しく見せようということに必死になり、横の連携が疎かになってしまう。下の意見が全然上にならずお客さんにも伝わらないことにジレンマを抱えている人がかなりの数

います。

せっかく小規模の会社にしたので、逆に作り手を上にしてしまえと。例えば、柳井を作り手として彼がやりたいことを1番尊重し、発信したいものを素直に世の中に吐き出すことを組織が支えるという形をとっています。

ありがたいことに仲間が増えて、今楽器なんかも作っています。そうすると設備の共有ですとか人材の共有、アイデアの共有ということが生まれます。意識の高いクリエイターが自分たちで高め合って新しいものを作っていける環境づくりを目指しています。

（真鍋）

金沢には、作り手はいっぱいいますよね。でもその作り手が本当に制作を継続していけるのかということが課題になってきますよね。

（上町）

そうですね。金沢はもともとものづくりを支える土壌があって、卯辰山工芸工房はまさにそうですね。工房を卒業した仲間が数多くいますが、みんな自分の作家活動だけでは食っていけずアルバイト等しながら生活を維持しているため制作にだけ集中することがなかなか難しい。で、実家に帰っちゃうという人が多いですね。作ることだけのサポートではビジネスには繋がらないので、できれば行政が出た後のことまでサポートできたらいいなと。僕らは民間なので、柔軟にできればと思っています。

まずは器の事例がある程度集まってきたんで、それを簡単にご紹介します。

3つのカテゴリーに分れてまして、まずはアートピースをつくる「Art」の部分と、「For Chefs」、これは料理人のためにオリジナルの器を10枚からでも作ってあげたいという気持ちで始めた活動です。通常、オリジナルのデザインを起し型を使うような意匠ですと、最低でも300枚が最低ロットになりイニシャルコストも含めると、最低でも200万ほどかかってくるというのが一般的なんです。そこを現実的な価格で買える価格で提供するためにどういう仕組みでやったらいいかをトライしているカテゴリーです。

まず、「Art」について。（動画スタート）

これは3DCADで設計した意匠と伝統工芸技術を掛け合わせた事例をご紹介する動画で、デジタルデータをベースに設計しています。デジタルデータですので、切削加工や3Dプリンティングなど、色々な出力形式に展開することができます。当然データだからといって、一発で思い通りの形にはなりません。何回も何回も立体にして、違和感を何度も修正してデータに反映して、ということは何度も繰り返します。これはお盆の新しい形を3DCGで作っているんですけども、今回の取り組みとしては、アナログとデジタルを行ったり来たりしながらどういう価値が生まれ出せるかということをトライしていて、ハンドドローイングで描いた線を凹凸形状に変換して、意匠に取り込めるかという実験をしています。これは「ケイズデザインラボ（現・デジタルアルティザン）」という会社の協力を得まして、先ほどの手書きのスケッチをデジタルデータに変換しました。

これ(*1)は、3Dプリンターの樹脂の生地です。それを、石川県の山中にもものすごい漆の塗師がいるということで、話を聞いてもらい塗っていただきました。これも塗れば塗れるとい



*1(3Dプリンタの樹脂の生地)



*2(出来上がったもの)



*3(ケンポク出品の3パーツが組み合わさった作品)



*4(ギター)

うことではなくて、職人も初めて扱う素材でしたので、最初何回も乾かなかったり、まだらになってしまったり色々な問題が出たんですけれども、現場の方はすごく意識が高く納得いくまでやろうということで、何回もトライしていただきたり着くことができました。これは金箔を貼らせていただいているところなんですけれども、こちらも山中にいる職人で、この凹凸…こういった形状って基本3次曲面なんです。でも、箔ってというのはあくまで2次曲面方向にしか曲がらないものなので、それをどう隙間に埋めていくか、職人の技術に頼らせていただきました。私たちの思いとしては、自分たちの周りにいる優秀な方とどんどん接触して、新しい価値を生み出しつつ、その方たちにもちゃんと利益も出し、露出していくときにお名前も出させていただき、ものづくりの未知の可能性と一緒に考えていけたらいいなと思っています。

これ(*2)ができ上がったものです。漆のものなんですけど、見ていただいたらわかるように同じ形をしていながら、細かいテクスチャーが一つひとつ変わっていて、これまでの大量生産の金型に依存したものでできなかつたようなことが、3Dプリンティング技術ではできるので、今はプラスチック樹脂を適当な素材として使ってますけれども、今後は天然素材を新しい技術と掛け合わせ、今の工芸と使っている素材は全く同じなのに異次元の価値へと昇華させたいと考えています。

そういった活動をしていく中で、私たちの技術でオブジェを作ってほしいという依頼をいただけるようになりました。これはあるイベントでトロフィーの製作依頼があり作ったんですけれども、1本の線でつながっているメビウスの輪を生かしたようなトロフィーです。先ほどと同じ3Dプリンティングで下地をつくり、職人に箔を貼っていただいています。これは特徴的な意匠に加えて、日本の工芸と新しい解釈が合わさっているということで、海外の方の反応がいいんですね。あとはこの間、審査会がありましたけれども世界工芸コンペにも結構大きいものを作って出展しています。また私たちがなりに勉強を兼ねて、茶道具にもいろいろ取り組んでいます。新しいことと古いことを往来しながら、様々な角度から実験し続けている状況です。

この間茨城県北芸術祭にも出品させていただきました。私たちはデザイナーの立場が軸足になりますので、「工芸」に対する疑問や提案を形にしていきたいという思いがありました。この作品(*3)は同じ形のパーツを3つ組み合わせて1つの立体が完成する設計です。1つは日本産の漆、2つめは中国産の漆、3つめは漆に似せたウレタン塗料で仕上げられています。それらを同じポリッシュをして組み合わせてみたらどう見えるかを確認してみたのですが結果、見た目だ

けでは価値の差は判らないという事が分かりました。

身近にあるようで距離がある漆の価値が一体どこにあるのか、皆で考えるきっかけをアートピースとして作ってみた事例です。

「For Chefs」では「Art」のクリエイティブの中で培った造形の技術をベースにしなが、まるでジャズのセッションのように、「器から着想を得て新たな料理表現が生まれる」ような価値を目指し、プロの料理人のための器作りを行っています。今は磁器が中心ではあるんですけれども、いろんな素材で取り組もうと思っています。

これは東京の東麻布にあるレストランで使いたいということで、作らせていただいたものです。キャンパスと同じで、料理がのってこそ器の価値が最大化するので、私たちとしては器単体のアートピースとして作るだけじゃなくて、どういう空間で、どういう食体験を生み出すのかということまでを考えることに重きを置いてやっています。結局僕らはアーティストになりきれないというか、デザイナーが軸なので、相手にとってより良い体験を生み出したいという欲求が抑えられないですね。

石川県内でも料亭を中心にいろいろ使っていただいています。「そんなのは工芸じゃない」と言われることも多々あるんですけれども、面白い方ほど面白がって、僕らのことを引き上げてくださっています。

《ASCEL》というブランドは、たたらという手法で半分だけ型を作り、手仕事で型から意匠を写し取っていきます。今はアトリエ内で作っていますが、seccaのアトリエはR&Dに特化しているため、量を作る段階に移行した際には産地をお願いしようと思っているんです。産地の多くは川上に向かっていくほど苦しい思いをしているケースが散見される。問屋の中で意識が低い方が自分だけいい思いをするような仕組みを作ってしまうと、重要な資源を作っている方に利を落とさない。どの産地でも同じ状況で、食っていけないから息子にはやらせないとばかり。僕たちとしては正当な価格で産地に仕事がなげられるような仕組みをどうしても作りたいと考えています。

ちょうど1年前、楽器を作りたいという若者がやってきて、一緒にやることになりました。彼はずっと楽器のメーカーで働いていて、もっと自分の思い描く楽器や音楽体験を世の中に発信したいというビュアな思いでやってきました。彼も特徴的で、職人の方は言われたものを作るという方がほとんどなんですけれども、彼はデザインから3DCADで設計までやって、加工機も扱って、木象嵌も得意でデティールまで、全部自分の手で形にできてしまう。かといって、我が強いわけ

もなくものすごい柔軟です。

設備面でも資金的な面でもなかなか一人では事業として立ち上げるのが容易ではなく、共有できる技術や設備が多かったこともあり、一緒に協力していこうと。結果、1年半たってようやく1本できました(*4)。正直1年半、利益を出さないと支えるのはとても大変なことなんです。余裕があるわけではありませんでした。800万くらい開発に必要でした。彼の人件費含めて。あらかじめやっていたデザインと器の事業でなんとか賅って、彼がようやくアウトプットできるようになり、今はバックオーダーが12人くらいいつている状況がやっとなりました。

(真鍋)

これは1台、いくらくらいで。

(上町)

48万です。一見、高そうなんですけど、ギター業界からするとこれだけ手混んで、48万は安すぎるといわれています。

彼が3人目でこれがちゃんと事業になっていけば、4人目が入ってきたときに、今度はデザインの仕事と器と楽器の事業で新しく迎え入れる人を支える構造ができる。さらに増えていくと、新しい人を抱えていくことがそんなに苦しいことではなくなっていると思います。そういったかたちで仲間とともに高め合って、独自性が高いものづくりができれば、夢を持ったクリエイターが集まってきて、結果的に化学反応が起きて、できることがどんどん増えていく。こういったポジティブなスパイラルをseccaの特徴にしていければと思っています。

受託事業も積極的にやっているんで、プロジェクトの話があったときに自分たちだけで抱え込まずに、色々なところとコラボレーションし、地元にいる色々な技術を持った方と共有しあいながらアウトプットして、ちゃんと評価されるような場所に持っていきたい。評価さえされれば、新しく面白いプロジェクトがどんどん入ってくる仕組みになる。このサイクルのハブにseccaがなればいい。近い将来クリエイタービレッジを作ろうと思っています。今はビルの中で、手狭になってきてまして。今日ここにきて、こういう場所ですらどうなるのかなっていうのをイメージをふくらませて楽しんでいます。

工芸というものに携わっているんで、工芸に今、必要と思うものをまとめてみました。3つあって、1つ目は価値の因数分解。ものの背景にはいろんなストーリーがあります。なぜ作ろうと思ったのかとか、アイデアそのもの、歴史的な背景も

そうです。それをどうやったらお客さんに伝えられるかが重要になってきますし、そもそも作り手のアウトプットがどういう価値で構成されているかということを作り手自身がちゃんと把握しておく必要がある。あと、その価値を自分たちで整理していかなくちゃいけない。自分が持っている技術やその進歩の先にある技術、また潜在的にユーザーが持っているニーズ。そういうものを自分たちなりに分析して、単に組み合わせるだけでなくデザイナーとして、これを使っていただきたい未来のユーザーが、どういう環境におかれていて、どういうマインドで日頃過ごしているかということ自分たちなりに仮説を立て、サービスを含めどのようなものを提供すると価値が最大化された体験が生まれるかということを考えていかなければいけない。

何か未来に対して価値を落としていくとき、まったく0→1を考えればいいのかということではなく、もう十分この世の中に魅力的な技術や価値がある。それを、これからの時代を読み解く中で再解釈・再構成して新しいカタチとして提案していくことが重要かなと思っています。その結果、過去から受け継ぐ技術が上書きされ、未来の作り手に繋いでいけるんじゃないかと考えています。

その他に重要なのはやはり自分たちの思考を研ぎ澄ましておくこと。

「ユニバーサルデザイン」という言葉、失礼な発言ですが、プロダクトデザインの領域において僕はあまり共感できない考え方なんです。万人に向けたということはある意味平均を取ることになるのでみんなにとってグレーなものになってしまう可能性が高い。僕の中では個人個人にそれぞれ個別最適なモノを提供することが究極的な理想だと信じています。自分たちがやっていることをなるべくクリアに、明確に整理をしてあげることで、それぞれの作り手がそれぞれ対象となる人を満足させてあげられればよく、総和で世の中の各ニーズを満たせられればいいわけで、そのためにも自分たちが提供できる価値を整理して伝えることはすごく重要。欲張って誰でもウケるようなものと考えてしまうと、結果的にだれも満足しないものになってしまうので、そこは気を付けていきたいなと思っています。これまでの顧客を中心に合わせていくというやり方より、これからの時代は顧客を引き寄せてくるのが重要です。作り手がどれだけ自分たちの影響を世の中に発信できているかということを意識しています。

最後に、この土地でやる上で財界の方がよく言われる「伝統は革新の連続なり」。文化的なものを持っている街がこういうことを言い続けているということ自体がこの場所にフィット感を感じる要因なのかなと思います。ご静聴ありがとうございます。

（真鍋）
それでは、何か質問など。
黒澤さんいかがですか。

（黒澤）
上町さんはデザイナーで最初スタートしているから、いわゆるファイン系のアーティストの場合と全然違うなと思うのは、最終的にどうしたらいろいろと人が食いついてくれるものを製品化できるだろうかと考えておられるところですよ。デザイナーは、お皿というものが人との関係性の中でどういう風に世界を作っていけるか、ということにまだ挑戦できるんだけれども、ファイン系アーティストはこの「製品」ではないところでやっているの、うまくこういう仕組みができたとしても、それで生活を支えるまでにしていくには、何か別の考え方を受け入れていくことが必要な、と思いつながら聞いていました。

（上町）
そうですね。当然アートとデザインの差ってなんだろうと、みんな考えたことは一度はあると思うんですけど、僕は学生のころ、同級生で油絵を描いているやつに言われたんです。「どういうモチベーションでそれをやってんの」と聞いたら、「誰かに何か伝えたいかそういうことでも何でもなし、食えなくても別に描ければいい」ということを言っていて、僕は納得できなくて、ずっとモヤモヤしていました。本当に自分以外一人も人間がいない場所だったらできるのかもしれないけど、「人」は絶対にまわりにいて、その関わりの中で刺激を受けてやっていくわけで、人からどう見られるかって1%も意識しないわけにはいかないと思う。

もやもやしたままあるキュレーターの方とお話しすることがあって、同じ質問を試みたんです。そしたら、「それは日本の良さでもあり、悪さでもある」と仰っていました。海外のアートマーケットではキュレーターがちゃんと機能していて、アートシーン、アートマーケットとアーティストの特性をマッチングする努力をしているし、人脈もある。アーティストもマーケットに投入しないと存続できないということを理解しているから、信頼できるキュレーターの意見を聞く。
例えば、「お客様の手に取りやすいからこの号数の中で新たな表現を下さい」という課題を作ってくれるんですね。それをちゃんとマーケットに届けて、ちゃんとお金を流通させる。アーティストも存続できるし、キュレーターもちゃんと役割を果たすという、その循環が日本は希薄すぎるということを仰っています。そこを、日本の美術にかかわる方がどう考えるんだろうと、ずっと気にしています。

（黒澤）
そうはいつでも、アートマーケットに乗っていくアーティストというのがどちらかというと少数ですよ。もちろんそれを最初から目指す人はいるんだけれども、目指したからといって成功するとは当然限らない。日本のファインアーティストの作品の動きを見ると、結局海外に売られている。
コレクターと呼ばれる人にとって、投資である以外に作品を買うことについて何か良いことがあるのか？といわれたら、それはやはり「人が自由になる」ということ。例えば、大金持ちになったときに、わけのわからないアート作品が買える自由。つまりそれは誰に非難されようが、「俺はこれがいいん

だ」という、自分自身をちゃんと作り出せる自由です。海外にはそれがある。日本にはその自由がどちらかというとない。

（上町）
本当そう思いますね。文化はやはりある種、パトロンのな人がいないと育ちきらない。

（黒澤）
ヨーロッパにはかつてのいわゆる貴族みたいな人達が今でもいて、結構、アートコレクションも持っています。見せて貰いに行くと、コンテンポラリー系で知られた有名な作家の作品はたまにしかなくて、「何これ」みたいなものが、知られざる作家の作品が平然と並んでいる。ところがコレクション全体で見ると、やはりその選んでいる「目」が見えてくるんです。そのように自由に収集している。その自由さはとても良いなと。比較して、誰それが賞を取ったからその作家の作品を買いましょう、という感覚ではない。

（上町）
とても面白いですね。この間百貨店で展示したとき、高値で売ってた僕らの茶碗を即買いしてくれたシンガポールの方がいたんです。僕らも言ってもまだ無名なので、「びっくりしました」と「ようこそ決断してくれました」と素直に言ったんです。そしたら、「日本人はブランドがないと買わないだろう、僕らは自分のいいと思ったものを買うんだよ」と。そういうセンスは本当日本人にないと思うようになりましたね。誰のお墨付きなのかというのを気にしてしまう。そこはこれからの教育の軸になりそうな気がします。

（真鍋）
先ほど、このスタジオのようなスペースがいいなというお話もありましたよね。具体的にはどうですか？「モノが作れたらいい」というのは、例えば小さなオフィスがあればいいのか、それともこれくらいのスペースがあって、実際プロタイプが作れたり加工したりする機械があるとか。

（上町）
環境はとても大事だと思っています。今はある意味すごくいい環境で、もともとデザイン専門学校があった駅前ビルの中に入っているんです。その持ち主がseccaの株主で、ものすごい安値で貸してもらっています。それ自体支援していただいていることなんですけど、今、3部屋使わせてもらっていて、切削機も電気窯もろくろもあります。僕らのPCの作業場もあれば、ギターを作るための木工室もある。ただ工房としては制約的なんです。土間的な場所がないので、水場も不十分。ただ、駅からすぐで色々な人が見に来てくれる環境なんですよ。あと、宮田(人司)さんの事務所の隣に構えさせてもらったので、すごい人がいっぱい来るんですよ。自由にお金を使えて文化的なことに興味があって、さらに発信力がある。僕らも気づかなかった高次元のことを指摘してくれる人が日常的に行き来する場所なので、どんどん僕らの感覚が更新されていく。

作る環境と人との交流の環境とのバランスという意味ではいいんですけど、今後もっとモノづくりにフューチャーしていかなきゃいけない。自分たちで価値を発信していけて、離れていても人が来てくれるようになったときにはまた状況が変わってきますし、そのときはもっといいものが生まれる

環境を作ることにウエイトを置いた方がいいという方向に流れていく気がしますね。

（真鍋）
泉さん、問屋町の協同組合の事務局長をやられていますよね。まさに問屋町の状況を一番御存じだと思うのですが、例えば、この上町さんのような方が問屋町にいてもらったらどんな感じになるだろうと想像してみたりしません？

（泉）
まず、今の若い子には問屋といってもなかなか知らない人が多くなってきている。「問屋」っていうのはもうひと昔、ふた昔前の言葉になって、もう要は卸、中抜き時代になってきています。
メーカーから直に買う、あるいはネットですぐに手に入る、ですから昔からの問屋業という会社はどんどん減っています。減って廃業して空いて、来てくれる新しい方は多少、卸の部分もやっていますが、自分で企画、提案をして商売をしている方が多いですね。単なるメーカーからモノを買ってきて売るという会社はもう成り立たないので、そういう方はもう一切来ない。そういう中で、今はサービス業的な業種がどんどん出てきています。そういうビジネスの方は、非常に目新しく、いろんな展開ができる。

問屋町で工芸といえば、加賀友禅なんですよ。呉服の世界の方が多い。昔は60、70社もあって、今は30社を切るくらい。今も残っている会社は厳しい世界にいるわけです。それで私のイメージでは工芸というのは、作家の方が芸術家としてのこだわりが強いイメージがあるんですよね。「自分で作ったものを買ってくれ」と。お客様のニーズに応じて、柔軟に動ける人はまだ少ないイメージがあるんです。しかし今のビジネスは、お客さんからの依頼でデザインを提案して、作家の方が柔らかく考え、「このお客さんは何を考えているか」と、どんどん入っていくれてるということですよ。

問屋町に新しい風を吹かしていただける方っていうのは、非常に興味はありますし、いろんな面で展開ができるかと思っています。

（上町）
ありがとうございます。偉そうには言えない立場なんですけど、今直面している課題として、いわゆる問屋は僕らにとってはとても重要で、欲してるんです。ただ今までの、ものを安く買っただいて、なるべく自分たちの売上をのせて売るというのではまるで通らない。今、情報が透明化しているので、そういう人は淘汰されると思います。

問屋というのは、アートギャラリーのギャラリストと同じ役割だと思うんですよ。人脈を含めマーケットとつながっている方が、「売る」というところに専念して、ちゃんと世の中に発信して顧客に届ける。しかし作り手の思いもちゃんと汲み取って、ちゃんと情報とモノを届ける役割というのは、この「情報」がすぐに届いてしまうだけにとても重要で、むしろ求められる職業なんじゃないかなという気がしています。

この間説明に行ってきたのですが、「人工知能が進んで仕事がなくなる」と言われているじゃないですか。今の問屋の仕事もなくなるという人がいるかもしれないんですけど、技術が発展したらそういうわけじゃないと思うんです。むしろ、どんな仕事の意味がポジティブに変わっていくんじゃないかな

と。
誰もが等しくサービスを受けられるような社会にするためにAIを含めたテクノロジーが使われていくと思うんですよね。そうなってくると、「自分らしさをどう仕事と結びつけるか」ということを考える人が増えてくる時代がやって来るんじゃないかなと思ってます。自分が持っている能力、努力、興味、関心をどう世の中に当てはめていくとそれが仕事になって貢献できるだろうとみんなが考えるようになる。そういう社会を実現するために、どういうセンスがみんなにあったらいいんだろうと考えたら、例えばある人が社会に対して疑問を持って、それに対するアイデアを持って、実際に行動して何かを吐き出したと。一人がこういうことをやっただけでは、まだ価値が生まれてないですよ。一般の人たちがその人の行動をジャッジメントをしてはじめて、価値が造形される。つまるところ、誰もが互いに行動の価値を評価できるリテラシーが社会に蔓延していくと、作り手が苦しむような時代にはならないんじゃないかなと、そうなると問屋の立場も逆に守られてくるんじゃないかと思っています。

じゃあなぜそういうセンスが今、希薄か。もともと物々交換していた時代、シンプルに自分たちがお互い認め合った価値の等価だと思ふ価値を交換していたからよかったですけど、貨幣というものが発明されて、貨幣を介して、モノと価値を交換できるようになった。ただ、この仕組みを支えている貨幣というのはあくまでも日本銀行券であって価値を証明しているだけの紙っぺらですよ。でも、その「価値の証明をしているだけ」という前提をみんな忘れてしまっている。そもそもモノの価値を評価できてないと貨幣は機能しなかったはずが、価値の中にインクルーズされてた貨幣そのものにみんなが目をやってしまって、その奥にあった大事な価値を歪んで見てしまってるのが、今の社会を悪くしてしまっている1つの要因じゃないかなと思っています。

今、僕らが力を入れたいのは、貨幣を抜いたとしてもちゃんと価値を正当に評価できるリテラシーを育てていきたいというのが前提にあります。こういう思いを自分たちのモノづくりを通してできさえすれば、いろんな人の役割が明確になって、信頼し合える。お金がなくても生活できる社会がたぶん理想なんですけど、結果お金がなくて困るのは社会なので、「正当な価値の交換」がちゃんとできていくはずですよ。先ほどの「作り手がエゴになっているのでは」ということもそうだと思うんですけど、自分の作っているモノが誰かの役に立たずお金が得られないというのは、要は信用が得られてない。こういう単純な構造さえ理解できれば、やはり自分の「作りたい」と「ほしい」という人をどうやったらマッチングできるかということに頭を悩ませるはずなんです。そういう価値の等価交換みたいなことが、間接的な答えになっているのかなと思います。

（真鍋）
一応、予定が7時半なんですけど、追加で質問があれば。

（参加者）
いろいろお話聞かせていただいて、間を取り持つ通訳みたいな仕事の方が、今デザイナーという立場で、一番大事なんじゃないかと常に思っています。その中で、上町さんがされていることは、ほんとにそのモノづくりの作り手とビジネスを繋げる役割をされていると実感しました。

私はお花を生ける仕事をしているんですけど、花が生きる器

対話

③ 黒澤伸



くろさわ・しん

水戸芸術館現代美術センター、金沢21世紀美術館と、2つの美術館の立ち上げに関わったのち、2006年より金沢湯涌創作の森勤務、2008年より同所長を務める（対話当時）。2017年より金沢21世紀美術館副館長に就任。



モデレーター／真鍋淳朗

持することが最重要と考えられており、新しいことへのチャレンジが中々難しいのが現状です。実際は新しいことへのチャレンジが必要であることは十二分にわかっているのですが。ただ、今日ヒントを聞いた中で、そういう友禅のお客さんというのは個人なら呉服店、後はそれにつながりが広がって、料亭の女将だとか、スナックのママだとか、そういう飲食につながる方がお客さんとして非常に多いんですね。そういう面で、うまくマッチングすれば世界にいろいろと広がりが持てるのかなと思いました。

（上町）
そういう意味で問屋町は、やはり情報発信がどうしてもとぼしいですね。せっかく美大の方々が関わっているのに。美大の教育内容はまだまだ改善したいという個人的な思いはあります。同じような人種の人たちが束になって、毎日4年間過ごして、社会にほっぽり出されたら、そりゃ適応できない。そこで高め合うことは重要なんですけど、例えばデザイン科では、仕事に自分の役割を見いだせて、貢献できて、会話ができて、結果プロジェクトとして成立する。そのコミュニケーションの部分で、ビジネスを意識した排出の仕方を学生のうちからやらないとまずいと思っているんですね。僕が一番苦労したところなので。

世界はそこにもう気づいていて、総合大学などでは統合準備されてきています。こういう場所が学生のトライアルの場所としてあればいいのかなと思います。色々な大学がありますから、美大に限らずプロジェクトチームを組ませて自分たちなりにこの仕事を使い、問屋もその考え方を取り入れながらモノを世界の人たちに発信する場所として、どういう活動をしたらいいかをコンペティションしまくればいいのかなと思いました。

（真鍋）
ありがとうございます。今回の展覧会も実はその方向を目指そうとして、今年の10月に向けて、コンペティショナルなことを仕掛けていこうと思っていますので、まさにそのアドバイス、その通りだと思っています。ありがとうございます。

（上町）
楽しみにしています。

（真鍋）
じゃあ時間になりましたので、今日はこの辺で。

（拍手）
（2017年1月10日）

とどれだけいい器であってもすぐ枯れる器とあるんです。もう何百と生けてきてますけれども、名品といわれる器に生けたとしても、一瞬で枯れることがあります。だけれども、無名でも、ある方の作品は根っこが生えます。私知ってる中で、その方2人いらっしゃるんですけども、火の仕事、薪窯の仕事をしていて、それが理由なんじゃないかなと思っています。

（上町）
かなり感覚的なお話しですが、面白い視点ですね。
日本人で、一子相伝の技術みたいなものを大事に守るじゃないですか。それを美しいと感じる一方で、「世の中のためになってないな」と思っているんですね。海外だと自分がやっている出汁の取り方とか開示して、分析結果をみんなでシェアするのは当たり前感覚なんです。みんなでもよりよくすればもっといい競争ができる。今仰られたことは、そのヒントになるんじゃないかと。陶芸業界をより良くしたいなら、思っていることを分析して、みんなと一緒に「なぜなのか」を研究していく体制を発展したら面白いかなと思います。

（真鍋）
僕はそこはすごく大事なことだと思っています。今回華道の方にかかわってもらってよかったと思うのは、花を生けるときのこだわりですね。朝、光のあるときに、白い色の椿を生けていたが、夕方、オープンの前には赤でないとダメとか。一瞬一瞬が勝負というか、ある意味しばられるのかもわからないけれども、そういう人間が培って今後も継続するものが金沢には結構残っていて、魅力ですね。そういうものとデザインの必要な要素が社会化していくために、いい連携、コラボができればいいかなと。

（上町）
そうですね。今まで僕は精神的な部分をとても大事にしてきたつもりです。例えば、料理人が10年かけてやっと板場に立てるとか、美しさはあるんだと思うんですけど、その結果、今料理人はめちゃくちゃ減っている。根性の問題ではなくて、料理業界のことを自分たちだけのことだけではなく人類とか地球レベルのこととして考えたとき、より発展させる方向に、みんなと共有することが大事でもあると思うんです。僕らも自分たちで作っているデータやレシピをどんどん公開していこうと思うんですけど、そこまでやって気づかなかったらそれまで。ただそれぞれの職人やすごい感性のいい方が、次に気づける方を育む努力の蓄積が文化だと思うんです。

（真鍋）
デザイナーの人はそういうふうに広げていける、つなげていく。アーティストは自分のやりたいことだけやる傾向が強く、工芸作家はさらにまた頑固な人が多い。そこにもっとデザイナーが入って、いろんな連携ができていくといいなと思っています。金沢は先ほども言ったように作りたい人ばかりがいて、それが社会とつながっていくか。本当の意味でいい連携がないと、金沢は立ち行かなくなるのが目に見えている。そういう意味で上町さんのこのアプローチというのは、すごい僕は興味があります。

（泉）
伝統工芸の加賀友禅業界では、永年の歴史による価値を維

（真鍋）

今日は湯涌創作の森の所長、黒澤伸さんに来ていただきました。黒澤さんと私は、金沢21世紀美術館ができる前、私が金沢に来て美大の教員になった頃、美術館が建つ前だったので学芸員にどんどん町中でいろんな企画をしていただきました。その頃からなので、私としては金沢に来て一番長く付き合いのある方です。

まずは、この間屋まちスタジオのようなオルタナティブスペースについてどういう考えをお持ちか、ということからお話しをしていただければと思います。よろしくお願いします。

（黒澤）

スペースがランニングしていくためには、組織やその裏支えが大事で、そこをしっかりといかないといけない。そのためには、ある程度社会的に認知されていたり、了承されていくプロセスが必要になりますよね、一般論として。僕自身がオルタナティブスペースを考えようとした時にはそのことが気になってしまいます。というのは、オルタナティブというくらいだから、あまり表立った、きちんとした世界ではない面がある。昔で言うところの、音楽ならインディーズであったりとか、わけのわからないものをやるとか。そういうものを街の中のどこか、どういうスペースがそれを担保して活動を支えていくのだろうかということが、大事な面としてあると思うんです。オルタナティブスペースというのは次の時代を動かしていくための下準備をしているような部分がある。ですので、その時点ではきちんと認知されたり評価されたり、ましてや素晴らしい活動であるとの評価を社会の側からいただくということは、なかなかないはずだと思うんですね。

（真鍋）

その通りです。

（黒澤）

例えば東京のレントゲン藝術研究所が、かつてそういう場所だったと言われたりします。でもその当時は、本当にごく一部の人たちが、尖っていた面を面白がってびっくりして見に行ったり、関わったりした程度で、それほど社会的な認知があったとは思えない。マニアックなメディアは色々書いてもいたけれど、たまたま個人的なギャラリーが無茶な借金をしながらランニングさせていて、それでも起きていることが関係者には面白過ぎたしガンガンやっていた、みたいな感じだったと思うのですよ。

金沢全体の中でも少しずつ新しいギャラリーができて、若干オルタナティブと言ってもいいような活動の気配を感じるようにはなってきたんですが、それこそ我々　ー私は1959年生まれですけどもーが目を覆いたくなるぐらいの、そういう活動がもっとあってもいいじゃないかと、本当は思ってるんですよ。

金沢は工芸のクオリティを上げて質を高めていく努力をするというのはすごくわかるけれど、一方で「いくらなんでもそこまでする？」とか「それは馬鹿らしすぎない？」とか、煙たがられるような「わけがわからんもの」の重要性を、ではこの街は一体どう担保していったらいいのかなと思うんですよね。

実は、よく考えてみたら世界中にある文化都市には、お金や人が集まっている。パリ、ニューヨーク、ベルリン…。そういうところでも本当にいろんなことが起こるけれども、その地場

にもともとあったものだけでやっているわけではない。外から流入してくる、ミュージシャン、アーティスト、ジャーナリストとかもたくさん活動していて、そこから文化発信が起こっている。

なので、オルタナティブな活動であると同時に、流入してくる新しいアイデアとか、あるいは単純に情熱やパッション、そういうものを持っている人間が、興味を持って金沢にやってきて、なおかつ金沢で、アーティスト同士とかそうじゃない人たちとも接触を起こしながら思いつきり何かやって、また外へ向かっていく。そういうスペースがもっともっとたくさんあったらいいと思うんです。

もちろん21美があれば、世界からアーティストがやってきて展覧会をやり、その間にレクチャーしたり、いろんな人と知り合ったりということもあるでしょう。しかし美術館が呼ぶような世界的なアーティストの人たちだけではなくて、本当に草の根で、どこどこの大学や専門学校を卒業して面白そうだから金沢来てみる。いる間にこれ見て、あれして。そういうことのできるスペースがもっとないと、金沢からの発信というのは起こりづらい。

そういう意味で、この間屋まちスタジオのようなスペースがとても必要だと思います。実際にアーティストとか、社員の人たちが来ている。ここだけが下支えするわけではないのだから、このスタジオが、ここのスタジオなりの個性を、他のどこのオルタナティブスペースとも違う形で見つけ出してほしいと思うので、あえてこうあるべきだという風には思いません。独自の成り立ちがあり、背景があり、どうやったらこのオリジナルなものになるかと思ってはいますけれどね。

今日のための打ち合わせをした時に、特に映像とか何も見ることなく、無手勝流に話しましょうと言っていたんですけども、ちょっといくつか持ってきました。古めかしい、ある意味馬鹿らしい資料といえますか…。そのつもりで見ただければと思います、22年前のものです。

<映像が流れる>

これどなたかわかりますか。会田誠さんという作家で、これは学園祭の様子です。これは作品として発表しているわけではなく、学園祭なのでみんなで大騒ぎしている中で歌った。普通にカラオケに合せて歌っていたものです。

これは《相談芸術大学》とって、小沢剛さんというアーティストが、水戸芸術館と一緒に行ったプロジェクトの一コマです。擬似的に美術大学を作って、若い作家たちが教授役を務める、という。《相談芸術》というのは、作品について「この後どうしたらいい？」と人に相談し、「こうした方がいい」と言われたらともかくそのアドバイスに従って絵を描いてゆく、それを展開して作品を仕上げるという、当時小沢さんの考えていた制作の態度・プロセスのことで、大学の方はそのアイデアに想を得たプロジェクトでした。そこに会田誠さんなども教授として来ていた。カラオケを歌っているだけと言えば確かにそれだけですし、彼は特に音楽の人でもないので、こっそりと前の日に近くのカラオケボックスに行って伴奏を録音して来ていました。

（真鍋）

黒澤さんはその時はどういう立場だったんですか。

（黒澤）

一応、その相談芸術大学の中での役割は理事でした。まあでも、水戸芸術館の学芸員として。見に来た若い子たちは、まさか会田さんがこまでするとは思ってなくて、あまりにも唐突で、実際かなり戦慄的だったんです。大学のお祭りですが、アーティストとして来ているので、本人もパフォーマンスには相応に工夫はしたと思うんです。その会田さんなりの態度というか、覚悟というのか、その訳のわからなさとの凄さ。そんなひょんな思いつきみたいなことが、やろうとすればいくらでも出てくる環境が、やっぱり欲しいなと思っていて。

そういえば、ここもアーティスト・イン・レジデンスができますよね。湯涌創作の森でも今年からその名称を使ってレジデンス事業を始めています。施設がしっかりしてる割には、なかなかもったいない使われ方なので、速くからも使う人を呼んでみようかということ始めたんです。で、ちょうど今は韓国から金昭希(キム・ソヒ)さんという、猫の銅版画を作る方が来ています。

（真鍋）

これはどういう形で。

（黒澤）

今回はパイロット事業ということで『版画芸術』誌の編集の方に作家の紹介をお願いしました。ゆくゆくは創作の森の施設内に、常時作家が泊まるスペースを作り、公募で継続できればと思っています。そんなわけで事前に作家にお会いすることができないまま小松空港に迎えに行きました。初対面お互いわからないので、「頭に風船つけていきます」と言ったんです。「それなら必ずわかりますね」と、本当に一発でわかって、笑いながら駆け寄って来てくれました。

それを思いついた時、うちの20代後半のスタッフに言われたんです、「所長、それ本気でやるんですか」って。「僕なら絶対できません」。「なんで?」。「恥ずかしくないですか」。「それは若干恥ずかしいかもしれないけど、別にそんな知り合いが見てるとも思えないし。仮に見られていたところで…。」と。

（真鍋）

その年代の人って、無理なのかも分らないね。僕らの時代はバカなことをみんながやったというか、平気だった。むしろ、そういうのをやる事に意味を感じる、そういう時代だったよね。

（黒澤）

でも、これは別にちょっとした工夫じゃないですか。単にわかりやすいように。

そういうちょっとした工夫ということを、例えば絵を描くような人ならいくらでもやる。「ちょっと違うな、変だな、こうしよう」という感じで。そういう、工夫をいくらでもやれる環境を、街の中にどうやって作っていくか。

金沢で特に工芸の場合は、それこそ何度も重ねて削ってを繰り返して、きちんとしたパフォーマンスに仕上げますよね。焼き物にしても何やら切り込みを入れたり焼き直したり、擦ったり、だんだん精巧なものに仕上げて、のような。クオリティは、その上げ方をたどって実際凄く上がっていく。そうすると一般の人には全く手の届かない領域になっていくわけですね。同様に金沢21世紀美術館が、世界的に大活躍してるよ

うな作家を連れてくると、やっぱり手が届かなさそうな感覚を受けるわけです。本当は街の人がそういうアーティストのすぐ隣にいて、冗談話をしてもいい関係なんですよ。でも特別な人扱いになっている。

その乖離がこの町にはあると思うんですよ。素晴らしい美術工芸と、そうじゃないもの。そこをもっとなだらかにつないでいく工夫が必要だと思ってるんです。もっとはっきりと言ってしまえば、「美術や工芸は素晴らしいもの、凄いものだ」と教わるじゃないですか。そうと言われると、多くの人にとって自分がやっていることは凄くないものになっちゃいます。そうすると、だんだん工夫もしない、創意も持たない、となってしまう。それが実はとてももったいないと思うんですよ。

今日ここにギターを持って来ました。昨日、凄いギターの職人の話が出てきましたけど、まあ、約50万円ぐらいで、見るからにかっこいいなというギター。

こちらは私がパーティー用に作った冗談ギターです。弦は木綿の普通の糸なので、弾いても音が出るわけではないんです。でも、「出ますよ」って…<シャンシャン、鈴の音>。鈴が付いていて…これホントはラケットだったんですね。エアギターでちょっとしたパーティーでのパフォーマンス用のものです。ラケットをそのまま使えばいいやと思いついたけど、もうちょっとギターらしくしたらいいんじゃないかかと思って作ったものなんです。ただ、これは完成度が高くない。工芸品みたいなものに比べると全然ダメです。もちろん作品として作っているわけでもなくて、ただの冗談のおもちゃとして作っているだけです。

でも、何をどうしたらギターに見えるかと。指板は木でなきゃいけないとか、木目がでこぼこの木をわざと用意して、これをポチポチつけるとメタルっぽくなるとか、ここを金属にした方がそれらしい、みたいなことでデザインしている。本当に馬鹿馬鹿しい代物なんだけれども、この程度を思いつけば誰にでもできるはずの事を我々はしなくなっている。なぜかと言うと、これは素晴らしい美術品じゃないから。自分がいくらやっても、「素晴らしい工芸品じゃない」。だからそういうものに手を出さない。美術や工芸と言われる以前の「工夫する感覚」から遠ざかっている人がいっぱいいると感じます。例えば創作の森のような所であっても、ここに来る人達は、アーティストでもプロを目指しているわけでもない人もいて、趣味でやっていたりする。悪いことではないんですが、そうなると作ることが「消費」になってしまう。「マフラー作ります」「染めものやってみます」「カバン作って楽しんでます」とか。作り方も含めた、伝統の文化の遺産の一部を、時間使ってお金使って消費している、創造ではなくて。

（真鍋）

プロだったら地元の方が多いですか。

（黒澤）

最近は地元だけじゃない。版画やシルクスクリーンみたいなちょっと特別な機器が要求されるようなものの場合、結構県外からが増えてきています。泊まりながら。ただし、それは新幹線効果で北陸が凄い目立ってきたからということもあるでしょうね。意識の中に金沢が入ってきて、何があるんだろうと調べてみたら、ここがあるじゃないかと。

例えば、今年の秋 2ヶ月半くらいいた仙台の若いクリエー

ターの方や…彼は滞在中に小矢部アートハウスのコンクールに応募して見事に受賞しました。あるいは毎年北海道から一か月ぐらい来る人もいます。正月年明け早々、4日から開館して、その日に来た方は神奈川県からとか。

（真鍋）
新幹線効果っていうのもあるし、金沢っていう街の魅力みたいなものも関係していますかね。

（黒澤）
もちろん関係しているし、どんなところか確かめに来ている。ただ次にそれが広がっていくかどうかは、受け入れ先の我々金沢側次第だと思うんだけど、まだまだいけるんじゃないかと。

ちなみにこれ音が出ないと言いましたけど、ある意味出るんですよ。やってみますよ。

<実演:鈴の音、笛の音、ギターの音、歌が始まる>
<拍手>

（真鍋）
結構楽しいね。馬鹿馬鹿しくて。

（黒澤）
どうしても社会的にきちんとしたことをしようとする時に、そういう馬鹿馬鹿しさが失われる。それがもったいない。馬鹿馬鹿しいものって人が外から寄ってくるんです。オルタナティブスペースって、本当にアホかというような、「わけが分からん」ものをもっとやっていいなと思っています。
今、津幡のあるスペースで展覧会をやっています。ちょっと病気のある方の作品を展示していて、ギャラリーを運営している方が説明してくれたんだけど、やっぱり「表現する」ということに、改めてびっくりした、と。リハビリなのか何なのか、なぜそういうことをするのか、なぜそこにそういうものが置かれているのか、よくわからないようなインスタレーションのプロセスを見ていると、表現と人間との関わりを改めて考えさせられる、と。

その展示は、多分一般の人はわけがわからない展示なのだと思う。行ってみたところで、「はぁ」「なんだこれ」だと思う。作品を見慣れた人が見ても、「どういうことだ？」という感じだと思うんです。それでも、それぐらい一般的な社会性のないものも表現としてすごく大事なんです。それを扱っている、事実上のキュレーションをしたギャラリスト自身、ある意味ショックを受けている。それは本当に意味があることだと思うんですよ。

この話をしたついでに言うと、僕自身「何で学芸員をやってるんですか」と聞かれることが多かった。で、「嫌なことをやらずに、好きなことだけやっていたらこうなった」という言い方もしたんですけど、一方でふと思いついたことがあります。子どもの頃にロボットを作ったことがあるんですよ。着るロボット。ダンボールに穴を空けて頭と手が出るようにして、お腹に扉をつけた。開けると一枚下にゼンマイとかいろんな絵が描いてある。「凄いカッコ良いものができちゃった」と思って友達に見せたんです。「どうだ、カッコ良いだろ」って。そして、「なんだこんなもの」って自分が脱いだ途端にポコポコ

にされたんですよ、そのロボット。その時すごく悲しかった。悲しいのと同時に悔しい。というのは、「このカッコ良さがわからないのか」とも思いつつ、「こいつにカッコ良いと思わせられるだけのものを、僕は作れなかった」という思いもありました。学芸員の仕事も、色んな作家の作品を紹介しようという時、それと全く同じ気持ちを感じたりします。

一般の人にどう見せようか…。「何これ？」ってなるのが悔しくて一生懸命やろうとしている面がある。アーティストの仕事と言うのは、わけわからない人が、わけわからずに、わけわからないようなことをししているように見えてもおかしくない。例え話ですが、砂浜を歩いて帰ろうとしている人がいました、としましょう。ふと、気がついたらその人の後ろに足跡が残っている。「この足跡、面白くない？」と思った本人は、さらにステップを踏み始めて、そのうちこう、踊り始めて、「面白かった～！」と言って帰ったとしますよね。それはパフォーマンス（動き）ではあるけれども、本人がそれをパフォーマンス（表現）としてやったかどうかは分からない。でもそれを外から見ていた人が、「あのステップは何だ！」「びっくりだ！」と言う。あるいは、そこに残された足跡を見ながら「どういうことだ!？」と、「これは凄いものを見た！」と、「あいつを紹介したい」と思う人間がいはじめると、そのアーティスト（作り手）に近づこうとしますよね。

そこで重要なことは、その最初の事件を起こしてくれた人間がいないと、「これは凄いいんじゃないか」と言って、紹介しようとする「目」があったとしても、気が付けないままになるんです。だとすると、最初に何かしでかした人が、自由に暮らす、思い立ったが吉日のように次々色々なことをする。それが結果的に許される、という環境が「オルタナティブ」の場にはないといけなくて、それこそがオルタナティブスペースだ、と思っているところがあります。それをどういう風にこの街の中に作っていけるのか。

（真鍋）
金沢アートグミの話でいうと、開業当初の展覧会オープニングの日、アーティストが自分でプリントアウトしたものを全身ヌードに張り込んで銀行のど真ん中で、オープンと同時に飛び出すというを行いました。これはある意味本当にチャレンジで、下手したら「何を考えているんだ」と銀行から言われるかもしれない。でもそれがあって、かなりのことまではできる環境という感じになっています。一方でここ問屋町は、ビジネスの町なので、彼らの目を超えられるような何ができるのかということは、課題ではあります。

金沢には確かに21美もあるし、高等教育機関もあるのだけれども、実験的なチャレンジングな所っていうのは、なかなかないのが事実です。ここを運営していくにあたり、金沢アートグミ的な組織を作ったり、国際美術祭を仕掛けたり、黒澤さんの言っておられることもやりたい。僕にとってそれがアートの表現で、自分の作品というよりもそういう場を作っていきたいですね。

（黒澤）
極端なことをやればいいとは思っていません。そればかりが表現じゃないし、それはメジャーというよりはマイナーなもので、どちらかと言うと、珍しいものにならざるを得ない。けれども、とことんやり切っちゃったことが、せめて「まあ、いいか。」となってくれるなら、もの凄く自由が広がられますね。

その幅の広さを増やしていかなきゃいけない。さっき言ったような、きちっと作られた良いものではなく、「思い付き」のような、きちんとしたものとは全然レンジの違うものであったとしても、それを楽しんでいく感覚がもっと現れてきたらいいなど。

ふと思いついたのですが、日本がまだバブルの頃、インドネシアに行っているんなクラスのホテルに順番に泊まってみたことがあるんです。一番安い所が400円クラス。で、次がその倍で800円、2,000～3,000円、8,000円、2万円、7万円クラス。当時の貨幣価値で言うと、感覚的に10倍ぐらい違ってましたから、7万円のホテルは、日本で70万円ぐらい払うみたいなものだったんです。貧乏学生上がりの自分にとっては厳しい金額ですが、あえてやってみました。

一番最初の400円はノミとかダニがいて「どうしよう」みたいな所でした。それはそれで面白かったです。クラスを上げていって、最後の7万円クラスになると、自分の部屋の専用のプールがついて、部屋付きのメイドさんが5～6人いて、頼みもしないのに人の下着まで洗ってくれて、ウェルカムサービスも凄くて、完全にプライベートビーチで、逆に居心地が悪いんです。自分にちょうど良かったのは8000円ぐらいのところでした。ここは一般の人も普通に通っているビーチがあって、物乞いみたいな子どもも来るし、地元の人たちと普通にコミュニケーションできました。7万円クラスは、そういう人たちが近寄らない。ただ、全く別世界にしようとするというその努力は面白かったです。

アートも超高級なものだけが面白いんじゃないくて、どういうレンジであっても本当は面白がれると思います。ところが、そういう考え方がないんですよ。

半年ぐらい前、富山の方にあるギャラリーで、「破壊と創造」という、かなりクラシカルなテーマで座談会をやっていたギャラリーがありました。参加している作家の方々は、学生ではなく、大学は卒業した作家たちでした。作品そのものは必ずしも完成度が高いとは言えないかもしれないけど、挑戦している感じとか、実験している感じがありありとしている。シンポジウムそのものは、「テーマが古すぎるだろ」との野次も出ていて、結論には至らず、消化不良で終わっちゃったところもあったんだけど、若い人たちが集まっていて、そんな話をしている様子は、「凄く大事な時間だな」とあらためて思えたんですよ。21美が、世界から百戦錬磨のインターナショナルアーティストを呼んできて、レクチャーをして「チケット買ってね」というのとは、全然違う世界。参加者が直接関わり、自分に時間を費やして、実験の成果を確かめ合うために若い人たちが集まっている。

我々よりちょっと上の世代の人たちが、学生時代からよく芸術論議をやっていました。懐かしさと同時に、結構こういうことって必要だよなど、つくづく思いましたね。非社会的、あるいは反社会的に見えることであっても、ちゃんと幅広く見ながら、「誰が見てもこれはうなずく」というものから、見た人が「何やっているんだか全然わかんない」というものまで、全部を楽しんでいけるような環境づくりに、オルタナティブスペースというのはそれぞれのやり方で貢献していったほしい。

（真鍋）
オルタナティブスペースについて、実際その場がない、そのスペースが重要だということを話していただきました。今日は、劇団の方がいらっやっていますので、演劇の世界から、

ちょっとお話を。

（参加者1）
僕は30年ほど東京の専門劇団にいまして、ちょうど20年前に、地元に来ました。去年の1月1日にそういうスペースを作りたいと、ある民家を借りています。

作られているものを見たり聞いたりすると、一般的な言い方をすれば「面白いなあ」と思うのと、「つまんねーな」と思うのとあるじゃないですか。下手に自分の持ってきた考え方に合わせすぎると、自分を基準に「くだらないものだ」と思いはじめられない。そういうことがしょっちゅうあるものですから、その「面白い」という感覚とか、「もうちょっとこういうことが起こったらいいのにな」「やりたりな」と思うものを、どう展開できるのか。その方法論について、常に仕掛ける側として芝居でも思うんです。

それで、今単純に言うとして「どう混在するか」をずっとやっていくことなんです。出会いですね。美大生の方が来ていたり、音楽も地元の音楽家に頼んで入ってもらったり。それも、吟味をしてやってくれと言うことはほとんどなくて、たまたま出会った人に「やってくれない」「お金ないんだけど」。そうすると、東京ではなかった「何か」がそこで起こり、面白いものが生まれてくることもあると思うんですね。

そういう人と稽古を一緒にしていると、「芝居ってそんなに時間をかけてやるんですか」「ただかだか1時間のものに2ヶ月も3ヶ月も毎日、あーだこーだ面倒くさいですね」って。美術や彫刻、音楽をやってる人は、一人で一生懸命やる。3日あれば「やった」で、他の人が混じるのはめんどくさいと言うんですよ。違う人同士が、面白さを発見しつつ2ヶ月3ヶ月やれるかという問題は、すごく大きいんです。わかっていない人、違うことをやってる人と一緒にめんどくさいことをやるぐらいなら、楽しいことをやるというのはよくわかる。オルタナティブ空間で、新たな面白さもいいと思うんですけども、その視点から見ると、もうちょっと突っ込まないといけないなど。

（真鍋）
そういう方向を目指したいという気持ちは必要だと思うのですね。そういう人たちを、生業としてどう継続させるか。このスタジオでも、組織作りということも言っていますけれども、一方ではもっとチャレンジングなこと、他ではできないこともやっていくというのも一つの手で、それには社会的な縛りとか、色んなものを乗り越えていくということが絶対に必要だと思います。

（黒澤）
本当に目指すものが最初から見えてなくても、持続的に、自分で確認し続けて、作品を作り続けられるというのは、作家の力だと思うんです。ここまで作ったので、次はここまで試すという一貫した継続性を作ること。それを乗り越えるためには、色々なコミュニケーションを通して人と向き合っていく力も必要でしょう。でも全員がそれを持てるわけではないとも思いますが、持ってない人はダメとも言えないですけども。ところで問屋町という場所の社会性について話をしようと思いますが、こっって景観条例のようなものには引っかかるんですか？

(真鍋)

その辺は分かりません。

(黒澤)

金沢で「景観条例…？」と思う時があるんですよ。もちろん景観条例に反対する人は少ないだろうし、大切さはわかるんだけど、その中で建築をどうやって自由に作ってゆくんだろうと。例えば、創作の森の近くに「みどりの里」という施設があります。農業研修施設なんですけれども、そこでそば打ち体験ができる。でも街道から離れているから案内を出さなければ、誰もそこに蕎麦屋があることを知らない。当初「のぼり立てたら」という話が出ると、「それは景観条例的にどうか」という話も出てくる。

あるいは創作の森が使っている白い公用車が今年19年目で廃車になるんだけど、最後、子どもたちと一緒にワークショップでボディペインティングしようかと ー 車に、というようにな時にも、景観条例的にどうか、という話が出る。芸術の場合、本当に良い表現というのは、どう「抑制」を利かせて作られるかだと思うんです。傍目には、表現って全く自由なものであるように見えるかもしれないけど、作り手にとってみれば、その表現なりのルールを持って抑制しつつどう完成させるかということをしていますよね。自粛するということではなく、過激だろうが、残虐な表現だろうが…残虐をそのままやって人殺すわけではないのがアート、表現の世界ですから。そうじゃなくて、その残虐さを封印せずに出しながら、どうやって抑え込んで作品にしていくのか。その表現は、それぞれのアーティストが作っているルールの姿でもあるんですね。

景観条例で言えば、良い設計家ならばその環境をきちんと見抜いて、一見違和感があるように見えるものであっても、確実に価値のあるものを作っている。にも関わらず、条例があるからという理由でいかにも「当たり前」ものを持ってこようとする態度というのは、さてどうしたものかなと。

ここは街中の中心「外」のところですよ。商業施設だし、企業の集まりだから、正直言って殺風景じゃないですか。それを壁画、幾何学的なものでも、カラフルなものでも、あるいは粘土のようなものでもいいんだけど、ともあれ実験していくと。この場所の建物の色や形が、「これ凄く綺麗」「美しい」「恐ろしい」「戦慄する」とか「じわじわくる」とか、そういうこともしていったらどうだろうと思います。

(真鍋)

今話を聞いて、可能性はあるなと思いました。

(黒澤)

目に見えるものって見ちゃう、見えちゃうじゃないですか。そのある種の強制性があるから、パブリックアートっていうのは、時々怒られたりするわけですよ。「なんだ、あのわけの分からんものは」「ハレンチな」とか言われちゃう。でもそれを見越して、大変だけれどもやってみて、場合によってはそれが楽しかったりすれば「あそこは実は面白い場所だ」と、「車で通るだけでも良いから行ってみよう」となる。実験だから、本当に気持ち悪ければやめればいい。「これはちょっといくらなんでも」ということなら、「半年で元に戻します」でもいい。少しでもそういうことを始めてみれば、状況は目に見えて違ってくると思う。そうやって、パターンの違う様々なタイプの変り

種を景観として提案していく。例えば、住宅やビルのモデルの変わり種みたいなもの、そういうデザインの見本市になってもいいかもしれない。

その経費その他はどうするの、についてはそれこそ僕は行政が音頭取っても構わないと思っています。アートみたいなことって、昔は王様や殿様がしていたわけですよ。相当変わった人間たちを抱えて面白がって。今はそういう時代じゃないから、税金をどういう価値に変えていくべきなのかという問題になる。企業で自由にやるにしても、他所の企業のビルを勝手ににはできないですね。客観的に考えれば、そんなことに使えるお金はいつそのこと公金に関連したものになっちゃうんじゃないかなと思います。

(真鍋)

もう一つこの特徴として、地域の方とか企業の人とワークショップ形式を仕掛けているのですよ。今日はワークショップを専門にしておられる方がいらっしゃるので、そういうワークショップ的なことと社会との関わりみたいなことをお話してもらえませんか。

(参加者2)

黒澤さんのお話を聞いて「私は幸せものだな」と思いました。どっぷりと40年近く子どもたちの造形に関わっていると、彼らの表現というのは、正に全て「子どもだから許される」。子どもの作品の価値を認められないという大人の目は置いて、子どもたちは何でもできるじゃないですか。でも、「子どもの作品？」と言われる環境もあり、それに影響されて子どもたちが自由に表現できないということもある。自分の仕事は、将来アーティストになるかは別として、とにかく表現することは楽しいし、あなた達が生きてる世の中はアートが溢れていて、実はあなた達がすごいアーティストであって、でもあなた達みたいな素敵な子どもの感覚をそのまま持っている大人もたくさんいるんだと伝えること。そんな大人たちが美術館だけでなく色々な場所にいるんだ、という感覚を育てていくのが自分の仕事かなと、今日のお話を伺いながら、「間違ってたかった」と思いました。

「あなた達が思う様な材料で、得意と思うような材料で、表現できればいいんだよ」と、その感覚を身につける時間が図工の時間です。そうやって育った若い学生たちが手伝って、話して頂いているのは「子どものアートってすごいです」。自分達も今花開いて、この年齢で表現したいと。子どもと触れ合うと、すごく触発されます。そこにもワークショップをする意味はある。

(真鍋)

そういう意味で、学校教育の中に美術教育も取り込まれていますよね。アートは自由で今までにないものや凄いことにチャレンジする、極端に言うと社会を変えていく面もあるじゃないですか。学校教育の中でそことの矛盾もありますよね。

(参加者2)

子ども達の発想は刺激を与えたら無限に広がるので、その力を借りればもっと面白いことができる。

(真鍋)

そこに関わってくる人たちの中で、想像がつかない何かが生まれてくる。黒澤さんはカカシのワークショップなどもやっていますよね。

(黒澤)

湯涌には、金沢市の施設が四つもあるんです。縦割りだから、お互い口聞かずに仕事は進められるんだけど、それもつまらないので「何か一緒にできることはないか」というところから、じゃあ「カカシでもたくさん作るというのはどう？」って感じて始まった。アートなんてややこしいことは言わない。ただ結果として知り合うはずのなかった人たちが活動を通して出会ったり、そこでカップルが誕生して結婚したり。強制的な繋がりではないけど、それが社会的な副産物です。おじいちゃんおばあちゃんに「カカシ作ろうよ」と、地元の人で誘い合っ。外から来て働いている人たちも、何か楽しそう、と、覗いてみたり、アプローチしてきたり。もちろんそうじゃない、かわらない人も結構いっぱいいますけどね。

実は昨日も僕、ここ来ています。場所がわからなくなっちゃって電気が煌々としているオフィスがあったので、その人たちに「問屋まちスタジオってどこでしたっけ」と聞いたけどご存知なかった。「そうなのか、6年経っても多くの人はまだ知らないんだ」と。アートのスペースの領域とすぐ近くにいる彼らとの境目には随分距離があるという風に思いました。だから先ほど言ったような、表に出てしまう、嫌でも目に入るようなものごとはどうかと…。そこに初めてワークショップが成立するんですよ。「こういうふうにしよう」「そっちの方がいいじゃん」というようなやり取りがとても有効に機能すると思います。プランニングで見えていたものがリアイズされた時、「こういう風になるのか」という、驚きのような、その共感も。同時に嫌悪感があれば、「半年後まで待って違うのに直す」でいい。

(真鍋)

そういう議論が生まれてくる。

(黒澤)

そうです。自分たちが働いている場の環境が、楽しくなったり、面白くなるようなことは、決してやぶさかではないと思う。最初から「ものづくりのワークショップやってみましょう」というとかなりの距離があると思うんですけど、彼らの近くに何か赤い壁面が出てくるとか、そういうことを例にしながら、一方でオフィスのあり方がどういう風だったら楽しいのだろうかとか色々話し合ってみては。企業にとっても、お得意様が来た時に、ここがどういう場所かも含めて「楽しい街」と認識されるようになれば…。

(真鍋)

学生から何か質問ないですか。

(参加者3)

私は三重出身で、隣の愛知で2010年から「あいちトリエンナーレ」をやってるんです。金沢でもそういうのできないのかなと思って。

(真鍋)

金沢ではないけれど、奥能登国際芸術祭がそういうことですよね。

(黒澤)

今や日本中でトリエンナーレやビエンナーレが充滿していて、金沢がこれから始めても飽和状態でしょう。参加作家も非常に似た顔ぶれになるかもしれないけれど、奥能登は奥まったところにあるので、やる意義がとてもある。国際芸術祭をする主催者は、素直に日本中、世界中から見に来て欲しいと思ってるわけですよ。交流人口を増やすことも含めて。せっかく石川県の地元がやるんだから、その玄関口にある金沢でも「何かしよう」というのは自然なことだし、実は学生だけでも本当は何かを始められる。

もし学生たちが別の作家を呼びたいのであれば、自分たちで呼んでくれればいい。大きな学園祭気分でも良い、美大生たちがそれをやったら面白いかもしれない。

金沢市は、「工芸トリエンナーレ」をやっていますけどね。

(真鍋)

どうしても工芸に限定されてしまう。金沢というのは工芸に厚い援助があるのです。いいことなんだけれども、あまりにもかなということもある。それも避けて通れないし、むしろそれを取り込んでやっていければいいとは思いますが。

それで、今度北川フラムさんという、奥能登国際芸術祭の総合ディレクターが美大で講演会をしてくれるんですよ。その時に、黒澤さんが今言われたような意見をぶつけてみたらいいと思いますよ。さっきの会田さんのような勢いですよ。なかなかできにくいものだけれども、可能性は全然あると思います。

(黒澤)

五美大に声かけて、奥能登国際芸術祭に合わせて金沢で何かやろうって…まあ、全校ができないかもしれないけれども、「来れる？ 来れない？」みたいなことがあっても良いかもしれないね。

僕が、水戸で仕事をしていた頃から、アーティスト・イン・レジデンスのようなことは随分行われるようになってきている。当初、ドイツのバタニオンという美術館がアーティスト・イン・レジデンスという言い方でこの活動を始めた。実際にアーティストがそこに住み込んで、特にワークショップするとか、作品を作りなさいとかっていうのではなく、「住んでいます」という。その結果そこで起こることが、その人のキャリアになっていく…そうしたことに期待してスタートしてるプロジェクトです。確か80年代前半ぐらいから始まるんだけど、その言葉はまだ80年代はほとんど知られてなかったと思います。

今、アーティスト・イン・レジデンスは日本中でやり始めている。ただ、もっともっとナチュラルに自然体で出来るんじゃないかと思っているところはあるんです。これ見よがしに大げさに結果を残す、あるいは、市民と一緒にワークショップやりましょうと言うような課題を課すのも良いけど、そうじゃなくて、シンプルに言えば、その作家と友達になる。アーティストにしてみれば、その町に友達がいっぱい出来るということがレジデンスのキモであり、極意だと思ってるんですね。帰った後もまた、知り合いがいる場所ってとても来やすくなるはずですよ。この町を色んなことを考えたり、やろうとする人たちの拠点の一つにしていってはどうだろう？ そもそも

金沢には厚みがあるし、歴史もあるし、余力もあるところなので、間違いなく花咲くと思います。奥能登国際芸術祭みたいな機会があるならば、是非会期を合わせて、全国の学生パワーを「北川フラムさんに見せつけようぜ」みたいなことしちゃえば。

(真鍋)

それをするなら僕も協力できる。なぜかという、問屋町も街が出来て、今年で50周年なのです。どんな記念事業をやるのかというのはこれからだけれども、そこで美大と連携協定を結んでいるので、そういうことをやれる可能性はあります。周りのやる気のある色々な人や大先輩やキュレーターを巻き込んで。

ちょっと大分時間が押してしまいましたので今日はこれで。黒澤さん長い時間どうもありがとうございました。皆さんも寒い中、ありがとうございました。

<拍手>

(2017年1月11日)



対話

④ 川本 敦久

かわもと・のぶひさ

1970年金沢美術工芸大学産業美術学科工芸繊維デザイン専攻卒。現在、同大学名誉教授、金沢卯辰山工芸工房館長。



—主な参加者とその経歴—

モデレーター／真鍋淳朗

坂本 英之 (さかもと・ひでゆき)

金沢美術工芸大学環境デザイン専攻教授。問屋まちスタジオ運営協議会メンバー。

中瀬 康志 (なかせ・こうじ)

金沢美術工芸大学彫刻専攻教授。問屋まちスタジオ運営協議会メンバー。

(真鍋)

今日は、金沢卯辰山工芸工房館長の川本先生に来ていただきました。川本先生は私と同じ金沢美術工芸大学で教鞭をとられて、作家活動をやっておられる先生です。実は工芸科の先生であられたと同時に、地域企業との連携 --- 産業とアート、工芸、デザインというもののジョイント --- そうことを積極的にやって来られています。次のステージとして、今後この問屋まちスタジオをどう運営していくか、ということが課題になっていて、川本先生の今までやってこられた視点からアートに対するご意見を頂戴したいと思います。川本先生はこの問屋町には結構昔から関わっておられたと思うのですが。

(川本)

問屋町がいろんな意味で静かになって、もう少しこの町並みを綺麗にしたいということで坂本先生と一緒にしたということがありました。大学で産学連携、社会連携をたまたま私が担当していました。当時までは、大学は教育と研究が主体であれば済んでいたわけですが、大学のあり方として、地域に対していかに貢献しているかを問われてきている時期でしたね。僕は、金沢美大の出身で工芸の教育を受けたのですが、当時の工芸教育は現在のようなアート性の強い作品というのはあまりなく、デザインのなかの工芸教育だった。過去美大は工芸を切捨てています。戦後すぐに美術系の学校を作りましょうという運動が興った。戦後の荒廃した人の心を取り戻すには、美術を通して文化性を確立し、まちづくりをしようということです。終戦翌年、「金沢美術専門学校」という名称で答申が行われた。そしたらその時の許可官庁から「これなら他所の都市と一緒に」だと。金沢というまちは他の地域と違って、工芸が産業として成り立っていて受け継がれ、まちの中に根付いている。だから工芸という名称を入れるようにとの指摘を受け、その結果、「美術工芸専門学校」となり、美術科、金工科と漆工科と陶磁科で設立された。今でも金沢美術工芸大学と工芸を付けている。ところが昭和30年4年制になるときに、産業美術という波が押し寄せてきて、商業美術と工業意匠の2つからなる産業美術学科を作り、その時に工芸各科をなくしたのです。工芸の部門は、工業意匠部門の工房として、かつ選択科目として残っていたようです。でもその後工芸を復活させなければとの声が出て、昭和40年産業美術学科の中に「工芸・繊維デザイン」という名前で復活した。私はその2期生。その時の教育は、あくまでもデザインの範疇の中での工芸だったので、インテリアとクラフトのデザイン意識が色濃く、室内設計や家具設計もやったし、パッケージデザインというものもやりましたね。卒業制作を見ても、現在みたいなアート性の強い作品というのは記憶に無いぐらいで、生活工芸、インテリアデザインに関わるものがほとんどでした。私は卒業してからテキスタイルデザインの事務所に入ってカーテン、カーペット、壁装材のデザインの仕事を5年間やっていました、前任の先生が退職されたということで美大から声をかけられて戻ってきた。教育内容もデザインという認識で戻ってきたけど、美大も新しい校舎へ移り、5年間の間に随分と変わっていました。先生方の大多数は工芸美術が専門領域。デザイン領域の先生は一人だったとおもいます。したがってアート性が強くなってきていました。アートとしての工芸というと、技術力を磨くとともに、表現に力点が置かれていたし、それにデザイン意識というのを加えて教育せねばということもあったので、アート表現を一からやり直しました。それゆえに何年か経てから日本

現代工芸美術展や日展と関わりを持つようになりました。年月が経ちどこからともなく「美大は地域貢献が弱い」という話題が出始めました。地域連携的なことは、時の美術工芸研究所長だった中川氏がアートを通して町に賑わいを創出する企画をまちぐるみで行っていた。そういう観点から文化性というのを高めると同時に、デザインの視点から考えると、商品開発や流通、マーケットというものを見据えた社会貢献にかかわらないといけないと思った。

(真鍋)

産学連携という組織ができたのはいつ頃ですか？ 僕が来た頃には もうあったんじゃないですか。

(川本)

何年と言われるとちょっとわからないですが、「じゃあ今日から始めましょう」ということではなかったと思います。ぼちぼち、企業から依頼がきておりましたが、その時は依頼を受けても、受け皿が何もなかった。例えば規約とか、受けたらお金がどのくらいかかりますとか。依頼者の方も「大学だから無料でしてもらえる」と思って来る方もおられた。だから初めは遅々と進まなかったけど、大学の社会連携センターを作り、その中に地域連携と産学連携の組織が出来て動き始めました。今度は「美大にファッションを作ろう」と繊維企業関係の方々からの発想でした。石川県は合成繊維産業ではトップクラスでしたが、生機や素材としての生地でのビジネスでしたから、アジアとの価格競争力では遅れをとっていました。これに対し付加価値として石川産地で「服を作れる」というふうに持っていないとだめだろう。そのような時に金沢市がまず「ファッション産業都市宣言」をしました。他都市にすでにある「ファッション都市宣言」という言葉に「産業」をつけた。日本ファッション協会の「ファッション」という概念では、繊維や衣服のことだけでなく、「生活文化産業」全般を指していますので、「産業」をつけることによって他都市との差別化が図られました。今度はそれを起動させるにはどうすればよいのか。大学に「ファッション科を」と時の市長に言われたのですが、今日明日にできるようなものではないとみんな思っていた。しかし学部では何年もかかるが、修士のデザイン科に設置するなら可能ですと言うことで、企画書を書くことになった。私も裏付けのない状態では何も書けないから、日本ファッション協会やファッションデザイン協議会の議長とか、各所で聞き取りのリサーチを行いました。総じて「他所と同じものを作っても駄目」とみんなに言われたのですね。またその時たまたまファッションビジネスの業界が出版している本を読んでいたら、今のファッション教育に何が一番欠落しているかというのが理解できた。現状では新人はほとんど使いものにならない、教育機関で仕事ができる人間を育てることが必要じゃないかと書いてあった、なるほどと思った。専門学校を色々見に行くと、確かに服を作る基礎技術の習得、個人の個性を引っ張り出す教育はしている。しかし実際にコスト計算もできて、商品として出せるパターンの作成や指示書、縫製技術を徹底的に教えるシステムが見えなかった。それでは金沢美大にはそれを作ろう。それは地元ファッション業界の方たちの要望にも合うであろうと考えた。企画書を書き上げたのは7月初旬。その後主任教授を誰にするのかという話になり、2002年に神戸ファッション美術館で開催されていた永澤陽一展の記憶が蘇った。展覧会ではアート作品も展示され、実業

として無印良品のデザインビジネスを成功させており、その活動が高く評価されていた。永澤氏しかいないと思った。業界の客観意見も欲しかったので、ファッションコースの客員教授をお願いしていた、IFIビジネススクール学長の尾原蓉子先生に相談し了承をいただいた。しかし永澤陽一氏は「現在の学校でやっている教育には付き合っていられん」とおっしゃっていたらしい、だけど、本人を差し置いて事務所の社長が内諾を出していたようで(笑)。学長ともども正式に頼みに行った時は「僕は何も知らんで」「半信半疑でまだわからん」との出だしでしたが、永澤氏から「そういう認識でやるなら、僕はOK、手伝う」と。それでようやく市長に報告が出来て設置に向け動き出した。まさに21世紀美術館開館の数日あとだった。これはある意味では社会連携の一つの形とも思っている。大学での社会連携は、どの科に限らず必要なことで、学生は社会に出てからのマネージメントや多様な事への対応力をつけていく事が必要。仕事に対する報酬とか、他者とのコミュニケーションや自分をマネージメントすることをどこかで体験することによって、社会に出て行った時に自然とつながって行きやすい。社会連携やコラボレーションをやると自分の発想と違う他者の発想や、要望・条件をつけられることで多角的に考えて発展していくことがある、もちろん作品を制作し、研究して、いいものを作れるように技術や感性を磨くというのも基本的にとても大切なことだけど、それは当たり前のことで、実際にそれを活かし、その結果から学ぶ実体験が必要だと考えている。

(真鍋)

僕の知っている川本先生は、日展という最もアカデミックなところで発表されていますよね。なのになぜ産学連携ということをやっておられたのかなと思っていました。でも歴史を知って、再確認できました。僕の所属である美術の方も、マネージメントについては話が全く一緒に、生きていくためには物は売れていかなきゃいけない。でも、例えば美大の工芸の今を見ても、かなりアート性が強くて、ますますその傾向が強くなっている。金沢卯辰山工芸工房も近年、そういう傾向が強いのかなど。その場合、どのようにマネージメントをやっているのか心配な面もあります。アート志向が一方で強くあって、もう一方で産業との関わり、これが対立構造でいいのか、それともどこか接点があるのか。そのバランスについて、どのようにお考えになっていますか。

(川本)

卯辰山工芸工房の研修者は、ほとんどが、大学の学部卒とか修士を修了していて、基礎的な技術はマスターしている、入所後彼らは日々の修練を欠かしません。それとともに金沢の歴史を背景にしています。卯辰山工芸工房のルーツは、金沢城内に設置された御細工所です。始まりは今から約400年前、その後培われてきた伝統の中に、金沢が持つ工芸に対する認識というのが明確にある。それが卯辰山工芸工房の中にも生きてる、生かしているところがある。もともと御細工所というのは、武具の保守管理をしていた。主に鎧兜や、刀、鎧(あぶみ)であったが、世の中が平和になり、培われた技術を活かして、城内で藩主が使う物、城内の装飾、幕府への献上品や、進物とか、そのような工芸品を作ることになる。藩主が細工者に言っていたことは、「当代随一のものを作らないと駄目」。時間をかけ1〜2年に一点できればよしという品もあった。藩主の意識は

常に美術工芸で、生活工芸品であっても、嗜好を凝らし、優秀な技術で、意匠も素晴らしく鑑賞に耐えられる「美術品」というものを目指した。それは桃山芸術の継承でもあった。だから職人は、自分で創作をしてはならず、藩主の求めに応じ制作して、工芸品の出来を判断するのは藩主であった。そのために江戸や京都から優秀な職人を招聘し、細工者に指導させた。また藩主自らも招聘した文化人から学んだ。また職人たちは兼芸として「能」を演じることを課せられていた。参勤交代の際、藩主は彼らを江戸まで同行し、細工者は本来の細工の仕事とともに、御前で能を演じる役目を果たしていた。細工者たちには大変だったけど、能を演じることによって文化性を養えた。日本の伝統、所作をきちんと体験的に受け継ぐ、それによりモノづくりをするための表現や美意識が高められた。しかし高い技術の職人が現れると交代させられた。そんな非常に厳しい状態で、江戸の末期には100人強在籍していた。明治になって、御細工所は廃絶されたが、職人たちには、御細工所の美術工芸の伝統が色濃く受け継がれていく。卯辰山工芸工房でもそれらを踏まえており、現代の社会に対応する芸家が育つ環境を作っている。研修者には茶道は在籍中義務付けし、華道と書道は一方または双方選択してもらい、工房茶会では全員でお道具を制作しおもてなしをする研修事業をおこなっている。また個々にはコンペや公募展に出品し、ギャラリーや商業施設で個展やグループ展を頻繁に行っている。工房としては5年前から「アートフェア東京」への出展。それから今年から「インテリアライフスタイル展」にも出展。また「銀座の金沢」への出展とほとんどの研修者は、自分の技と美意識でアート性の強い作品を制作すると同時に、生活に関わる作品を制作している。中には美術作品のみに没頭している者も何人かいるし、逆にデザイン思考の制作を目指す者もいます。それでも事業に参加し、周りからの影響も受けて、修了の時期には対応力の幅が身につけてきている。工房の中で個性の強い人間が集まって仕事をする時期を過ごす、そういう機会と場をつくれているのがいい。それともう一つ、5工房あること。各工房で扱う素材が違うと性格や考え方も違ってくる。やはり漆の人は粘り強く仕事しているし、私の場合やったらテキスタイルはこんな感じだから(笑)。そういうところで集まって仕事を一緒にし、会話を通じてお互いに影響しあい、いろんなことを吸収できるようになる。そういう場が自然と出来ていっている。今度21世紀美術館で工芸トリエンナーレがあります。卯辰山工芸工房も出展していますが、設立初期から時代を追って現代まで展示し、それを俯瞰的に見ていると、なんとなくわかるというか。ものすごく用途を重視する作品でも作者の美意識に溢れているし、それに対しアート性の強い個性的な表現を突き詰めている作品がある。この混在性が伝統の線上にある現代でないのかとおもう。

(真鍋)

あと、日本全国からそういう人が金沢卯辰山工芸工房に来てくれますよね。修了した後、金沢に定着している人は何割ぐらいいるのですか。

(川本)

40%くらい。結構多いよ。

(真鍋)

美大は40%も残らないですよ。

(川本)

工房を作る時に、方策が立てられた。金沢市が投資して他県等から来る人材を育てる<その人達がみんな帰ってしまったらなんの意味もないと>当時その様な意見も出ていた。修了しても、その人たちが制作できる場所を作りたい、レンタル工房ですね。現在の牧山ガラス工房とおがはら工房がそれ。特にガラス工房は、稼働率が高く、地元在住者も当然利用していますが、県外に出た人も利用をしに帰ってきている。加えて作品を売る場所を作らないとダメでないか。出来た当時は市内に2箇所ぐらいあったかと思います。それが現在は地域の工芸や若手作家の受け皿ともなって、金沢のクラフト広坂と、東京の「銀座の金沢」として発展してきた。やはりそういう政策は必要だったと思う。金沢市も工芸をまちづくりのキーワードの一つに考えてくれている。21世紀美術館が出来たおかげでギャラリーが市内に集まり、工芸作品を扱うギャラリーが以前からみると圧倒的に増えた。そうすると、今まで東京がマーケットだったのに、金沢もマーケットになるのではないか。それなら金沢で制作活動をしていても、生活出来るようになってくる。そういう環境が整ってきたのではないかな。美大卒のデザイン系の人も結構帰って来ているし、新規に入ってくる人もでてきています。そういう意味では、金沢のまちがずいぶんと変わってきたと思う。もちろん首都圏からの集客で新幹線効果はあるけれど、新幹線が開通して、旅行者に受け入れられる素地が整ってきたという気がする。

(真鍋)

今、工芸的な話が中心になっていますけれど、私の立場はアートなので、これがなかなか難しい…。このスタジオに関して言うと、例えば、ニューヨークのソーホーのように、アートを発信する場所というのは、かつて工場であったような使わなくなった所にアーティストが入り込んで行って、そこにギャラリーができて、ファッション関係も集まって町を元気にしていく。そういうことの繰り返しで世界中で起こっていることを僕も知っていたし、そんなことを日本で出来ればいいなと思っていたところに「こういう場所がある」ということで関わらせてもらっています。で、当然工芸が盛んでデザインも活発ですから、日本全国から人が集まって来るいい状況ではありますが、アートとなると、要するに自分で好きなことを勝手に作っているわけですから、社会性を持たないのは当然で、そこがなかなか難しくて。

(川本)

美大が問屋町でアート活動していて、「ここでやる意味は一体なんなの？」って思う。現状は「ただここに展示しました」で終わっている。もちろん展覧会をやること自体は一つの文化性のある事だし、町に文化的雰囲気醸しだせるかもしれない、だけどそれは机上で考える結果予想でないのか？要はこの様にしようしたいという政策と計画と実行力が必要でないかなと。この資料に「組合間の異業種交流」とか「青年部会による若手の交流」とか、いろんなことが書いてある。それから「まちづくり」「ビジネスマッチング活性化の取り組み」「情報発信」「経営者・社員向けなどの研修の実施」とか、いろんなことが組合事業として書かれている。そこから推測すると、問屋町として美大がここに来てくれることで何か望んでいることがあるのかどうかという話。問屋町の理事長が「好きなことしてくれたらいい」と仰っているけれど、やはり「この地域の活

性化のために何かしてくれる」ということがあると思う。アートには、広がりはあるんだけど、元は「個」だから、どのように社会性を持たせるかですね。

(真鍋)

自由を求めるしね。

(川本)

そう。なかなかその地域の人たちを巻き込むには困難がともなう。だけど、新潟県十日町市の越後妻有トリエンナーレ。当初はなかなか理解が得られにくくて、苦戦していたようですが、回を追うごとに地域と結びついて制作する作品も企画され、見学者も増加し、町に人が宿泊するようになったり、交流が増え、学校の教育の中でも接点が出てきたり、一つのまちの活性化として結果を出している。単に作品が展示してあるだけだったらあんなことにはならない。アートで人々を巻き込もうとするエネルギーが、年を経るごとにあったという気がする。「アートでまちづくりを」というきちっとした目標が僕は絶対必要だと思うし、そういう事業をやるべきだと思う。

(質問者)

今読んでおられるその資料って、なんですか？

(川本)

問屋町のウェブサイト、それと業界誌の30周年の記念誌。その中には30年を振り返っての話と、それから次の50周年に向かってのことが書いてある。まだその中には当然美大の話は出てこないけれども。今度50周年の記念誌に、ここで今やっている事業が載るか載らないかで、この価値は決まると思う。

(真鍋)

その50周年の事業の実行委員長がこの活動に関わっていて、応援していただいています。しかし具体的に何をやるのかが見えてこなくて。今回のこの展覧会も次の50年に関わるきっかけにしたいと思っています。僕らもアートという立場から何かができると思うし、本来個人的な表現とか言っていますけれども、時代を遡ればアートは「個」の問題ではないわけです。ルネサンスの頃に戻れるわけではないのですから、現代の石川県金沢市において何をやるかといったローカルなところから次の新たなことが生まれてくると僕は思っています。今回はその方法論を探っていく展覧会にしたいし、そういう場を目指しています。

(川本)

そのへんも、これは特に人が関わってくるといような展示だから、その話題を広げていく、ただどこに書かれていたのは工芸家や美術家で、地域の人のことがあんまり書いてなかったね。地域の人を何か巻き込むようなことをやったほうがいいのかなど。ここの地域をビジネスパートナーと考えて、何か一つでも成功事例を作らんと絶対ダメだと思う。美大が本当にここを育てるつもりなら拠点を作って、アートセンターとか、デザインセンターとか備え、卒業生や現役生に仕事をしてもらう。そうすると、きっと地域での仕事の価値観が出てくる。まちと連関してくるし。問屋町の企業それぞれは独立しているけども、うまくつなげる役割が出てくると、この団地にいる意味

がすごく出てくる。今はマスターベーションしているようなところがあるように見えるわけ。せっかく問屋センターのご厚意でここが存在してるいるのだから、お返しをしないとね。

(真鍋)

そう、今はお返しができていない。それでは、途中退席予定の坂本先生からひと言。

(坂本)

今日はいろんな川本流の切り口の話が聞けて、本当良かったと思います。ありがとうございます。いろいろビジネスのアイデアをいただきましたが、確かに今日この会に問屋町の人が一人もいない。案内も当然送っているし、この会を通じて(五井建築設計の)西川さんが来てくれたり、問屋センターの事務局長、協議会の関係者が何人かは来てくれてるんだけど、やはり関心が、どうしても。その根本は、今言われたように、ここは特にビジネスの街だし、これをやって何の儲けが…というところですよ。先ほど言われたように、問屋町とどう関わるんだという話の中で、「工業製品を工芸家が活用したらこうなります」みたいなこともできるのかな、という話し合いはしてるんですね。ただ言われてみれば、もっとやはり積極的に、本当に問屋町の資源を使うやり方もありそうだなと。

(川本)

その資源を活用することでは現在美大が利用してるだけ。そのプロジェクトの初めから地域の人たちに入ってもらべきやと思う。一緒にやって、「あっそんなものがアートの表現に使えるのか」ということから、自分たちの仕事、資源をもう一回見直すということにもつながっていく。

(真鍋)

材料や技術の提供は、はじめからずっとやってもらっているわけです。その先、例えば販売促進につながって、新しいマーケットができる、そこまではなかなかいかないですね。そこまで入り込んで来てもらえないし、こちらがそんなことに応えられる状況でもない。組織化、事業化しようとか、そういうことまでは片手間でできなくて。やらなくてはというのは、僕も思っています。

(坂本)

今回の企画で言うと、アーティストが例えば「ここにじり口の扉をつけよう」というときに、問屋町の素材を材料にして…。

(川本)

作家にはインスピレーションはあるけれど、企業の人が出てきて「じゃあ、こういう材料もあるよ」「それをやるならこっちの方がいいんじゃない」ということがあってもいい。そうすると、作家からしてみても、「そんな良もんがあるのだったら」とインスパイアされる。そういうことがないと、こちらが思っていることだけを実現しようとすると、他のアイデアはなかなか入ってこない。特に企業の人たちから見ればアートの仕事やったら「とりあえず任せるわ」という話に当然なるよね。そこをもう一つ踏み込んでもらう、そうすれば、地域の人がそこへ参加する喜びとか、出てよかったなどかいうことになると思うんです。

(坂本)

その方向がまず一つ、見えたかなと今思いますね。ぜひやってみたいと思います。

(真鍋)

では、ファッション関係の方々がいらっしやっていますので、何か。

(参加者 1)

私、問屋まちスタジオ初めて来たんですけども、これまでは自分たちの入る余地があるとはあまり思ったことがなくて、先生方が活動、運営する場所なんだと言う認識しかなかったんですね。で、ここでの地域との取り組みの話とか、川本先生の歴史の始まりや根底にあるものとか何うと、一緒に大きくかき混ぜるといふか、ブームを作っていくといふか、そう言うことができるのかなということを感じて、ワクワクしながら聞いていました。ある問屋町企業の営業の方を真鍋先生が紹介してくれて、今も交流があるんですけど、彼からスタジオの話を書くときも、「使わない資材を提供して学生たちに使ってもらおうということをして」と、そのぐらいの関わりしか見えてきてなくて。それだと企業にとっても、「学生たちが在庫のいらないものを使って、うまく利用して作品作ってくれればいいや」ぐらいで、みんなでやっていくということにはならないと思うんですね。やはり企画から、「おたく何がきんの」「うちはこういう技がある」「じゃあ一緒にやってみようか」と、大きくかき混ぜて風を起こすような、そういうことをやっていくと問屋町自体も活性化するのはかなと感じました。

(参加者 2)

今日はありがとうございます。本当、先生のお話すべてに尽きるなと思っていて。「マスターベーション」という言葉を私もよく使ってますね。自分たちの思いややることに満足して、そこで満足してしまっ、その先はどうなるのかということはどうしても見落としがちになる。もう一つ、「ビジネス」という言葉。今の工芸の傾向とか、アート、もちろんファッションについても、トータルで考えていることが、先生の話の随所に散りばめられていて、すごく美大のウィークポイントを突かれているなと思いました。で、その「ビジネス」という言葉とか、「マスターベーション」というのは、私たちが一番、今考えて行動に移していかなきゃいけないことだなと。そこで川本先生がおっしゃった、「問屋町の方たちの思いに耳を傾けていますか」ということかなと。ここの土台が問屋町にあるならば、その問屋町が今何を考え、何にうまくいってなくて、どうしたいのかというところに、まず耳を傾けて、その中で美大とコラボして何ができるのか。学校としてじゃなくて、問屋町の方たちが何かしら社会に、自分たちの経営に形となってきて、美大ともコラボできるということが、もしかして一番求められていることなんじゃないかなと思っています。

(川本)

連携協定を結んでいるときに私が思ったのは、問屋センター自体、この地域をどの様にすればいいのか、迷っておられる。したがって夢や希望を聞いてもなかなか出てこない。逆にこっち側から「こうしたらこんな夢かないますよ、どう?」と問いかける必要があって、待っていても多分なかなか難しい。

(真鍋)

そう、聞いたんですよ。戦略委員会の時にね。「ここ空いてるなら、こういうスペースを作ってはどうですか」とこっちから言いました。そしたら無償で提供してもらえて、ランニングコストは大学が出してくれる。そう言う形まで持ってきました。そして4年5年とやってきて次のステージへとこの話をしているのですが、待っていたところで難しいです。

(参加者2)

今ファッション業界もまさにその渦中で、みんな負のスパイラルでうまくいってないの、その中でどうにかしていこうよという思いはあっても、そこから解決策は生まれてこないですね。でも何かを発想している人たちは必ずいるので、そういう人たちの成功例を、根気よく伝えていくこと。特に縫製工場の話で言うと、具体的に「こんなことをして、こんな形になってますよ」というのを、うまく言える人が話をします。その人たちは最初からうまくいったわけではなく、必ず抱えていた問題と、また新たな問題をすくくオープンに提示してくれたりということもあった。お互いに膝を交えて、情報交換ができるような形があるかもしれない。

(参加者3)

お話を伺うと、あまりにも範囲が広いことで、何を考えたらいいのかということがだんだんわからなくなってきた(笑)。このスペースが 問屋町としてあって、ここで連携していくということなのか、アートの発信なのか、融合なのか、そこから次のビジネス展開なのか、どれから手をつけていけばいいのか。僕は美大出てないですが、やっぱり美術大学であれば、美術に対して純粋なところ、無垢なところを、どこかしっかり持ってほしいという気持ちはあります。産学連携は一般大学もやりますけれど、学問がだんだん学問でなくなって、学問の尊さがなくなっていく。一般の人からしたら、美術には、尊いものも求めるんですよ。そここのところと分けて考えるのかということも少し整理していかないと。一般の方が聞いた時に、自分がどうしたらいいかわからないというところにちょっと陥るかなと。今の時代、材料提供していただくのであれば、メール発信で日本中から何でも届く。いらぬもので物作って、それをどこで発表するかと言うのはまた別の問題。現実の場所をどうするかということになったときには、この茶室を見ても思ったんですけども、やはり具体的な物を一緒に作るというところから。一緒に作ったときに何が生まれるかと思ったら、そのお互いのスキルとか、考え方の違いとか、そこで感じるものが、次の別の仕事に生きるのか、その材料を別のことに活かすときに一緒にやろうというふうに活きるのか。そこまではすぐにことは起こりませんが、それが1年後、2年後、10年後の別の形で結実するとか、という少し長いスパンが、自分としてはほしいかなという気はしますね。今そ

ういう長いスパンのものは全部否定されていて、すぐ結果出るようにということ求められて。この間新聞に「工芸を磨いていかないと」と言う記事が出ていました。その通りなんです。磨いていかないと、もう一体何が何で工芸なのか分からなくなってくるというところにもう完全に入ってくると思います。自分は工芸だと思ってるけど、人からみたら工芸なのか。「工芸って何なのか」ということを何も問わなくて、みんな手をあげて「工芸」と言ったら工芸になる。それでいつまで持つんだということを、ここで踏みとどまって考えないと、今は人がきますけど、じきに「金沢に本当に工芸があるの?」ということ、誰かが言い出した時、一遍に火がつくのではないのかなということも気にしています。

(中瀬)

僕はここに住んで学生との展示企画や管理人みたいなことをしています。分野としては真鍋先生と同じくコンテンポラリーアート。それから、先ほど話題に出ました地域や自然空間をフィールドとしたアートプロジェクトなんかをやっています。それで皆さんからの発言や今までのスタジオ運営の経緯から、向かうべき方向性も見えて来ていますので、今日私の方から話すことはあまり無いのですが、当初の運営方針の中でコンテンポラリーアートに意識的に特化してきた経緯があることや、大学内では我々3人でやっているプロジェクトと見られているような状況があるので、そのあたりの新たな対応は必要かと思っています。先程言いました「非常に純粋なアートを発信していく」ということ、それから「自立して自分たちもお金を稼ぐ」という方法を見つけないと。ですから地域の会社とのコラボを含め、運営の為に新たな活路を見出していくというのは、我々の中でも明確に共通認識としてあるので、できるだけ具体的にどう動くかという部分を明確にしていくということが重要だと。つまり2つの路線を擦り合わせよく考えて活動していくということ、ファッションも含めていろんな先生方も出来る限り関わって頂きアイデアを出して力を貸して頂きたいということ。今の我々3人では難しいな、という感じはしていますね。私も今まで以上に研究室の学生を連れてきたり企画したり人材も育てていかなきゃいけない。一人一人が難しければ大学全体としての組織づくりも必要だと感じています。

(真鍋)

それでは以上で予定の時間になりました。みなさんから貴重なご意見をいただき、本当にこの対話は無限の広がりを持っていくと思いますので、この時間をみなさんと共有したことを次につなげて、見える形でぜひやっていきたいと思えます。待ちじゃなくて、攻めていきましょう。

(2017年1月12日)

対話

⑤ 眞壁陸二



まかべ・りくじ

1971年多摩美術大学卒業。瀬戸内国際芸術祭、奥能登国際芸術祭に参加。



モデレーター／真鍋淳朗

※文章中、「*1」などの表記は画像を表します。p44を参照してください。

（眞壁）

連続トークの最終回にお招きに預かりました、絵を描きながら作品に応じて色々変えていくという手法をとっている作家の眞壁と申します。よろしく願います。なぜ、僕が今回ここでお話することになったか。瀬戸内国際芸術祭3回目の展覧会に2回目として参加した際、昨年のゴールデンウィーク前後、一ヶ月間ぐらいこの問屋まちスタジオをお借りして、アトリエとして使わせて頂きました。

第1回は2010年、男木島というところで制作した、《Wallalley》と言う作品で、「ウォール」は壁、「アレイ」と言うのは路地という意味です。路地に壁画が沢山あるというプロジェクトをやりました。1回目は1回目で色々問題があって、面白いことも大変だったことも沢山ありました。結果的にはそこそこ成功して、普段美術に興味もない人たちに非常に関心を持って頂けた展覧会だったんじゃないのかなと思います。こういう人を集める話題性の高い展覧会に参加することによって、自分のことを少しでも色々な人に知ってもらいたいという思いが非常に強くあります。

眞壁の作品

今回、僕が使わせて頂けることになった家の候補は3つ4つありまして、調査のときに全部見せてもらったんですけども、「ここが良いかな」とひらめきました(*1)。プレートがついていて、何かかなと思って見たら、「咸臨丸乗組員生家」。咸臨丸という船、ご存知ですか？ 勝海舟が船長を努めた船で、日本で初めてアメリカに渡った船なんですよ。福沢諭吉や通訳でジョン万次郎が乗っていたり。明治維新以降、政府の要職につくような人達が何人も乗っているような船で、それを操縦するのに非常に優秀な造船技術や知識が必要ですよね。生業が海賊だったり漁師だったりする島の人がスカウトされて、福沢諭吉含め100人ぐらいしか乗っていないところに、この島から10人ぐらい乗り込んだ。島の人にとって見れば、「大昔大スターがいたんだ」ということですよ。昭和の時代に見れば、アポロ計画で月に乗ったみたいなの、「この家が月に行ったんだぜ」ぐらいの感じ。

そういったバックグラウンドがある家を使うということが決まったんですが、見ての通りポロポロ。咸臨丸がサンフランシスコに向けて出港したのが1860年なので、少なく見積もってもそのぐらいの頃から建ってる家なんですね。築年数が半端なく、至る所が傷んでたんです。ペラペラのベニヤが貼られていたんだけど、5分ぐらいで剥がすことができるぐらい。厚みが痩せて2、3mmぐらいしかなかった。

男木島での作品が全て壁画、屋外作品だったので、北川フラムさんからオファーがあったときに、「何か違うことを提案してくれ」と言われたし、僕もそう思ったので、「本島の作品は中だけ」という話だったんですが、あまりにもコンディションがヒドイ家だったので、困ったなとしばらく頭を抱えていたんですね。最初の出会いが、2015年の10月。完成したのが翌年10月なんで、一年かかってる。

僕は画家なので、建築的な知識が全く無い。こういう作品を作るにあたって、マケット、模型を簡単に工作で作り、中にカメラを入れて完成予想図を想像するわけです。また、ドローイングも何百枚も書きます。一番苦労したのが光の取り込み方でした。建物の中で、どっちから光を入れるべきかと。通常、美術館やギャラリーのようなホワイトキューブで展示するときには、あまり気にしませんよね。部屋がいくつかあるけどそこをどう使うとかか、本当に考えることが多すぎて。絵だったら真

正面から見える一面だけを考えればいいんだけども、家になった瞬間に中と外が出てくるし、間仕切りを作ったら、その内側と面が増えて、キャンパスで2000号を遥かに超える大きさになっちゃうと思うんですね。

12月の暮れから3月いっぱいまでは湯涌創作の森にいました。何をやってたかというと、ドローイングを100枚ほど描きマケット模型を作り、構想を練っていました。そして既に発表したストックの作品で使えるような部材を全部一旦バラバラにしてサイズ調整し、再利用するために板の状態に戻し新しい作品の構想と準備をしていました。

先ほど言ったように外壁のことは最初計画してなかったんだけども、4月に小屋の外板を剥がしたら土壁が出てきました。それが水の跳ね返りとかで砂のようになっちゃってて、指で触ったら全部ズボズボで、中の木舞まであっという間に露出しちゃう状態だったので、「何か考えなきゃ」ということになったんですね。予算的には同じように板を貼って誤魔化すかと思ったんだけど、板にさんざん絵を描いている人間がただ貼るというのも変で、「リフォームになっちゃったら違うな」とも思ったんですね。

それから1ヶ月弱、外壁作品はここ、問屋まちスタジオですべて作りました。外壁なので、防腐処理や防水処理しないといけないくて、防腐剤が非常に臭くて、中瀬先生すみませんでした(笑)。こんなことをやっていたのが5月の終わりです。

完全に外壁を剥がして埋めてから一ヶ月来ないから、その間むき出しになったらまずいので、その辺にあった板で雨対策していました。で、100年分の大掃除が徹底的に始まるわけです。たぶん当時は炭で料理をしたり暖をとってるので、天井がもう炭だらけ、ホコリまみれです。畳を抜いたら、砂が積層されてる状況。これを何日もかけて掃除するんです。ピッカピカになるまでやりました。

眞壁の作品

（真鍋）

この家はまだ個人の所有なのですか？

眞壁の作品

（眞壁）

そうです。近所に住んでる酒屋のお父ちゃんがいるんですが、その方の家として。15年ぐらい前までは親戚か誰かが住んでいた気配はありました。

さらに問屋町の後に、富山の建築会社のスタジオをまた1ヶ月ぐらい使わせてもらって、組み立ての為の施工をやらせてもらいました。非常に精度を高く作ることが出来るので、助かりました。僕は、何度も言ってますけど画家なので、家を作ることが出来ないわけで、助け舟を各方面に求めていきました。こういう芸術祭というのは、ある程度大掛かりな作品を作るので、自分の中で成長していかなきゃいけないポイントかなと思います。一人では出来ないですね。

現地に行くと、ボランティアスタッフの方がたくさん集まってきてくれます。瀬戸内の場合は「こえび隊」ですね。芸術祭実行委員会が事前にボランティアを募り、定期的にミーティングを重ねて、作家から「こういうことを手伝ってほしい」というリクエストをホームページで発信すると、「何月何日、この島でこの作家のお手伝い、何名募集」といったことが発表されます。大体、1、2日の間に、やりたい人が応募して集まってくれます。ただ、「誰々来てね」と言うリクエストが出来ないので、全くインパクトドライバーも握ったこと無いような人がやって来ることもあります。一方で非常に慣れたボラ

ンティアがやって来てくれるわけです。

眞鍋の作品

（真鍋）
　　そういう外から来た人たちの、宿泊や食事はどうなっているのですか？

眞壁の作品

（眞壁）
　　県外者に関しては、高松の港から歩いて10分ぐらいのところにこえび寮があります。お寺が宿舎です。住職がお堂みたいな所をスペースとして提供していました。寮長みたいな人が居て、無料で宿泊できるそうです。でも近郊の高松や丸亀、岡山の人。高松まで1時間ぐらいの人たちは、宿舎を使わないです。

　　出発前、朝7時に高松の港に集まって、毎日ミーティングをやるそうです。それで、それぞれの島に散り散り飛んでいく。登録者数は2000人ぐらいなんですけども、頻繁に手伝ってるのは200人ぐらいらしいですね。そういった存在が芸術祭を手伝ってくれている。本当に無償で、弁当まで自分で持ってくる。船代だけ出るんですって。それを聞いておごいなと思って、なんか嫌だったんですね、ボランティア。今回はそんなこと言っていられなかったんですけども。

　　芸術祭には120億円くらい経済効果があったと、香川県が発表しています。にも関わらず作家に対する予算、フィーははっきり言ってゼロです。制作費に関する予算というのものしか出てないし、ボランティアは2000人の中から来てもらってるわけで。そこが日本全体の美術に対しての問題点かなと思っています。「その金どこに行ってるんだ」と。実際2万人のお客さんが300円の入場料で600万円、入ってるんだけども、僕には来ない。愚痴でしたすみません。

　　鑑賞パスポートを持っている人は、半分もいないですね。なぜかというと、パスポートは 5,000 円。地中美術館やベネッセハウスのある直島を全部見たら 6000 円以上掛かります。でもすでに、直島行ったことのある人にとってみれば、芸術祭期間中に「また地中美術館行こうか」と思わない。旅行者は行ける時間が限られているので それぞれの島に1日～半日と考えると 7 島中 4 島ほど行ければいい方じゃないですかね。となるとエリアが広すぎてパスポートで元取れるかということなかなか難しい。

　　なんの話でしたっけ(笑)。去年の瀬戸内国際芸術祭で、僕が作った本島の《咸臨の家》というタイトルの作品をどういうふうに作っていったかという話で…ちょっとの予算で結構デカイものを作らないといけないので、あの手この手で人を集めてやってきましたという話です。

　　途中で「こういうのが良いんじゃないかな」と思って実際やってみて、「やはり違う」ということもある。これはおそらく僕が画家だからやれることで、建築の方では絶対許されないんじゃないのかな。最初の時点で、しっかり計画を立てとけよということだと思うんだけども。周りの自然環境や、バックグラウンドのとり方、光の入り方、そういう諸々の周囲の環境によって、これがベストではないという判断を、途中で何度もやって変えたんですね。

　　これ(*2)が6月中旬ぐらいの段階。外観は元々やるつもりがなく、土壁が崩れない対策程度にしか思っていませんでした。時間的にも、能力的にも、予算的にも、これが当時限界だった。一旦良しとしたのですが、上と下と分離してるような気がして気に食わなかった。ちょうどその頃、北川フラムさんが中間視察にやってきて、「四角いタブローに書いたみたいなの

ものが下にあるだけだちょっとなあ」と言われて、「やっぱり僕自身が薄々感じていたなんか上手くいってない感、伝わっちゃったな」と思って、変えていきました。

　　今回の主な見どころは、室内を壁画で埋め尽くし、非常に狭い12センチのスリットを南西の壁の方角にだけ、光の入ってくるように開けて、そこから光が差し込んで来るという状況です。そこで次は「床どうしようか」となりまして。床を鏡にして写り込ませるというアイデアが最初あったんですが、「ちょっとかたいかな」「既視感があるかな」と思って「水盤にしたらどうか」と。最初、1月ぐらいのドローイングの段階でそういう案があったんだけど、自分には実現できないだろうと思って伏せていました。その富山の建築家が「水盤やろうよ」と後押ししてくれてやることになりました。

　　畳を厚み分だけ抜いた板に防水加工するために、FRPガラスシートで防水処理をして、プールを作っただけなんですけども。そこに水を張っていく作業を手伝ってもらっていました。8月頃には作品内部は8割ぐらい出来上がっていたんですが、玄関からのアプローチ4メートルぐらいが荒れ果てた庭だったんですね。お客さんはそこも通過して中に入ってくるので、そこもなんとかしたいと思いました。結果的には耕して、芝生を植えていくことになりました。植木屋と、ゴマより小さい種を撒いて、水をやると、発芽してくれるんですね。気温30度を遥かに超えてる猛暑の中、土をひっくり返して、ホームセンターで買ってきた肥料やたい肥を撒いて、最後に種。一週間ぐらいでもう芽が出てくるんですよ。感動しますよねこれ、本当。環境的に厳しくて、「水さえたっぷりあげれば、大丈夫だ」と言われてたんですが、半信半疑でしたね。

　　僕は画家なので、絵を描いてそれを白いギャラリーなり美術館に飾っていれば良かったんですが、「どういう光でその作品を見せるか」「そこに入ってくるまでにお客さんが何を見るか」ということまで考えます。そこにも歴史、時間の流れがあるので、徹底的にあらゆるところをリサーチします。

眞壁の作品

（参加者1）

それは主に歴史ですか？

眞壁の作品

（眞壁）
　　歴史も一つですが、島に1日2日寝泊まりすれば、朝が来て、昼が来て、夕方から夜になるでしょ。天気が変わっていくとか、一年単位で季節が変わっていく、そういう長期的なことを想像することをも含めてリサーチします。何がそこから見えるのか。夕日がとても綺麗とか、風が強いとか、そういった土地柄的な要素を含めて調査します。それは徹底してますね。

眞壁の作品

（参加者1）

それは今回の展示だから？それともいつも、そういうことをされているんですか。

眞壁の作品

（眞壁）

　　こういう芸術祭に関わり始めてからは、徹底的にそうしてますね。それ以前は、自分の内側から出てくる感情であったりとか、個人的なものをこねくり出して捏造しようとか思ってたなかった。こういう芸術祭には、そういう作家もいますけれども、僕の今の考えではその土地からいかに吸い上げるかということの方がウェイトが非常に高いんですよ。

　　これだけ特殊な条件が重なってくれば、その特殊性を重視

するだけで7割8割やるのが見えてきて、そこに残りの2、3割、自分の中の表現を乗っけてあげるだけなんです。でもその7、8割を無視して、自分のやりたいことだけを「俺はこういうアーティストなんだ」という姿勢で、アトリエで作り込んだ作品を輸送して、ボンと置いて帰ってくる作家もかつてはいて、「圧倒的に面白くない」と僕は思っていました。

第1回目の越後妻有アートトリエンナーレの時はひどくて、「成金の社長が大金をかまけて、どっかの彫刻作品を買ってきたのかな」みたいなものが置いてあるんですよ。「これは芸術祭の作品じゃないよね」とスタッフに聞いたら「これ第1回目の時の作品なんです」って申し訳なきように言っていて。「我々も成長していったんです」ということを彼は話してくれた。僕は参加してないですが、1回目、2回目、3回目とかなりグレードアップしたと思っています。後に「サイトスペシフィック」というキーワードが見えてきて、その場所に合ったもの、応じたものの作品じゃないと、面白くないということが分かってきた。失敗を経験しながら、徐々に良くなって、そういうものが結果に残っているんじゃないかなと思います。

どうしてもお客さんを集めるために超有名作家の招聘もあります。でも、なかなかうまくいかない。ああいった島に連れてこられて、築百何十年も経った家に作品を展示しろと言われてたら、どうしてもその素材を利用しようと、まともなアーティストだったら、思うと思うんですよ。それは非常に積極的な参加だと思うんですけど、自分の内面の個性的な作品を持って行っても失敗の原因になる一方で、そこにあるものだけを使って、廃品回収みたいな作品を島の人と共同で作っていくということでやると、何百事例も見たことがある作品になりがちなんです。それは仲間内ではみんな分かっていることなんだけれども、初めて参加する若いアーティストは、やはりそこに引っかかるし、海外の超有名アーティストであっても、同じようなことをやりがちです。

越後妻有にはもう何百という作品があるけれども、その中で名作として見ていってほしいものは、おそらく15箇所ぐらいしかないと思います。そういう情報がわからないと、端から見ていっても、全然たどり着けないわけですよ、数がたくさんありすぎて。瀬戸内も同じで、本当に面白い作品を見て欲しいけれども、行きやすい島から行っちゃって、時間切れになりがちです。

それが地方でやる芸術祭の問題であり面白点かと思えます。そういうものは百も承知で関わってるので、「何をすれば失敗するか」「何をすれば面白いか」というのは何となくわかります。

今回の場合一番注意しないといけなかったのは、「家一軒をまるまる使わせてもらう」ということ。身近な例としては直島の家プロジェクトがあります。始めたのは金沢21世紀美術館の館長(対話当時)の秋元雄史さんです。素晴らしい発見、発明だったんじゃないのかなと思いますね。

いくらお金があるからといって、大きな美術館を安藤忠雄さんに作ってもらって、ニューヨークやヨーロッパの著名な作品を集めたところで、それは池袋や軽井沢にあるような作品が並んでただけだったし、わざわざ瀬戸内海で島に行ってみようとは当時僕は思いませんでした。2000年頭の頃、まだ地中美術館はなくベネッセハウスミュージアムを見て、「こんなもんか」と思った。でも家プロジェクトを見て、そこにあるものを利用して、今まで見たことないようなものを作るとい

うことの斬新さにビックリしました。「いつかは自分も直島の作家になりたい」と当時、思ったんです。

巡り巡ってそういうチャンス。本島で、ついに家プロジェクト…「家プロジェクト」という名称は多分、秋元さんに著作権があるので、「古民家プロジェクト」なんて呼び方をされちゃうんだけど。誰が見ても同じようなスタイルだと思えますが。

床に水が張ってあるのもなくはないんですよ、宮島達男さんの作品も発光ダイオードが水の中にあるわけですけども、僕はあの作品は面白いと思っはいますが、水である必然性があまりないんですよ。水って映り込むわけだから、鏡としての水の特徴はもっと利用すべきだと思うので、直島の宮島さんの作品に水を使う理由がちよっと分からないです。そういう視点もありつつ、ずれながらやっていこうと苦勞して計画していきました。

これ(*3)は、実は自分が想像していなかった部分です。光の入り方に注意してはいたんですが、自分が関わっていたのが春から夏にかけての3ヶ月間ぐらいの制作の間で、その時はこういう光が入ってこなかったですね。実際、本会期が10月から11月の半ばぐらいになるのですが、秋は空気がクリアになって、日差しが夏よりも非常に鋭く、こういった見え方は夏にはなかったんです。もっと柔らかい光で、中をほんのり照らすぐらいにしか考えてなかった。

水に映ると、光が動くわけですね。猛烈に水を触ってもいいですよお客様にインフォメーションしてたんです。みんなバシャバシャ触ったら、光が動いて行って、それが作者にとって全く想像してなかったぐらいに…綺麗だなと思って。

もっと水を動かしたいんですけども、すぐ止まっちゃう。オートマ仕掛けにすれば良かったんだけども、音がするものかなと。瞑想空間のようにしたいと思った。暗くて静かで、水がキラキラしている状況を作ることによって、作品を体験して欲しかったんです。そこまで非常に上手くいったと思えます。長い人は何十分もずっといました。「はい、この作品見ました、じゃあ次」「次の島行かなきゃ」と急ぎがちになって欲しくなくて、ここでずっと、なんだったら目を閉じてもらっていてもいいなと思ってたんですよ。たまに目を開けたらちよっと違った日差しになってる、という風な感じで体験してもらいたかった。体験型の絵画はなかなか今まで聞いたことがないんですけども、ただただ画家が絵を描くという仕事ではなくて、その場所を作り、そこに光が入り込む、それをどういう素材を作っていくか、ということまでワークプロデュースしながら作っていったので、ちょっと今までとは違ってきたなという風に思っています。

模型作りに2ヶ月、下地作りにも2か月くらいかけて、そこからようやく島に行って作りこんでさらに2ヶ月。トータル6ヶ月ぐらいかけて作ったんだけど、計画通りにいかないですよ。現場でいかに対応するかということは非常に能力が問われますし、しんどいですね。島にはホームセンターもないので船に乗って丸亀まで行かないといけなくて、ネジ1個を買うのに丸半日かかるんですね。その辺にあるものを、利用する、せざるを得ないんですけど、かなり用意周到に計画をしても、そういうことが起きます。そういうのも積極的に楽しみながら作っていかないと、いいものが作れないなと思いました。

あと大事なはその地域の人達とのコミュニケーション。島の人は生まれてこの方、美術館に行ったことない人が99%なんです。ましてや絵なんて買ったこともないのに、突然、現代美術が島にやってくる。そういう人たち故に、最初は宇宙人に会ったような感じで見られるんだけど、普通に話せる人間じゃん」ってところから始まります。

一緒にお酒を飲み交わしたり、食事したりして、仲良くなっていくんです。最初は島の人が夜集まる居酒屋に彼らが「行こうよ」と言うので、恐る恐る行く。怖そうに見える人ばかり集まっていたけれども、普通に面白くて、毎夜毎夜そこに繰り出すことになって、色々な人を紹介してくれたり、その人がさらに紹介してくれたりということがありました。自分の宿泊場所だけで、ただただ自炊して閑々と夜を過ごしているだけではそういうことはなかったと思いますし、どういう場所で、どういうきっかけがあるか、それは毎回楽しんだと思っています。

島の行事として草刈りがあったとき、「眞壁さんも参加してよ」と言われて、行きました。倉庫に草刈機があるので担いで行ったら、凄い喜んでもらって。その辺りから、それまで遠巻きに見ていた人達が挨拶をしてくれるようになりましたね。男木島は、すれ違っただけで必ずみんな100%挨拶をする島で「難しい島だ」と、最初から言われていたし、そうも感じたんですが、ちょっとしたきっかけであっという間にフレンドリーな関係になりました。

一通り用意した画像は終わりました。何か他にご質問があれば。

(参加者2)

今回、家の内外で作品を作り込むということで、建築の会社が介在されていると思うんですけど、そういう場合は眞壁さんとしては自分の作品だと思いますか。

(眞壁)

コラボレーション作品と思っています。最初はそう思ってなかったんですけども、いよいよ作品が大がかりになってきて自分一人では手に負えないと、5月中旬ぐらいに思ったんですね。自分一人で全てを決めていくことが難しくなってきた、その建築会社にいちいち相談していました。工期的に予算的に技術的に。彼のOKが出ないと、やらなかったです。僕の夢だけでもってやろうと思ったこともたくさん他にもあったんですけども、実現可能なこと不可能なこと、そういう現実的なジャッジは建築家じゃないと構造計算もできないし、わからない。なので、そういった自分一人では実現できないことを、これからもっとやりたいと思っているので、去年は建築家に協力を得ましたけども、ひょっとしたらそれは音楽家かもしれないし映画監督かもしれない。そういうことを通じて、今までの自分の殻を突破していくことができるのかなと思っています。もし次回こういうことがあれば、自分の名前+建築設計の名前をタイトルとして大きくつけていこうと思っています。

(参加者3)

候補だった4軒の内から、あの家を選んだのは咸臨丸だからですか？

(眞壁)

それは関係なかったです。屋根が崩れてたりとか、あまりにも大きすぎるとか、この場所では「人が来るのが大変だろうな」とかで、消去法で。ここは港から歩いて5分ぐらいの場所だったし、築年数は古いけれども、風情として言えばなんとか作品になりそうだなという気配の予感があって、ここに最終的に決まりました。

(参加者3)

私、今瀬戸内芸術祭をほとんど見ていて、その中で、この作品は私の中でベスト3に入るぐらいのものなんです。入った時にびっくりして、それで水でバシャバシャやって。確かに皆さんとても忙しそうで、3分とか5分ぐらいでいなくなった人が多いんですけども、私は1時間ぐらいいました。また季節を変えて見に行きたいな、と思いました。

(眞壁)

会期は1か月という条件で契約書を結んで、作り始めたんですけども、終わった途端、残るか残さないか決められます。ほとんどの場合残らない。「いついつまでに撤去してください」という感じで、撤去も含めての予算で。こっちからしてみれば、撤去するのにまた行って、時間も交通費かけて、「大変だなあ」と思ってたんです。

幸いなことに、残ることが決まりました。最高賞とか、なんとか賞というのはないので、残るのは名誉。維持メンテナンスとかクリーニングとかも行かなきゃいけないし大変なだけども、その土地との関わり合いをまた何年間持つことができるというのが非常に嬉しい。予算の都合さえつくのであれば、どんどん残して、たくさん作っておきたい。そうすることによって、違う施設を見てもらうことができるし、また違った人たちが訪れてくれます。一か月の展示期間に2万人のお客さんが来てくれましたが、通年の開催となれば6万20万になっていくと思いますし、もっともっと色んな人に見てもらいたいと思いました。

瀬戸内全域見て、良かった作品の一つとさせていただいたのは嬉しいですし、「よしよし」という感じです。さっきも言いましたけれども、国際的に著名な作家さん達が関わっている展覧会で、僕の勝負の場所なわけです。ベネチア芸術祭に出た方が、約半数ぐらい、最高賞を取った人が何人もいて。今200人ぐらいの展覧会になってるんだけども、第1回は60人ぐらいだったんです。美術に関心のない人でも知ってそうな超スター作家が半分ぐらいいて、そんな中に僕の名前がぼこっと付いたのは、非常に嬉しかったですね。

(参加者3)

男木島に行った時に、民宿に泊まって、金沢から来ましたと言ったら、「眞壁先生知ってる？」と言われて、すごく嬉しそうに話していました。

(眞壁)

男木島は瀬戸内の芸術祭で一番成功した島だと思っています。直島とも全然違うんですけど。一番のニュースは、休校になった学校が復活したって事例なんです。それは日本中探してもそこしかない。人口が減少することによって子供がいなくなった島で学校が復活するということはあり得ないこ

とですよ。1世帯で大家族が引っ越してきてもダメで、4世帯で子供の数がトータル10人ぐらい必要で、それをクリアしないと、学校として復活することができないという条件が文科省にあるらしい。それを軽々とクリアすることができた。

かつては一旦島から離れた子供達が大人になっても、戻って来れなかったわけですよ、漁師以外の仕事がないから。だけど最近ではインターネットを通じて在宅での仕事でビジネスが成立しているから、島で住もうかとUターンしてきたり、元々は島に縁もゆかりもなかった人が芸術祭をきっかけに訪れて「なんて綺麗な島だ」と思ってIターンしてきた人もたくさんいます。平均年齢が7歳若返ったと言ってたかな。だけど人口は変わってないそうです。若い世代が入ってきて、上が亡くなっちゃって、180人くらい。だから、2010年に半年くらいいたんですけども、あの時に一緒に酒飲んで飯食ってた人達が、次行くといなかったりとか、普通で。嬉しい反面、悲しいことがたくさんありました。あまりにも高齢化が進んでいて。

(参加者3)

芸術祭とは別なのですが、眞壁先生が画家として絵を描くときに大切にしているテーマを教えてください。

(眞壁)

テーマはいつも同じです。「生」と「死」、「無」と「無限」、「混沌」と「秩序」という6つのキーワード。それはなぜそう思っているかと言うと、良い作品と出会った時、その6つの言葉が必ずある。美術館、ギャラリー、教会でもお寺でも、あらゆる場所でアートというものが存在してるんですけども、そのいずれかがあれば、いい作品。6つ揃ってればパーフェクト。1つでもあるとアート作品として成立してるという風に僕はジャッジしていて、1つもない作品というのは、本当につまらない。

案外6つのそのキーワードを手掛かりにして作品鑑賞を一般の人にしてもらおうと、現代美術の中で見るのは難しいけれども、このたった6つの言葉を、頭に思い描いて鑑賞すると、意外と紐解いて入っていくことができる。今度試してほしいと思います。

ちなみにパーフェクトと思えたのは、瀬戸内エリアで言うと、豊島の内藤礼というアーティストの作品が見事にビシャと来ていました。あとクリスチャンポルトンスキーの、《心臓音のアーカイブ》。もろそれはピツタンコだったので、推奨してる。普段アートに接しない人にも「アートを見たいから教えてください」と言われた時に、外れたことがない。6つのうち1つでもあるとまあまあいいですよ。ピカソが書いた絵、名画と言われているものを見たって、その6つキーワードのどれかが入っていると思う。

私小説的なことを垂れ流すように描いている絵は、なんかピンと来ないし、面白くないし、見せる必要もない。自分がコントロールできない、自然であったり、宇宙であったり、「死んだらどうなるんだろう」というのは、本当は宗教や哲学の学者たちが、色々考えることだと思うんだけど、アーティストと全く同じなんだなと。「何のために生きるのか」というのは我々の身近な問題だし、そういうところこそテーマにした方がいいんじゃないのかなと、この頃5〜6年くらい思っています。

(眞鍋)

実際のな話に戻ってしまいますが、このスタジオで瀬戸内

の作品を作ってもらったりしたじゃないですか。眞壁さんのように芸術祭に参加されている作家は金沢にはあまりいないですよ。眞壁さんタイプのアーティストが、金沢で生きていくというとき、実際にこういうスペースや湯涌創作の森がなかったらできなかった、そういう状況で作家として生きるために必死に戦ってるわけじゃないですか。

(眞壁)

大変苦労してます。

(眞鍋)

そこで、さらに「もっとこうであった方がいいな」という思いはいっぱいありますよね。若い作家も学生もいるし、それを支える人も今日この場にいるので、例えば間屋まちスタジオのこと、金沢自体のこと、今度はまた、奥能登国際芸術祭が始まりますので、そういうところで思ってるところがあれば語ってもらえませんか。

(眞壁)

金沢21世紀美術館との連携と、美大を変えること、あと美大と協力することだと思っています。若いアーティストたちの指導...というか先輩としての姿を見せられるし、関わらせること。途中で言ったような「こうすればうまくいく、または絶対失敗する」という経験値のノウハウを伝えたいと思う。今、美大の講師として3日間で徹底的に喋りまくってます。

神奈川県茅ヶ崎市に十数年間住んでいて、湘南エリアを自分の終のすみかにするつもりで非常に気に入ってはいたんですけども、2010年の芸術祭の後震災があって、事情があって金沢に戻ってきました。

瀬戸内で、人口百数十人の島でこれだけの注目を浴びることができるのだから、日本中どこでやったって出来るに決まってるじゃないですか。都会じゃなきゃ流行らないお店というのは、幻想ですよ。原宿に店を出さないとヒットしないとか。すごくダサイと思っていました。自分自身、高校出たらすぐに東京に出て、大都会幻想があった。ニューヨークとか北京とかドイツとか、すぐ留学する周りの連中もたくさんいたんだけど、ちょっとそこは踏みとどまったんですね。自分の住んでる地域をやりたいと思ったし、それが当時は神奈川県だったけど、今は瀬戸内を通過して、ルーツである自分の地元に戻ってきたわけです。そこには伝統文化もしつこいくらい濃いのがあって、それと戦うのが非常にしんどいと思ってはいますし、非常に重たい歴史がありすぎて想定してなかった事情も感じている。だけれども、先ほども言いましたように、日本中どこでもチャンスがあると思うし、金沢でやると決めたからには、形あるものを作っていきたい。瀬戸内海、沖縄、近場では福井とか、色んな所に割と大きな作品を作らせてもらってますけど、今の所まだ金沢にはなくて、まだそのハードルの高さは自分自身感じているし、手ごわいなと実は思っています。

そういった意味では自分もチャレンジで、なかなか「こうだ」というアドバイスができるほど偉くはないんですけども、「こうだったらいいんじゃないかな」という提案はダメ元で、色んな所でやっています。呼び方はもうどうでもよくて、ペインターだからと言って具象とか抽象とか分けるのは古いと思うし、作れるなら何でも受け入れます。そういう風に最近

は思うように心掛けていて、じゃないと金沢でやりづらいということもあります。

間屋まちスタジオは色々まだ問題があると思います。それほど市内中心が遠くはないんですけども、アクセスは車が無いと行きづらいとか、ちょっと殺風景だなとか。ここに観光客を呼ぶことも無理があると思うし。ダイレクトに招待しない限り、なかなか辿り着けなかったり。だけど入ってみたらこんなに大きなスペースがドーンとあるので、可能性はあると思いますし、こういったところがアーティスト村みたいな形にもしなっていければ。中国の北京にもアトリエ村みたいなのがたくさんあります。トップアーティストがいて、それに若いアーティストたちが集まって。パースの消失点までアトリエで繋がるようなエリアがあって、すごいギャップを感じましたね。

こういったエリアなら、アートがアートだけで閉じるんじゃないくて、違うジャンルの人たちとコミュニケーションして作っていくこともできそうですね。僕が建築家と一緒にやっているように、違うジャンルの方と合体することによって、違ったイノベーションが生まれてくるということは、どんどんやるべきだと思うし、閉じるのはもったいない。46万都市で身近にドアをノックすれば、すごく有名な力を持った人たちがたくさんいるので、繋いでいった方がいいと思います。

中途半端な都会では、街ですれ違っても挨拶しないですよ。だけど人口100数十人の島っていうのは、この人がどんな人かというのはみんなわかってる。普通に込み入った質問もするし、コミュニケーションもするんですけども、大都会じゃないくせに、ちょっと都会ぶっているのが金沢の嫌いなところ。そういったものを取っ払ってもっと田舎だと自覚すれば、ものすごくチャンスがあると思うし、金沢でしかないことというのが実現できるんじゃないかなという夢があります。多分みなさん、そう思ってるんじゃないかな。

結構ビックネームもいますよね。松井秀喜、本田圭佑とかね。一時代を築いた野球選手とかサッカープレイヤーがいて、哲学界のツートップの鈴木大拙、西田幾多郎がいて。それぞれのジャンルで秀でた人がいるんだけど、育てるともっとパワーアップするんじゃないですかね。昨日はたまたま医療とアートのこのシンポジウムがあったので、それも参加したんだけど、積極的にやっていけばいいと思うんです。建築家だけが病院作るんじゃないくて、そこに患者の立場になってどんな天井の壁の色にしようかというところから始めて、アーティストの意見を汲み取っていけば、もっといいものが作れるなと思っています。それはコンパクトシティだからできるし、これからもやっていきたいと思います。それがまあビジネスに繋がっていかないと続かないのですが。

(眞鍋)

そこが大事なポイントだと思います。

(眞壁)

助成金だけに頼るのも、芸術祭みたいな税金を使ったプロジェクトだけでもダメだから、民間を通していかに利益を産みながら続けていくかということも大事。観光でこれだけいっぱいお客さんが来てるんだから、旅館だったり飲食店だったり、そういうところとも積極的に関わっていくべきなんじゃないかなと思います。こんなところでよろしいですか。

(眞鍋)

予定の時間はだいぶ過ぎてますので、終わりにしたいと思います。眞壁さんありがとうございました。

<拍手>

(2017年1月14日)



《咸臨の家》2016、瀬戸内国際芸術祭(男木島)

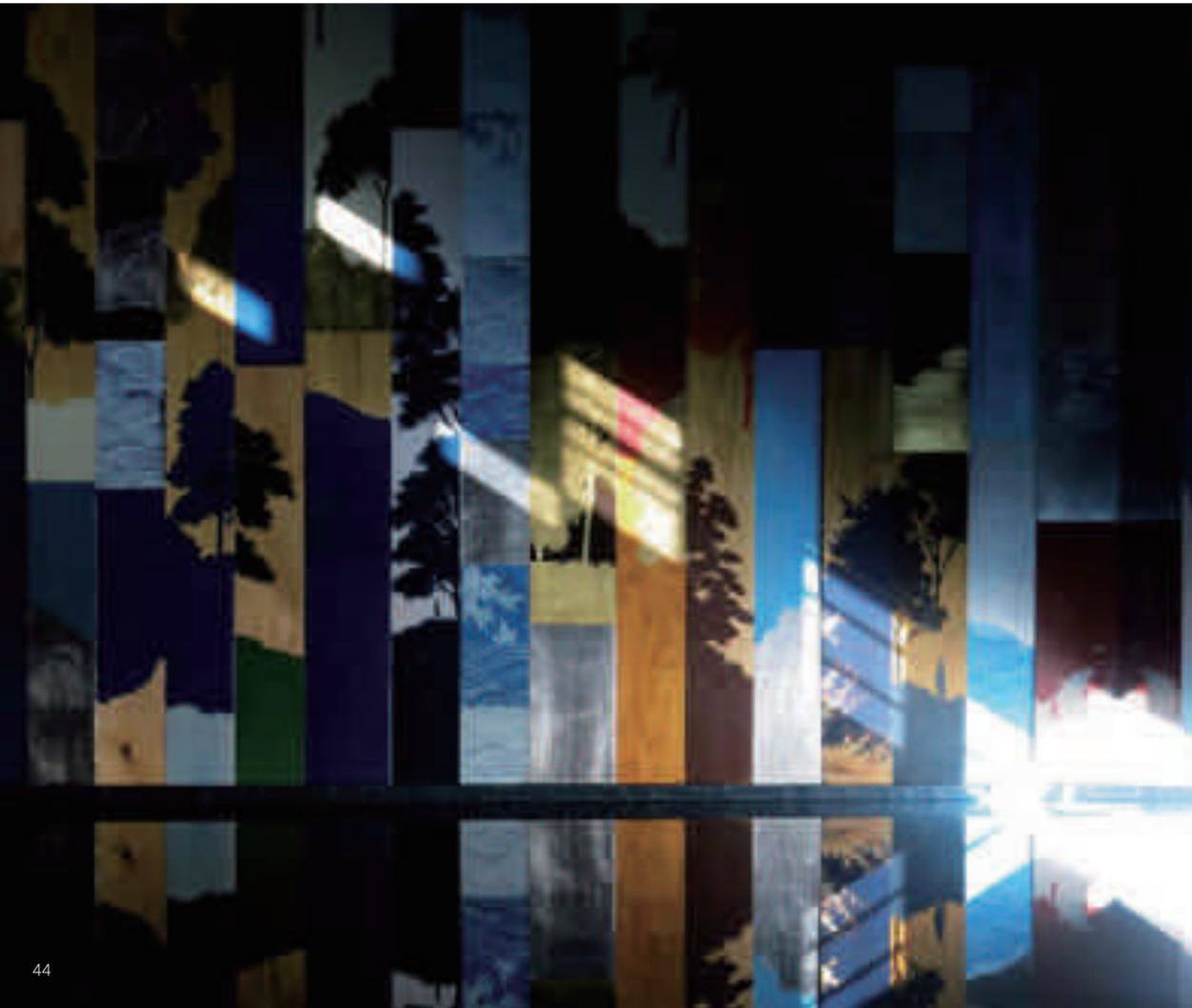


*1 物件を紹介された日、丸亀市役所、香川県庁、アートフロントギャラリーのスタッフと中へ入ってみる



*2 (上)うまくいっていない、ぎゅっとした矩形の絵画のような息苦しさがある
(下)7月上旬、隙間をあけ全体に板絵を行き渡らせ空気感が出てきた

*3 2016 芸術祭最終日、秋の乾いた空気の日差しは刺すような光線は作者の想像した意図を超えていた



問×美 2017

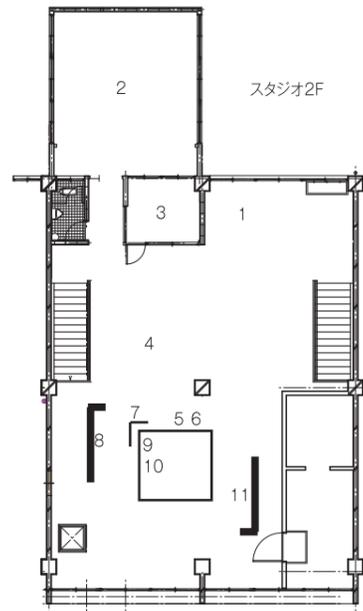
対立・分断から対話・融合へ

千利休作といわれる国宝「待庵」は、寺の軒を借り、雨戸の戸板を立てて茶室とした仮設の二畳がその原型だといわれています。明智光秀との山崎の合戦に秀吉とともに戦場を駆け巡った利休 - 「待庵」は利休と秀吉が戦場で人間性を求めて行った茶会から生まれたのでしょう。故に「待庵」は茶室の素形だといえます。いらぬものをすべて削ぎ落としたミニマルな形だからこそ持ち得る力強さがあります。

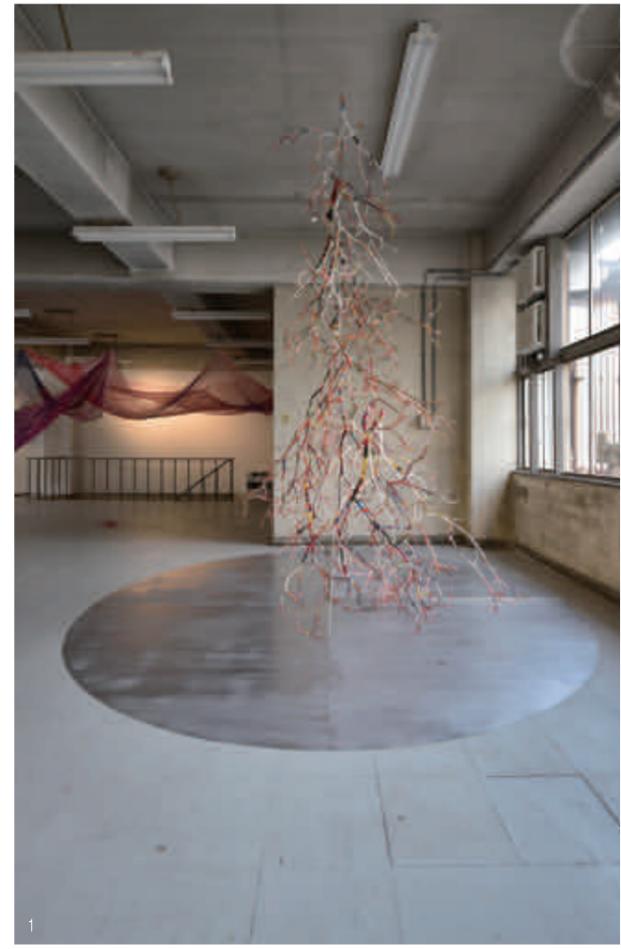
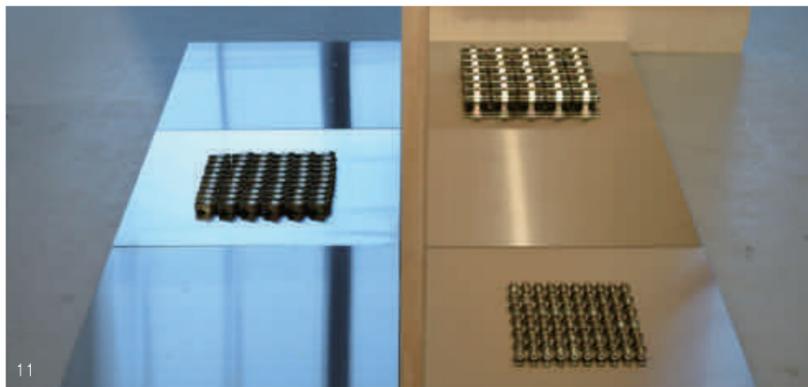
おこし絵からつくる問屋まちスタジオの「待庵」は、まさにその力を借りて、さまざまな対話を起こすことをめざしていました。もともとコミュニケーションの場であり、さまざまな対話を生み出す装置でもある茶室を、対話を通じて、お互いに対峙する異質でばらばらなものが融合する実験の場としたいと思いました。

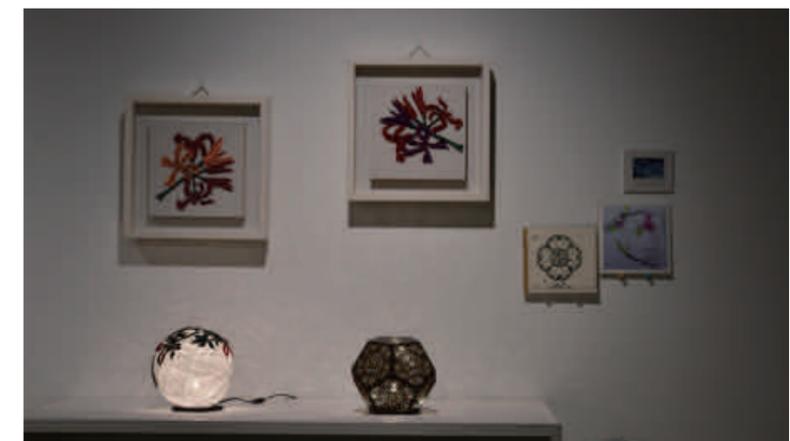
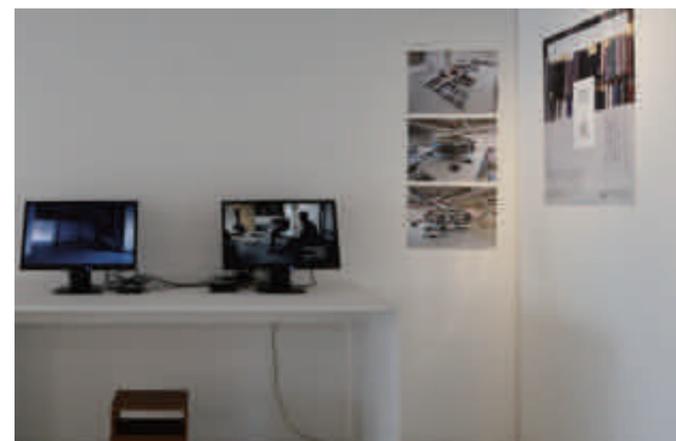
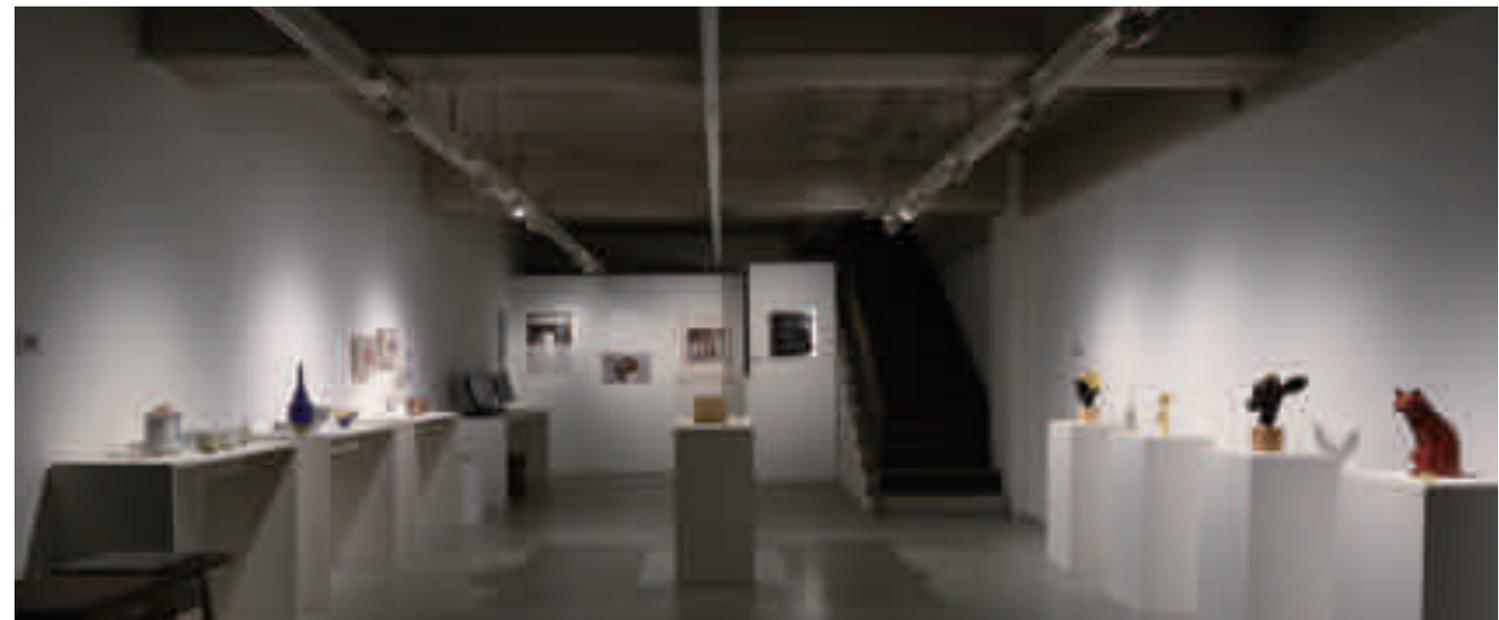
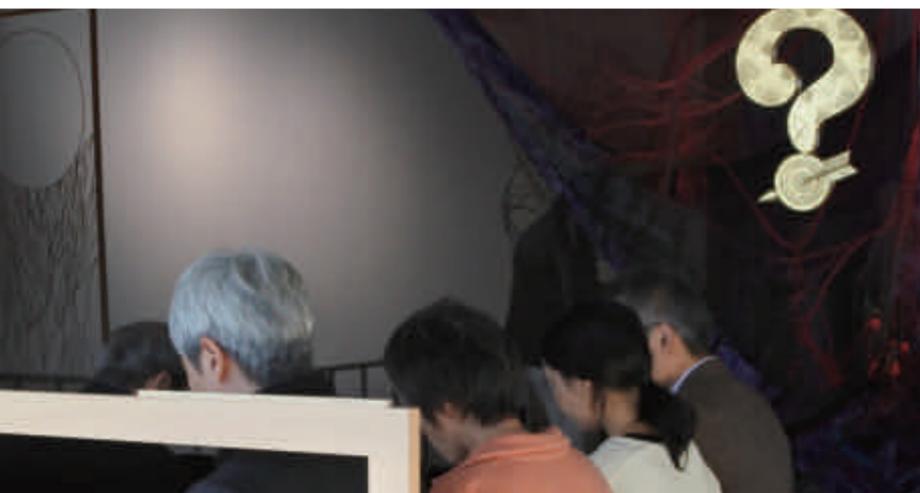
まず、ひとつ目の対話として「問屋と芸術」がありました。作家と工業製品をつなぎ、経済優先の問屋と感性優先の芸術の融合をめざしていました。問屋町で製造し、あるいは扱っている商品と各作家が対峙し、生みだされる作品 - そこから作家による商品、製品との対話が生まれました。ふたつ目に「人とひと」の対話がありました。茶会本来の目的で人々をつなぎ、問屋まちスタジオをアートファクトリーとする構想の組織づくりやネットワークづくりを行いました。対話を「もの」の象徴としておこし絵茶室を、また同様に「こと」の象徴としておこし絵茶会を設定しました。最後、みつ目の対話が「工芸と建築」です。かつて工芸的であった建築、空間における芸術的職人技が輝いた時代がありました。それらは機能的で装飾を排した意匠や合理的で手業による設えを排した近代以降の建築が失ってきたものです。ここでは、もう一度、建築に工芸・アートを引き戻す実験の場としたいと思いました。

なお、今回の企画は協働組合金沢問屋センター設立50周年と金沢美術工芸大学との連携協定調印7周年を記念し、問屋まちスタジオで開催するものでした。また、昨年度の問×美2016を引き継ぎ、その第二弾として展開するものでした。



- 1、2 庭 中瀬康志
- 3 月と池 岩井美佳
- 4 花 岩井美佳
- 5 花器 戸出雅彦
- 6 軸 伊能一三
- 7 風炉先 田中信行
- 8 壁 中瀬康志
- 9 釜 宮崎匠
- 10 炉縁 石森良隆
- 11 壁 真鍋淳朗





問×美2017
-おこし絵茶室で新しい問屋まちスタジオと工芸建築を考えるpart 2-

【会期】
2017年11月11日(土)-11月19日(日)
11時-18時 入場無料 会期中無休

【会場】
問屋まちスタジオ

【参加作家】
石森良隆・伊能一三・岩井美佳・戸出雅彦・
中瀬康志・真鍋淳朗・宮崎匠・坂本英之(ディレクション)

【主催】
問屋まちアートファクトリープロジェクト実行委員会

【制作協力】
田中信行

【素材・技術提供】
石川トヨペット株式会社金沢西店
株式会社アイネックス 株式会社コシハラ
株式会社東山商会 株式会社ほくつう
株式会社ヤギコーポレーション 川崎株式会社
泰和ゴム興業株式会社 塔島株式会社
ナカダ株式会社 北日商事株式会社
有限会社ネーミングこしの 有限会社吉野利工具

【助成】
いしかわ県民文化振興基金

【同時開催】
アートフェア…参加作家による作品展示
アーカイブ展…「問×美」3年間の活動実績を展示

【イベント】
①オープニングパーティー／いままるのおどり
11月12日(日)14時～
②茶会
11月12日(日)、19日(日)
両日ともに15時～、15時30分、16時、16時30分の
全4回
点前:山本宗茂(裏千家茶道教場主宰)
③クロージングパーティー／富田祥のチェロ独奏会
11月19日(日)17時～

宮崎 匠



「絵が苦手で…」と謙遜しながら、完成予想図を描いて下さる宮崎さん

雨が降る11月某日、彦三にある宮崎匠さんの制作場所にお邪魔しました。「金澤町家」に指定されるご実家の一区画。床は砂土、周りには代々受け継がれる木型や土型が置かれ、十何代と続く「寒雉釜」の歴史をひしひしと感じます。そんな中、笑顔で迎え入れてくれる宮崎さんに今回の展覧会とその出品作についてお話を伺いました。

Miyazaki Takumi Profile

1969年金沢市生まれ。14代宮崎寒雉に師事。約400年前、初代宮崎寒雉は能登国中居で鋳物業を営んだのち京都にて釜作りを学び、その後前田利常の御用釜師として金沢に呼び戻された。以来、「寒雉釜」は現在まで引き継がれている。



①庭を臨むガラスを黒板代わりにしている

②歴代の「宮崎寒雉」が使用してきた釜型

③直近の茶会イベントで出品した作品。獅子形の鑲付。イベントの趣旨に合わせて出品作を選定

Q. 鋳物を作る場所というイメージで来たので、もっと熱いところかと思っていましたが、わりとひんやりとしたところなんですね。床が砂！

——この砂は型の材料にもなります。今は火を焚いていないので涼しいですね。「この日に焚こう！」と決めたら、鉄の温度が1600℃まで上がるのに大体2時間弱かかり、そこから鋳込んで、量が足りなければまた鉄の温度が上がるのを待って…と、半日かかる作業になります。

Q. 制作した作品は、普段どのようなところで展示することが多いですか？

——複数人の作家が参加する展覧会に呼んでもらったり、茶会のイベントで作品を出してほしいと言われることもあります(画像③)。今月には百貨店での個展もあるのですが、そういうときは作品をたくさん用意する必要がありますね。

Q. 個人から制作依頼を受けることはほとんどないのですね。今回の展覧会はディレクターの坂本さんからオファーがあったかと思うのですが、話を聞いたときどう思われましたか？

——普段作っている釜とは違った、遊び心を生かせる作品を作れそうで、ワクワクしましたね！制作とは全く関係ないのですが、いつも町を歩いていてふと見つける、アスファルトから突然飛び出した状態のネジやサビ付いているのが大好きで、撮り溜めてこうしてSNSでアップしたりしているんです。

オファーをいただいたのが他の作家さんよりも少し後だったので問屋町の企業さんの廃材巡りには参加できませんでしたが、「協力企業一覧」を見せてもらったときに吉野利工具さんに「ネジ類」という項目があって、自分が好きなことを表に出せるような作品が作れるんじゃないかと思いました。

Q. 実際に問屋町に足を運んだとき、どんな印象を持ちましたか？

——実は、まだ吉野利さんに行っていなくて、この取材までに行けたらよかったのですが…。問屋町という場所自体は、その中にある歯医者

に行っているの、そんなに縁遠いところではないんです。スタジオの斜め前であってすぐ近く。でも、浅野川側からいつも入っていて、どんな企業があるのか、どんな町なのかということまで踏み込んだことはなかったですね。

Q. 今回、制作予定の作品の完成予想図を描いていただけませんか？

——絵は苦手です…こんな感じ(笑)(画像④)。土を焼き締めた型(画像⑤)にねじを埋め込んで、そこに鉄を流し込んで固めようと思っています。うまく接着するといいいのですが、もし1回失敗したらスケジュール的にギリギリ(笑)。

茶室の中でも、格別の存在感を放つ釜ができそうです。展示を楽しみにしています！今日はありがとうございました。



④本展覧会出品作品の完成予想図

⑤制作に使用する予定の素焼きした土型

⑥鑲付の型を実際に作成するところを拝見した

岩井 美佳 × 越野 勉 (有限会社ネーミングこしの 代表取締役)



これまでの刺繍製品をバックに、ネーミングこしのさん社内での打ち合わせ

今回の展覧会に、素材だけでなく「技術提供」という形でもご協力いただいているネーミングこしのさんと、初の刺繍作品でのコラボレーションを試みる岩井美佳さんとの打ち合わせにお邪魔させていただきました。展示作品だけではなく、今後製品化の可能性も見出せる試作品の打ち合わせも。このコラボをきっかけに発展していく新技術から目が離せません。(※新技術の詳細はここでは非公開となります。)

Iwai Mika Profile

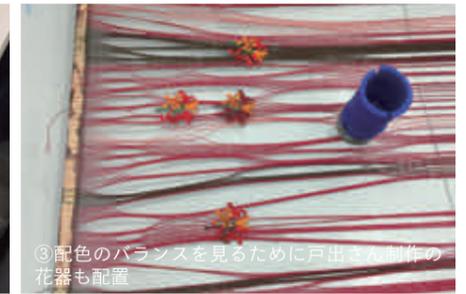
金沢美術工芸大学日本画専攻卒、同校工芸科染織コース修了。インスタレーション、舞台美術作家。日常のスケッチを元にした自作の映像とテキスタイルを用いて空間を構成する。光と影、透明感のある色彩の重なりをテーマとしている。<http://chordalcolors.com>



①問屋まちスタジオと同じ長屋に位置する「ネーミングこしの」



②新技術を使った刺繍。新作の肝となる



③配色のバランスを見るために戸出さん制作の花器も配置

Q.さて、今回3回目を迎える「問×美」ですが、お二人にはこれまでの企画にもご協力いただいていたのですか？

越野:実は、それほど(笑)。スタジオには何度か足を運んだことがあります。

岩井:私は問屋まちスタジオのことは、以前大きい作品を制作するときにアトリエとして一時的に使わせてもらったことがあったので、場所と存在を知っていました。人伝に、こういった企画があることもタイトルだけでは知りませんでしたね。

Q.岩井さんは、今回のオファーは坂本さんから？

岩井:そうですね。坂本先生とは以前町家アトリエを探していた時にお知り合いになりました。そのときは諸々で入居できず、でしたので、最初お電話をいただいたとき何の用件が見当もつきませんでしたね。

Q.展示の話がきたとき、企業さんとのコラボという点で、何か可能性を感じたり、やってみようと思ったことはありましたか？

岩井:最初は全然考えていなくて、問屋町の何かを使って作品を作ってくれませんか、と言われました。で、問屋町に何があるんだろうと思ってネットで検索していたらネーミングこしのさんのHPを見つけて、最初「協力企業一覧」の中になかったのですが、「どうしても行きたいところが一軒あるんです！」と申し出て、コンタクトを取っていただきました。会社に見学に来て、やっぱりすごかったです。そのとき私は「レースのような刺繍」を作りたいとずっとぐるぐる思っていて、その話をしに伺った数日後に、この新技術を使った刺繍(画像②)を見せていただいて、すごく感動してぜひこの技術を使った作品を作りたい、お願いしますということになりました。ちょうど真鍋先生から「何か1つ商品化を目指してみないか」という話をされていたところで、今こうして何とか形になってきた、という感じです。

Q.実は今回の展覧会をきっかけに、製品化の話が一番進んでいるのがこの岩井さん・越野さんなんです。企業×作家のコラボレーションのモ

デルケースとして、今後の進捗に期待がかかるそうです。越野さんは、岩井さんの作品を展覧会などでご覧になったことはあったのですか？

越野:実際にはないのですが、HPでは拝見しています。空間を使った大きな作品が多いですね。私は坂本先生・真鍋先生・中瀬先生とはもうスタジオ立ち上げの頃から面識はありまして、昔ある陶芸家の方の器の袱紗を手掛けたこともあったり、元々アートには興味があったんです。大量ロットのワッペンや刺繍受注もあります。小ロットでも高度なデータ作製が特に好きですね。今回の企画は非常に面白いと思いますし、芸術的な方向に行けることを楽しみにしています。

Q.仰る通り、岩井さんは今まで空間芸術という分野が中心だったのですが、今回は刺繍という新しい技法に挑戦していて、新しいビジュアルが見えてくるのではと期待しています。その中で、越野さんのご協力や影響というのが強く出てくるのではないかと。

越野:私が作るのパーツで、作品化されるのは岩井さんなので、いいものに仕上がることを私も楽しみにしています。

岩井:これから、現地(スタジオ)で刺繍の基礎になる糸を編んでいる状況を見ていただきたいと思っています。越野さんから色や配置のアドバイスがほしいので、引き続きぜひよろしくをお願いします！

色んな方の意見を聞きながら制作される岩井さんらしい進め方だと感じました。展示作品だけでなく、製品化される見込みのある試作品にも期待が膨らみます。この日、お二人の打ち合わせは問屋まちスタジオに場所を変えて、まだまだ続くのでした…！



④作品の展示イメージをボディランゲージで伝える岩井さん



⑤4mの太めの糸を丁寧に縦編みしていく



⑥天井からワイヤーで吊るし、展示初日朝まで続いた

戸出 雅彦



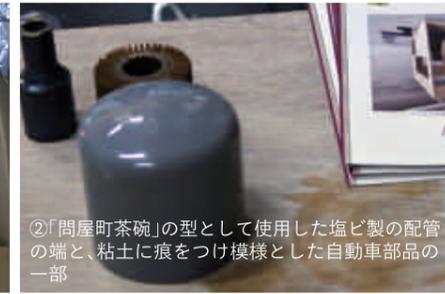
作品の進捗を伺いに、卯辰山の麓に位置する戸出さんのアトリエを訪れました。愛犬・コテツの散歩帰りの戸出さんに遭遇。外から直結で入れるアトリエには大きな電気窯。廃材巡りの際、今回の作家さんの中で一番多く廃材を手に入れてきた戸出さんに、今回の出品作について、企業と作家のコラボレーションの可能性についてお話し頂きました。

Toide Masahiko Profile

1964年金沢市生まれ、金沢美術工芸大学産業美術学科工芸デザイン卒業。金彩やカラフルな釉薬を用い、絵本や飼犬からインスピレーションを受けたファンタジックなモチーフを陶芸作品に描き出す。



①今回の参加作家中、最も多く廃材を手に入れていた



②「問屋町茶碗」の型として使用した塩ビ製の配管の端と、粘土に痕をつけ模様とした自動車部品の一部



③焼き上がった「問屋街茶碗」の内側に転写された「75」が工業製品らしさを思わせる

――このあたりが、今回問屋町から持ってきたものです(画像①)。

Q.たくさんありますね！

――この塩ビ製の配管の端を、型として使っています(画像②)。見つけた時に手にとって、「茶碗だな」と思いました。これに新聞紙とガーゼを巻いて、粘土の板を貼り付けて。焼くと小さくなるんですけどね。中に配管に刻印されている「75」という文字とマークが入っています(画像③)。小さいのでよく見ないとわかりませんが、一応「問屋町茶碗」というタイトルで。

あと、外側の意匠も廃材を使って痕をつけました。トントン叩いたり押し付けたりして。これは自動車部品の一部。これは監視カメラなんかを隠すものですが、ここに器を反対に置いて、作ったりしていました(笑)。あとはゴムの会社さんから固い紙か、発泡のような素材の部品をもらったので、それを型紙にしましたね。

Q.これをオープニングとクロージングのお茶会で実際に使用する予定ですね。元々打ち合わせでは、岩井さんの作品の花器となる青い器だけと聞いていました。

――あれは、すでに納品済みで会場にあります。茶会で使う予定のこの水指(画像④)と同様、ロクロで引いた状態の粘土を吉野利工具さんで買った牛刀(画像⑤)で半乾きのときにパサッと切って、それを逆さにして作りました。利休の赤い花器を参考にしています。切り口がパッサリ切れてますよね。

Q.作品として表に出てくるところだけでなく、制作過程で廃材や部品を活用したのですね。問屋町の企業とのコラボレーションという企画を聞いたとき、どう思いましたか？

――面白いと思いましたね。実際、問屋町にある会社の倉庫の中を見せてもらったりしたら入り組んでいて、作家としてすごく面白かったです(画像⑥)。それぞれの会社さんで後継者の問題などもあるのかも知れませんが、これからも本当に頑張ってほしいです。

Q.実際に廃材を使った作品を作ってみて、製品化や販売開拓を期待できそうなものはありましたか？

――道具類の発見はありますね。焼き物の道具は専門性が高いので、切れ味があまりよくなくても使い続けたりするのですが、例えばこの牛刀は十分に使えるなと思いましたね。廃材を活用したぴったりの作品、となるとどうしても絞られました。道具という点では陶芸に使えるものがまだまだあるように感じました。

工芸分野の作家さんは特に、専門的な道具を使うことが多いですもんね。そういう意味で、問屋町の企業さんの中から自分にぴったりの道具が見つかる場所を掘り出せたら、それはとても良い出会いになりそうです。戸出さん、今日はありがとうございました！



④愛犬ジョンが象徴的な水指。水漏れが心配だったが、茶会本番でも無事に使用された



⑤吉野利工具にて購入した牛刀



⑥吉野利工具、倉庫の一部(別日撮影)。奥に進めば進むほど掘り出し物が出てきそうな雰囲気、作家の好奇心を刺激する

伊能 一三



金沢市旭町の一角のマンションにあるアトリエは、かつてお住まいだった部屋をそのまま利用しており、東西からの光がたくさん入り込むとても爽やかな場所でした。伊能さんには、展示に関わる空間づくりの経緯と、作品への意気込みについてじっくりお話を伺いました。

Ino Ichizo Profile

1970年神奈川県生まれ、東京藝術大学大学院美術研究科漆芸専攻、金沢卯辰山工芸工房修了。主にいきものをモチーフとした作品を制作。漆独特の質感と丸みを帯びた愛らしいフォルムが作品に生命感を与える。



Q.今回の展示は、真鍋さんからお話がきたそうですね。

――そうですね。最初はとにかく「茶室を作る」と。ぼんやりとしていたんですが、茶室をよってたかってみんなでいじっておちゃくちなお茶室を作るというイメージでした。だから昨年作った茶室の壁に漆を塗ったり、タイルを貼りつけたり、そんなことをするのかと。でも現実問題として、漆を塗りたいと漆の匂いが出たり、お茶を飲む方が不快になるようなことになるのはどうかという疑問もありました。前回の展示のように、問屋町の企業から廃材を集めて、そのまま使えそうなものを使って茶室を組み立てようという計画もありました。話が二転三転する中で、会場の大きいスペースを生かすことを考えると、お茶室だけポツンとあっても寂しいし、空間ができていないと面白くないと思ったこともあって、例えばおこし絵茶室の見本から、開く絵本みたいな形をお花に見立てようといったアイデアもありました。そうすれば、インスタレーションとしてもびっくりさせられるかなと。花のように広げると歩く場所が制限されるという心配から、今度はパーツを分けて、壁を迷路みたいに配置したらどうかと。漆と関係なくインスタレーションの考え方で話し合っ、それ自体は本当に五里霧中と言う感じでしたね(笑)。

Q.茶室の中で、オブジェを作るようになったのはどういった経緯だったのでしょうか？

――最初からそれぞれの作家がどの役割を果たすのか、というのを言われていたわけではなかったです。僕の場合は自分で何かしたいというよりは「こういうのどうですか」と言われた方が取りかかりやすく、真鍋さんが「お軸はどうですか」と振って下さったのがきっかけでしたね。僕はお茶のことは全然わからないのですが、お軸というのはお茶会の中心になるテーマそのものだということを調べて、そのテーマがわかりやすいオブジェを漆で作ろうということになりました。軸というのは、大体掛け軸ですね。禅の発想だと、例えば「○△□」とか、そういう謎めいたものがあります。で、「問屋町」という言葉から、江戸時代の判じ絵みたいなものがよいのではないかと思ったんです。「問

は「？」で、「屋」は矢が突き刺さっている様子を(画像②)。で、50周年で五重丸。結局親父ギャグなんですけど(笑)。さらに、新聞で(協同組合金沢)問屋センターの理事長が「私たちのスローガンは『街力発信』です」という記事を見つけて、そのモノグラムを刻印しました(画像③)。

Q.これは木ですか？

――木に黒い漆の下地をしています。モノグラムは、木でできている粘土に字を入れてハンコに押し付けて、一段掘り下げています。黒地は2,3回塗っていて、もう1回塗ってから金箔を貼ります。

Q.お茶会で読み解ける人がいたら嬉しいですね。問屋と、50周年と。

――そうですね。昔、ヴィクトル・ユーゴーが自分の本の売れ行きを気にして書店宛に「？」だけの手紙を送って、書店からは「！」だけの手紙が返送されてきたという、そんな話もヒントになっています。

Q.例えば今回の展示のように、企業とコラボしたことはありましたか？

――いえ、ギャラリーからのお話で展示をすることがほとんどですね。でも一度ある地元企業の社内表彰のための楯を作ったことがありました。最近、新製品の開発やワンランク上の商品を作るために作家をマッチングするような団体の動きもあるみたいですし、そういう風に相性の良い会社さんと出会っていけば、作家が活躍できる場所も増えていくんじゃないかと思います。

伊能さんは、素材として廃材こそ使わなかったものの、展示会の趣旨をよく理解し、俯瞰的に作品に取りかかっていらっしゃいました。作品の発想も感服もの…！完成と展示を楽しみにしています！



④完成イメージの下書きが作品のすぐそばに

⑤金箔をかすれさせる案もあったそうだが、「永遠性」を象徴する総金箔で神々しい仕上げとなった

⑥オープニングの茶会にて、自身の作品を頭上にお茶を楽しむ伊能さん

○これまでの問屋まちスタジオの活動

これまでの7年間に亘る問屋まちスタジオの活動内容は、「アトリエ」として、先鋭的な現代美術作家の制作、活動、発表の場として広いスペースを活用し、金沢美大卒業生、修了生を中心に将来が囑望される作家の制作アトリエとして提供され、より個性的な創作へのサポートを行なっています。「ギャラリー」として、企画展示から金沢美大生のアートプログラムや研究成果報告の展示発表まで、自由で実験的な空間として機能しています。「アートプロジェクト」として、問屋町に関わる様々なアートプロジェクトの企画、提言を実施して、全国的にも非常に貴重な問屋町の要素を生かし、経済活動の面と芸術活動の面の両立から、この地域の人々がより良く生きるための環境づくりに積極的に活動しています。「A.I.R.」(アーティスト・イン・レジデンス)として、長期滞在制作ができるスペースを確保し、国内外のアーティスト、クリエイター、キュレーターなど様々な分野の人々の交流の拠点ともなっています。

○これから問屋まちスタジオに「アートファクトリー」を創設する理由と目的

これまでの活動を踏まえうえて、さらに問屋まちスタジオ内に「アートファクトリー」の機能を付加する試みを行った理由と目的は以下のとおりです。

石川、金沢には他の都市では見られない特質として高等教育機関や先端企業が数多く集積し、国内外から優秀な学生や研究者が集っています。伝統工芸、伝統芸能も盛んで文化水準が基から高いうえに、伝統文化を垣間見る複数の美術館や世界の最先端なアートを発信し受信する金沢21世紀美術館が存在しています。これまでそれぞれの組織が単体で行っている事業をネットワーク化しマッチングする役割を、この「アートファクトリー」が担えれば、石川、金沢に情報交換や情報提供が可能となるワンストップ型の交流拠点が実現します。

「アートファクトリー」の存在により、各機関や組織のネットワークの構築が促進され、クリエイティブな活動をサポートするために必要な情報収集が容易となり、他の都市では不可能な新規性の高い「手で作るものづくり」と「先端技術」が融合した異業種のマッチングによる石川、金沢独自のビジネスモデルへの挑戦が活発となります。その結果、国内外からの創造的な活動をめざす若き優秀な転入者のU・Iターンの受け皿となり、雇用創出に貢献することが期待できます。

その目的を歴史から学ぶとすれば、日本の美術史から古きことを知り、新しきことを始める良き先例として「光悦村」と「御細工所」があります。徳川時代初期に本阿弥光悦が徳川家康から与えられた京都の所領に日本全国から集めた優秀な職人の工房組織をつくり、後に光悦村と呼ばれる、俵屋宗達や尾形光琳が活躍した琳派を生み出す土台を造りました。また、加賀藩が金沢城内に創設した御細工所が現在の金沢が工芸王国となった所以であり、現代の光悦村、御細工所と称すべき組織づくりが問屋まちスタジオ内に「アートファクトリー」を創設する構想であり、まさに他の都市の追随を許さない石川、金沢独自の革新的なアートを活かしたビジネスモデルを生み出せるのが「アートファクトリー」です。

○問屋まちアートファクトリープロジェクト実行委員会における認定NPO法人金沢アートグミ、協同組合金沢問屋センター、金沢美術工芸大学の役割と分担業務

これまでの問屋まちスタジオの活動を継続させ、さらに「アートファクトリー」の構想を推進するために、2015年から2017年の3年間を通じて、いしかわ県民文化振興基金の助成金を得て、認定NPO法人金沢アートグミ、協同組合金沢問屋センター、金沢美術工芸大学の連携による「問屋まちアートファクトリープロジェクト実行委員会」を設立し、問屋まちスタジオ内に「アートファクトリー」の創設をめざす事業として「問×美2015、2016、2017」を行ってきました。

認定NPO法人金沢アートグミは、平成29年度から問屋まちスタジオで「アートファクトリー」の社会実験として試行している5名の金沢美術工芸大学の卒業・修了生、実習助手らによる公開制作、大人・子ども美術教室、金沢美術工芸大学の学生作品によるアートフェア、ワークショップなどの企画と運営および管理業務を分担しています。平成30年度のスタジオの活動及び「アートファクトリー」の年間スケジュールの作成にも関わっています。

協同組合金沢問屋センターは、センターが所有している問屋まちスタジオを無償で提供し、スタジオの年間活動経費の支出と問屋団地の企業からの素材・技術の提供や大学・作家と企業との共同研究を仲介し、また、各方面からの相談依頼の対応や定期的に行われる運営会議の事務局を担当しています。さらに、スタジオで開催されるアートフェアで展示される学生や作家の作品を問屋団地の企業関係者が購入できる事業も展開しています。

金沢美術工芸大学は、問屋まちスタジオの年間光熱費と通信費の支出とスタジオ内の備品整備のための予算を確保し、各プロジェクトに対応した教員・学生を派遣しています。さらに、担当教員がスタジオ運営のための外部資金を積極的に獲得して、これ

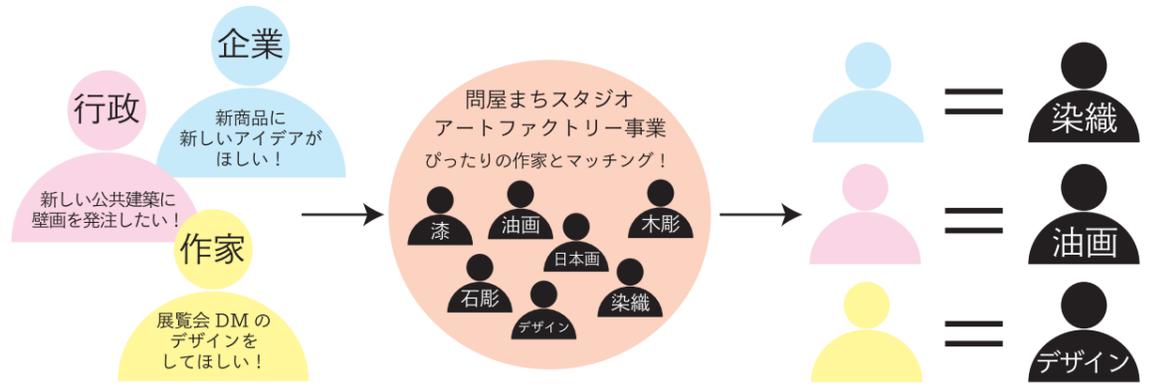
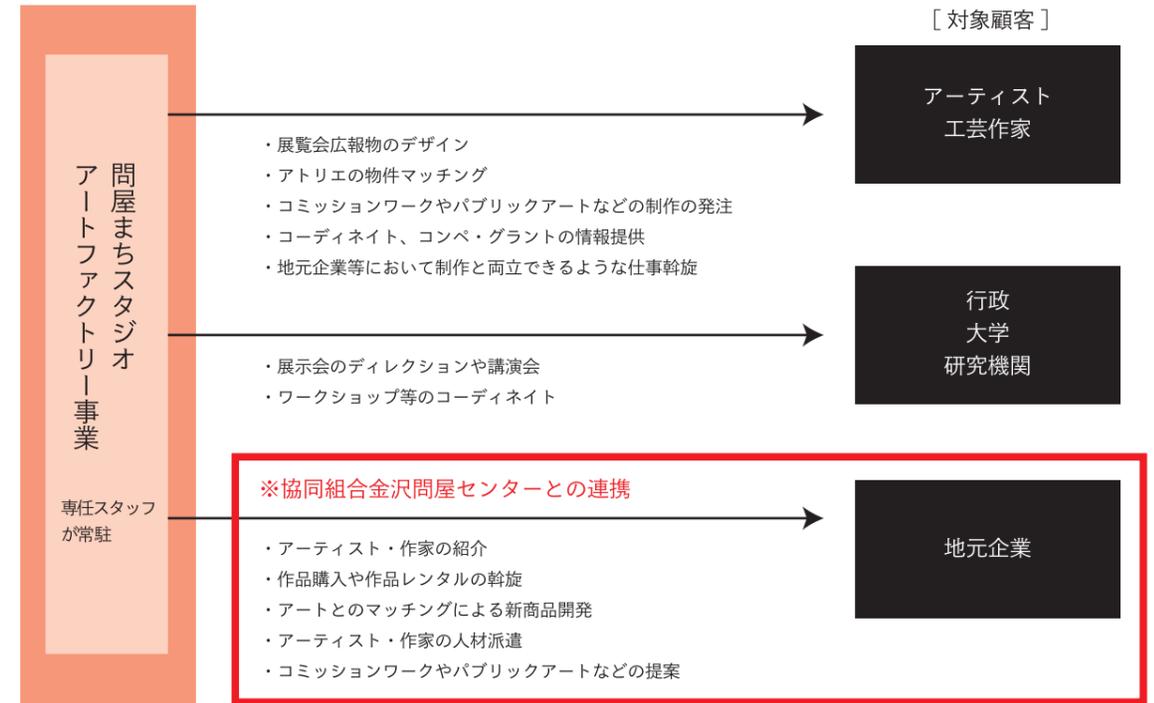


問屋まちスタジオアートファクトリー事業

〈目的〉

これまでの問屋まちスタジオの活動が継続され、さらに地域社会の文化資本の醸成に積極的に関わり、その基盤の上に新規の文化事業が生まれ、若者定着の促進やアートによる国際化を伴った地方創生の一翼を問屋まちスタジオが担えるために「アートファクトリー」の創設を提言する。

〈事業内容〉



〈事業の革新性〉

- ◆作家へのメリット：雇用や販売機会の増加によるアーティストの生きる場づくり
- ◆企業へのメリット：革新的な新商品開発／創造性のあるワークスペース／技術力と熱意のある若い人材との出会い
- ◆石川へのメリット：異業種マッチングによる独自のビジネスモデルへの挑戦が活発化 → U, I ターンの受け皿となり、雇用創出に貢献

まで数多くのプロジェクトが継続しています。また、Webサイトから情報を発信し、プロジェクトごとのプレスリリースの告知により新聞・テレビなどのマスメディアから取り上げられ、問屋まちスタジオの広報活動に貢献しています。

○想定している問屋まちスタジオ「アートファクトリー」の主な業務内容

情報交換や情報提供を行うワンストップ型交流拠点「アートファクトリー」の具体的な業務内容を以下のように想定しています。

①対象となる顧客として

- ・若きクリエイター(マネージメントを必要としているアーティスト・工芸作家)
- ・アウトソーシングを必要とする行政・大学・研究機関
- ・アートを取り込んだ新商品開発や事業化を図る地元企業
- ・アートを活かした環境や空間づくりを計画する公的機関、公共施設等

②主なサービス業務として

【クリエイター】展覧会広報物のデザイン/アトリエの物件マッチング/コミッションワークやパブリックアートなどの制作の発注とコーディネート/コンペ・グラントの情報提供/地元企業等において制作と両立できるような仕事斡旋

【行政・大学・研究機関】展示会のディレクションや講演会/ワークショップ等のコーディネート

【地元企業】アーティスト・作家の紹介/作品購入や作品レンタルの斡旋/アートとのマッチングによる新商品開発/アーティスト・作家の人材派遣/コミッションワークやパブリックアートなどの提案

③営業の方法として

人材確保・営業ツールを整備したのち、関係各社、関係機関へ呼び掛けます。また、協同組合金沢問屋センターともコラボレーションし、地元企業へのヒアリングを行ったのちにアーティストとのマッチングを図ります。

○提言として

問屋まちスタジオの「アートファクトリー」は、パブリックコンサルタントとしてアート&クラフトの新規開発とマーケティングの相談ができるワンストップ組織としての事務局機能を果たせて、さらに異業種間のマッチングによる萌芽(アートを活かしたビジネスモデル)が社会化できるようサポートし、その過程を記録・編集してアーカイブ化を行なって情報を共有し、さらに結実した成果(アートを取り込んだ新商品開発)をビジュアル化してWebサイト・SNSやマスメディアを通じて石川、金沢から国内外へ発信することを可能にさせます。

また、この3年間に亘って問屋まちスタジオで行われてきた展覧会、アートフェア、イベント、ワークショップ、講演会等の開催実績を総合的に考察すると、県や市の行政や大学、美術館、地元企業等を横断する組織体としての「アートファクトリー」のさらなる展開が見え始めていて、今後、ますます希求される北陸でのアートを活用した地域づくりに必要な諸条件が整い始めています。その一つの展開として、50年前に設立された、100社以上の企業が集積している「創って魅せる目きき街」をスローガンにしている問屋町で全国的に例のない都市型のビジネスとアートが融合したアートルイエンナーレ(3年に一度の国際的芸術祭)の開催を視野に入れた街づくり構想が立案でき、そのアートルイエンナーレを運営する事務局機能を問屋まちスタジオの「アートファクトリー」が担えます。なぜなら、この3年間に亘って行なってきた「問×美2015、2016、2017」は、既に小規模なアートルイエンナーレの形式とコンテンツを保持していて、これから必要なのは、県や市の行政や大学、美術館、地元企業及び新聞社やテレビ局などのマスメディアを横断する協働体制を維持する組織体の存在と、アートルイエンナーレ全体を統括する総合アートディレクターの招聘です。

また、「アートファクトリー」が行政等から外部業務委託として請け負える事業として、東京都千代田区の地域活性化政策として行われている「アーツ千代田3331」や京都市の若者定住化政策として取り組まれている「HAPS東山アーティスト・プレイスメント」やUKの都市再生化政策の拠点となったアートセンターである「チャプター・アーツ・センター」などの国内外の先行事例の歴史的背景および現況の調査研究とデータベース化が有ります。さらに、意を同じくする世界各地に存在している公的機関や高等研究機関との共同研究とネットワーク化を図り、「アートファクトリー」は、地域社会と世界を繋げる組織体としての活動が期待できます。

2017年に石川県珠洲市において「奥能登国際芸術祭2017」が開催されましたが、この「アートファクトリー」は、問屋まちスタジオが、この国際芸術祭との多角的な業務提携の受け皿となり、石川県内を南北に往還するアートの基軸を構成していく重要な活

動拠点の一つとして機能することを明白にさせます。例えば、国内外のアーティスト、クリエイター、キュレーターなど様々な分野の人々の交流事業としてのアーティスト・イン・レジデンスのアテンド業務や国際芸術祭や美術館での大がかりな作品制作に必要なアシスタント派遣業務や芸術作品の維持管理ができる専門家のコーディネートなど、その活動範囲は多岐に渡ります。これまでの問屋まちスタジオが行ってきた、将来を嘱望される若手アーティストをサポートする活動や地域の人々がより良く生きるための環境づくりの活動が継続され、さらに地域社会の文化資本の醸成に積極的にに関わり、その基盤の上に新規の文化産業が生まれ、若者定着の促進やアートによる国際化を伴った地方創生の一翼を問屋まちスタジオが担えるために「アートファクトリー」の創設を提言します。